
キレイの定義

天羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キレイの定義

【Nコード】

N0452V

【作者名】

天羽

【あらすじ】

召喚されたのは、女性の数が圧倒的に足りない世界。『美しい』を条件によばれたはずなのに、平々凡々可もなく不可もなくなわたしはいきなり理不尽な罵声を浴びせられる。

ふざけるなーっ！…と叫びたいところを魔女に拾われ、平和な老後の為にちまちま魔法を覚えていたわけなんです。何故に悪魔と天使に『キレイ』と評され『エサ』認定されたんでしよう？え？結婚？一妻多夫制？何それ、聞いてない！

登場人物

増えるたびに変動しますが、取り敢えず現時点までのご紹介。

現在地：ジャルジー

召喚先にいた生物：獣人族、蛇族、天使族、悪魔族（天使と悪魔は正確には鳥人族）

召喚先の特記事項：女性が1、男性が9の生態系異常地域。天使と悪魔が女の子の感情を食べてその子たちを壊してしまうため、絶対数が減少している。人間は200年前に召喚されただけだが、何故か彼女は感情を食べられても精神崩壊を起こさず、その子孫も同族に感情を提供できる貴重な存在になったため、ミヤも魂の美しさと貴重さで珍重されている。

春日居 かすがい 深夜 みよ 17歳と半年。

下校途中でいきなりファンタジーな世界に喚び出され、美しくないという理不尽な理由で嫁のもらい手がつかなかった。その後、魔女の元で魔術を仕込まれていたが、ある日悪魔の双子に花嫁兼工サとして強制連行される。

エイリス 女 推定40歳と少し。

グルリと渦を巻く角と、猫の目を90度傾けたような羊と同じ特徴を持った魔女。

別の世界から女を喚び出すことのできる召喚魔法を使える数少ない存在。

夫と死に別れ、息子は巣立っている。

アゼルニクス・クローザ 男 推定20代のどこか。
銀髪、漆黒の瞳、漆黒の翼を持つ悪魔族の公爵子息。
偶然出会ったミヤを娶るため、少々強引にエイリスの元から連れ去った。

ベリスバドンとは双子。

ベリスバドン・クローザ 男 推定20代のどこか。

金髪 漆黒の瞳、漆黒の翼を持つ悪魔族の公爵子息。

偶然であったミヤを娶るため、少々強引にエイリスの元から連れ去った。

アゼルニクスとは双子。

サンフォル・ブランダ 男 推定20代のどこか。

白に近い銀髪、群青の瞳、純白の翼を持つ天使族の公爵子息。

メトロストは双子。

メトロス・ブランダ 男 推定20代のどこか。

淡い金髪、群青の瞳、純白の翼を持つ天使族の公爵子息。

サンフォルとは双子。

カイク 男 推定10代の終わり。

漆黒の髪、漆黒の瞳、漆黒の翼を持つ悪魔族。

アゼルニクスとベリスバドンに使える執事。

ジャイロ 男 推定20代の真ん中あたり。

虎縞の髪、金の猫目。獣人の猫族。

エイリスの息子で魔術師。方向性は多少間違っているも、世界の行く末を憂いている。

スローネテス 男 推定20代後半のどっか。

黒髪、深紫目の隣の隣ハイジエントの現王の息子。

過去人間の血を取り入れた一族のためチート能力を有している。傲岸不遜。

リワン 男 推定30前後。

ハニーブロンドとこげ茶の瞳、優しい笑顔が売りの執事。

メトロスとサンフォルに仕えている。

オフィエール 女 推定20前後

水色の髪、空色の瞳の天使族現王の長女。

美人でメトロスが好き。

セフィーラ 女 推定17歳前後

緑の髪、こげ茶の瞳の天使族現王の次女。

美少女でサンフォルが好き。

1 召還直後に侮辱されました

蒸し暑い夏の夕暮れ、部活帰りのヨレヨレ状態で家を目指していた足下が、不意にふにやりと頼りない感触を伝えてきて、なんだつと意識をこらせば周囲は………ごめん、ちょっとワケわかんないんですけど？なにこの人口過密。

ぼんやり視線を上げた先には、人の背中があつた。で、隣見たら人の顎。反対側見たら人の肩。振り返りたいけど、そんだけのスペースはない。

いきなり満員電車に乗った風と申しましょうか、お正月の初詣状態と申しましょうか、ともかく右も左も人、人、人、なわけで。それもなにやら160あるわたしよりもかなり大きめな人ばかり。服装もデザイナーもびっくりな奇抜な感じなんですよ。全身タイツみたく体にペっとり張り付いて光沢のあるものから、南国ムード満点な布巻き付けただけのものまで、そりやまあ様々。

制服にジャージの入ったでっかいバックを持ったわたし、はつきり言つて浮いてます。その上この狭さじゃ、お邪魔になつてます、恐ろしく。

すみませんご迷惑かけてと、隣の人を見上げて…硬直しましたよ。だつてね、こっちに向けられた目が、目が、にゃんこの目、なんですて。ほらほら、あの縦にラインの入ったあれです。

声も出せず慌ててうつむいて再び硬直。

なんで足に水かきがついているんですかーっ！そのアキレス腱あたりに生えてるの、魚の背びれに見えますよ？！なんかもう、裸足で歩いている事実よりそっちのがよっぽどおかしいーっ！

意味不明な状況に無理矢理首を左右に振って、三度硬直です。

紙の色が…違った、髪の色がピーンクーっ！！！！しかもシヨッキングっ！事実もシヨッキングだけど、色もシヨッキングっ！ああっ！！！！あっちの人は角生えてるよっ！！しかもおでこからざっくり30センチほどって、あれじゃうつぶせになるのは難しいよね？！っ！かもっ、何に驚いてるか自分でもわかんないっ！！！！

………てな、静かな錯乱状態の中。耳が現状を打開するのやらしないのやら、よくわからない言葉を拾う。

「ああ、この娘は美しいな。オレはこの子にしよう」

「私はこの娘を。やはり尾がある方が美しい」

「一角か。本当は二角がよかったが、この際どちらでも良いか、おまえは美しいしな」

どういった判断基準なのかはよくわかりませんが『美しい』が飛び交っていることだけは、わかる。そしてそれを発しているのが男性の声だっというのも。

この辺りを総合して予想していくと、周囲にいる人たちはみんな女性のようなですね。そっぴや誰も彼も、やけに腰が括れてたような胸も大きかったような気がしてくるわけで。

一体全体なにごとなんだと、現状理解に努めようと努力しているわたしの前にふと影が落ちる。

なんだと首が痛くなるほどそらした先に、やけに耳の尖った狐目のばかでかい男がいて、こともあるうか人の顔を確かめるなり一言、とんでもない暴言を吐きやがりました。

「なんだ、この矮小な生き物は。あげくにみすぼらしく、見苦しい。美しさの欠片もないじゃないか」

人間、過ぎた侮辱を受けると咄嗟に言葉が出なくなるのだと知る。確かにこの中にいたらわたしは小さいだろうさ。ちんちくりんさ。だけど、矮小って何だ！詳しい意味まではうる覚えだけど、確かそれを人相手に使うときは馬鹿にしているときだった気がするぞっ！しかもみすばらしいとか見苦しいとか、確かに美人じゃないし騒がれるほどかわいくもないけど、並な顔してる…筈、多分。この辺は自己評価と、採点の甘い友人、親族評価だからあんま自信はないけど、それだっけいきなり罵倒されるほど自分が不細工だと言われたのは、初体験なんですけど？！

怒りのあまり怒鳴ってやろうかと思っただころを、誰かに腕を引っ張られてそいつの前から引き離された。

「ちよ、なに?!」

しかし、ともかく一矢報いてやらなきゃ気の済まないわたしはそれをふりほどこうと必死に藻掻いたんだけど、やっぱりここにも体格差が如実に表れてしまった。

どうやら頭一つ分は優にでっかい相手にずりずり荷物のように引きずられ、人混みの中心から草の生い茂る端っこへと強制移動させられる。

そこでやっと自分のいた場所の全貌を確認できたワケだけど、なんですか、これ？

周囲を木々に囲まれた中心に、2メートル四方の四角いコンクリートの板?いや、石か?わかんないけどそんなのがあって、周りには白いマントみたいなもんを頭からすっぽり被った性別不明な人間が8人立っている。

で、四角の中にはざっと見積もって20人強の女の人っぽいのとほぼ同数の男の人っぽい。

なんで『ばい』なのかって言ったら、さっき見たみたいに角があったり、髪がとんでもない色だったり、尻尾があったりして、既にこれを人間の 카테고리に入れていいのか甚だ疑問だったからなんだけども。

「へえ珍しい。あなたは一体何から進化したの？鳥とも獣とも魚とも違うようだけど」

あの混乱から連れ出してくれた人物は、高い女性の声でこんな風にわたしに聞いてきたのだ。

顔いっぱい疑問を乗せて振り返れば、成る程、彼女も頭に羊の角みたいなでっかいぐるぐるを2つ付けて、にゃんこの目が90度傾いた羊と同じ目をしてた。服装は石の上にいる人達よりは地味で、飾り気の無い足首までのワンピースと、ねずみ色の分厚いマントを着けている。

確かに、こうも動物っぽい人間の中に放り込まれたら、なんの特徴も無い人間は、目立つかもしれない。でも、何から進化したかって聞かれると、う〜ん？

「……………どっかの学者が言うには、元は単細胞のアメーバってところですかね。で、魚類を経て猿、だから獣？そこから尻尾やら毛やらを削ぎ落としたら人間というほ乳類のできあがりです。最もこれには諸説あって、は虫類から進化したんだとか、宇宙人が定住したんだとか、結構あやふやな出生なんですよ、わたし」

やけくそとばかりにっこり笑って説明すると、隣の彼女もにっこり笑う。

「ああ、人間。文献で知ってはいたけど見たのは初めてよ。へえ〜200年ぶりくらいね、人間が召還されたのって」

…今、聞いちゃいけないことを聞いた気がします。

笑顔でさっくり召還、とおっしゃいました？それってあれですか、ファンタジーの定番設定ですか。そんじゃ、ここは押さえとかなきゃなりませんよね。

「あの、わたし還れます？」

「還れないわ。残念ね」

へ〜そうなんだ。ふ〜ん。

………つーかさ、お願いだからそういうのはもうちょっと深刻に言ってくんないかな。すっぱり切らないで、胸が痛いから！

おかげで泣きわめきそびれたじゃないかと、ざわつく集団お見合いの連中を眺めながら、ぼんやり思った。

2 美しくないのあとはキレイです

かいつまんで説明された状況は、あんまり楽しいものじゃなかった。

現状としてこの世界（星？）には7つの大陸があり、海がある。その比率は5：5と地球人からするとちよつと羨ましい公平な分配である。

ただ、嬉しくないのが男女比率と人種の割合。

男9に対して女が1っておかしすぎだし。わたしのように『人間』に類される、つまり魚っぽくも獣っぽくも鳥っぽくもない存在が、たった一人自分だけつても全く納得しがたいところだ。

ま、それより納得できないのが召喚理由とやらだけだ。

これだけ男女比率が狂つてくると、子孫繁栄に当然ながら影響を及ぼす。それを案じた国の偉い方々は、発達した魔法で究極の方法を実践したんだとか。

『子供を産める女性の召喚』

それだけでもはあ？って感じなのに、その上『美しい』って条件までつけてるそう。人んちから女性を拉致してくるだけでも犯罪だつてのに、揚句に美人を連れ去るとは何たる卑怯！

……と、叫びながら気づいた。いきなり自分が罵倒された理由が。そんで今、喚び出されたこの場所に取り残されてる理由が。

「つまり、男性に選ばれなかったというわけですね？」

空き地と化したこの場所には、もう誰もいない。

皆さん納得できたのかどうかはともかく、迎えだか選びだかに来ていた男性陣に連れられて、どこぞに移動してしまっただから。

ブライドが傷つくんであんまり言いたくないんだけど、最後までわたしに興味を示した男の人はいなかった。一瞥しても何も見てないとも言いたげにさっと視線をそらしてそれまで。

もちろん、痛かったですよ。心が、もんのすごく。そこに追い打ちかけた人もいるしね。

「そうね。こちらでは下にも置かない扱いをされる女性であるにもかかわらず、貴女は誰にも選ばれなかったわけね」

こころおかしそうに笑いながら言う40がらみのこの女、悪魔かなんかですか？ちょうどそんな渦巻いた角つけたやつ、見たことあるよ、どっかの本でっ！

振り向きながら睨み付けてもなんのその、本人痛くもかゆくもないとばかりに見下ろして下さっている。

…そう、見下ろしてるワケよ、やっぱり。どんだけ身長が高いんだっての、誰も彼も！

「それにしても、ちっちゃいわ。すぐにも『子供が産める女性』っていうのも召還条件だったはずだけど、貴女は何から何まで規格外よね」

人の頭の中を読みでもしたのか、子供でも撫でるみたいに頭に手のひらを置いた女が吐いた暴言は、もうわたしに疲労感しか与えなかった。怒りなんてすっかり通り越して、溜息しか出てきやしない。

「『美しい』に関しては否定しません。確かに美人じゃないですか

らね。でも年齢に関しては大いに抗議させていたきたい。わたし
これでも17歳です。とつくに成長期も終わった、子供だって結婚
だってできる年齢です」

面倒くさいけど、この誤解だけはなんとしても解きたかったんで、
力なく否定してみると、しばしの間。そうね、たっぷり1分はかか
ったかな。

「えええつつ！！！嘘！！！」

驚かれるのに。ま、いいけどさ。細かいことは、この際。

あの、訳のわからない日から数えて半年…多分。正確な地球時間
ではないから、一応暦の上ってことでそんな風にカウントしていた。

なにしろ時計は一周すると50秒だったし、つまり一日は20時
間ってことで、途中から地球時間に換算するのが面倒になってま
ま、6ヶ月で半年ってことにしてみたのだ。

でもなあ、一年は14ヶ月あるから半年弱かなあ……ま、どうでもいいか、そんなこと。太陽や、月（地球から見えるのより小さいのが3つほどある）があつて、四季もあるし、大陸ごとに季節が微妙に違つていうから、広大な銀河のどっかの星なんですよ、きつと。

考えても仕方ないことを頭の隅においやつて、強くなり始めた日差しに帽子のつばを下げると、日課になつていている買い出しに向かうべく、石畳を急いだ。

結局あの日、置き去りにされたわたしを拾つてくれたのは何故かあそこにいた女性、魔女エイリスで、当初はそんな彼女がたとえ角付けてようが目玉が羊だろうが天使に見えるくらい感謝したもんだけど、事実を知つちゃうと蹴り倒したくなるほどの怒りが湧いてきたのだった。

だって、件の召喚魔法とやら、発動させた首謀者はエイリス本人だつたんだから！

彼女は自分が招いた事態を隠して善人面してわたしを引き取つたあげく『1人で生きていくためには手に職をつけるのよ！』とか言つてその後の長い冬をずーっと魔法を教え込むことに使つたのだ。確かに、おかげで魔法は使えるようになりましたとも。なにしろ必死だったからね、17でお嫁のもらい手が無いことが決定されるんじゃ、死にものぐるいにもなるつて言うのさ。老後の衣食住確保のために。

そうして初夏ともいえる季節になつた先頃、もう魔法以外で生計を立てるなんて考えられなくなつたわたしに奴はネタばらしをしたわけだ。

『実はね、あの魔法を扱える魔術師は大陸でも数人しかいないのよ。あたしもそのうちの1人。…え？これ見よがしに突っ立てた8人の男？あれは魔力を提供させるために配置してた、言うなれば燃料庫みたいなものね』

ホホホ、とか。上品ぶって笑って見せても許さないから。ついでにその後が続いた台詞には、うっかり逆上して覚えたての氷の刃をお見舞いしちゃったわ。

『息子も独立して、旦那も死んで、そろそろあたしも後継者育てのんびりしたいなあって思ってたところで運良く引き取り手の無い召還娘を拾ったでしょ？ラッキーって思っちゃったわよ。なにしろ手間はかからないし、あの魔法陣から出てくる娘達は全員大なり小なり魔力を持ってるんだから、お買い得もいいところ！』

人をスーパーの見切り品みたいに言うんじゃない！！

…って、怒鳴りたかったけど、実際は見切り品以下の身としてはぐうの音も出ない。なにしろあれから街にだっているいろんな理由で出ているし、圧倒的多数な男性（なにやら突っ込みどころ満載な角やら鱗やら付けた連中）にも会ってるはずなのに、ナンパすらされたことが無い。声かけられてもせいぜいが、

『小さいのにお使い、えらいな』

とまあ、子供を褒めるおっちゃんがいいところ。

腹は立つが確かにエイリスの言うことは間違っていない。確かにわたしは孤独な老後決定なんだろう。

そんなわけで、今日もお使い頑張るのです。帰ってから魔法のお

勉強も頑張るのです。

半ばやけになりながらも、てくてく商店街に向かっていたわたしですが。

『バツシャーンっ』

派手な効果音と共に、魔力車（運転者の魔力で動く馬車風の乗り物）に水たまりの水を引っかけられた辺りで、17年しか生きていない人生にちよっぴり嫌気がさしたのが、現実だ。

「なんなのさ、一体」

頭から水滴を落としつつ、吐息混じりに呟いて犯人を睨み付ければ、怨念が通じたのか魔力車がピタリと前方数メートルほどで止まる。

謝ってくれるのかな？それともあめ玉でもくれる？

…可能性としちゃ、後者の方があかな。

なんて考えながら開いた扉から出てきた人物を見て、目玉が飛び出るかと思うくらい驚いた。

太陽の金と、月の銀。

長く伸ばされた髪がそんな対照的な色をしている男が2人、優雅な動作でこっちに向かってくる。だんだん近くなる彼等の顔は恐ろしく整っていてその上うり二つだ。耳の先が尖っているから多分、獣系の人たちなんだろうと推察できた。

浅黒い肌の色は地球でいうならラテン系のそれで、瞳はどちらも闇を写し取ったかのような漆黒。2メートル近い体軀はけれど細身で、均整のとれたその体は中世の貴族風衣装がこの上なく似合っていた。

美人ばかりを喚びつけて交配しているせいか比較的美しい人の多いこの世界でも、希に見る美形が目の前にいるのだからちよつとばかり間抜け面で見とれても許してほしい。

「大丈夫ですか？申し訳ない」

銀色の人がシミ一つ無いハンカチでわたしの服を拭おうとしたものだから、慌てて手の届かない後ろへ半歩、下がってしまった。冗談じゃ無い。そんなものを汚したら、夢見が悪くてしょうが無い。

「…あの？」

不審げに眉をひそめた男の人に、お気になさらずと手でストツブマークを作ると短い呪文を唱えて指を振る。するとたちまち衣服は乾いて、ご丁寧にはねていた泥までキレイに消えた。

最近習得したばかりの、浄化の呪文・改だ。…決して、洗濯するのが面倒で、呪文を改造したわけじゃ無いからね？ただ、ほら、不便は人に発明をさせるのだよ、うん。

そんなこんなを呆然と眺めていた2人は、心底感心したように言いましたとさ。

「えらいですね、小さいのに魔女なんて」

「本当に、まだ子供なのに」

またか、そうなのか、やっぱり子供定義なのか。

がつくりと肩を落として、でもここだけは否定せずにいられないんですよ、わたしは。

「小さいけど、小さくないんで。もう17歳と半分ちよいを数えました。既に18に近い年齢です」

溜息混じりにもう幾度繰り返したかわからない台詞を繰り返す。
なんか結婚できないのって、美醜以前に年齢が関係している気がしてならないんですけど？もしかしてロリコン探せば結婚できるんじゃないですかね、わたし。

そう落胆する存在に再び驚いた後、そっくりさんは今度は問いかけを投げてきた。

「君、召還されたんですか？」

「君、名前は？」

同じ顔してるんだから、質問も同じならいっぺん答えるるだけですむんだけどなあ。ちよつと面倒。

「はい、召還されました。名前はミヤです」

けれど律儀なわたしはきつちり答えて、また罵倒されるのかなあなんて暢気に考えていた。

いい加減、『美しくない』と言われることに慣れちゃったのだ。
羽根やら目玉やら他の種族の特徴持った方々の美醜は未だによくわからないけど、たまあに目の前の方々のようなほとんどの人間に近い人たちも見かける。彼等は地球にいたらイケメン枠、美人モデル枠、確実な容姿の持ち主で、自分がちんちくりんの凡人だといつも再認識させられるのだ。その上、召還されたと答えれば次に続く台詞は決まってる。

「へえ、だからキレイなんですね」

そうそう、こんな感じで貶され……ないぞ？あれ？この人達、目は正常???

訝しむ視線を綺麗にハモった2人に向ければ、彼等はわたしをマジマジ見ながら再び微笑んだ。

「うん、キレイ」

「本当にキレイだ」

……聞き慣れない言葉は、耳に優しくないです。しかも美人じゃ無いことを自覚している人間にこう何度も繰り返し言われちゃあ、それが嫌みだつてことに気づきます。

ので、言つてやりましたとも。

「バカにしないで下さい!!」

ふんつと踵を返して、来た道を戻りました。全力疾走で。

多分これは『敗走』とか『言い逃げ』とか言われる類いのものと自覚しながら。

3 わたしの人権はないのがデフォルトのようです

憤慨しながら家に戻ったわたしは、言いつけられた物を買ってこなかったことを怒ったエイリスに再び外に放り出され、お使いを完遂するまでお家に入れてもらえなかった。

あの女、やっぱり本物の悪魔に違いない。

『路上でバカにされた』事件から4日後、ぐつつぐつと魔女特製怪しい惚れ薬を制作しながらそんなことを再確認していた時、1つ向こうの部屋から魔女が客の対応をしている声が聞こえてきた。

石造りの家は思いの外、防音性が高い。もしかしたら科学より遙かに魔法が発達しているこの世界のことだから、家全体に防音魔法でもかけてるのかもしれないけれど、詳細はともかく玄関先の会話などほとんど聞こえてこないに等しい部屋の中は来客があるうと無かるうと聞き耳を立てることすらままならない。だから外界のことはほっといてひたすら鍋をかき回していた。

…とうか、言わせてもらえれば、この家を訪れるような客は碌な注文をしてこないから会いたくないってのが本音だ。

数少ないこの星生まれの女性を巡って、やれ恋敵を呪い殺せだの、相手が自分の意のままになる魔法をかけるだの、汚いことこの上ない本音を余すこと無く吐露してくれるもんだから、聞くに堪えない。しかもそれを言うのがイケメンとくれば、尚いっそう不快感は上昇する。

初対面の女性を『美しくない』って蔑むほど自分の姿形に自信を持ってゐるなら、姑息な手段に頼らず自力で女の1人や2人や3人お

としてみせろつてのよ。ま、あの場にいなかった男相手にこんなこと思ってるんだから、八つ当たりなんだけどさ、でも腹は立つのだから、10人並なわたしは。

けれど、稼がなきゃ食べていけないことも知っている。なんとも世知辛い世の中を嘆きつつ、今日も惚れ薬をせつせと作る。ああバカらしいと思いつつも、結構強力なそれをおバカさん達に売りつけるためにせつせと働くのだ。

「ミヤ」

だからエイリスが部屋に入ってきた時、顔も上げずに答えた。

「はいはい、もうちょっと待ってもらって下さいな。後はこの正体不明な生物の干物を潰して入れたら出来上がりですからね」

よくよく見ると小ぶりの山椒魚に似ている気がする生き物は、よくよく見ちゃいけないんだってことを割と早くから知ったわたしは（気味が悪くて放り投げそうになるから）、指2本でつまみ上げたそれをすり鉢に放り込む。

はて播り粉木はどこだったかと、伸ばした手はしかし途中で捕まされた。

人に仕事を命じるとして邪魔するとはいい度胸じゃ無いかと、魔女を睨み付けた…ところで固まる。

「こんにちは、またお目にかかれましたね」

エイリスじゃ、なかった。これはあの時の金色の人だ。

「いろいろ用意するのに手間取って、迎えにくるのが遅くなっています」

みません」

反対側を向けば銀色の人。

相変わらすそっくりな顔で人を両側から挟むと、彼等は裏がある
と疑いたくなる爽やかな笑みで硬直するわたしをのぞき込んできた。
やっぱり、あれ?!あの一件が理由で来たわけだよね?!

「ご、ごめんなさい!言い逃げしてすみません、『美しい』人た
ちに逆らってごめんなさい!もうしないからどうぞお許しを!」

ここ半年でいろんなことがトラウマになってるもんだから、ひた
すら謝った。召還された美しくない者はどえらい勢いで蔑まれ軽ん
じられると身をもって知ってるのに、なんで軽はずみに言い逃げな
んてかましたんだか。ああ、4日前の自分を殴りに行きたい!

90度超して120度くらいの勢いで体を折り曲げたわたしは、
背中から届いた盛大な溜息にぴくりを頬を引き攣らせた。

あの方角はエイリス!あの女、弟子を助けるどころか溜息って何
?!『本当に困った娘なんです』とか言って自己保身を計ろうと
か思ってる?!

頭を下げたままひっくり返った視界から睨み上げると、羊な魔女
は腕組んで顎に指を置いた格好付けスタイルで、あきれた視線をこ
っちに送ってきた。

「人の話はちゃんと聞きなさいって、耳にタコができるくらい注意
してたつてのに、このバカ弟子は理解しちやいなかったのね」

失礼なっ!と言ってやろうにも頭がひっくり返ってるせいで上手
く喋れない。なんで仕方なく続きを聞く羽目になったんだけど。

「この方達は『迎えにくるのが遅くなった』って言ったでしょう?」

あんたの無礼に憤慨して怒鳴り込んできたわけじゃないわ。あたしから弟子を奪いに来たのよ」

なにそれ。奪う？

上手く理解できずにそろそろ顔を上げると、漆黒の目が2対、緩やかな三日月を描いてわたしを見る。

……古くもない記憶を掘り起こしてよくよく考えてみれば、確かに銀色の人がそんなこと言ってた。な、うん。金色の人も柔らかな口調だったし。

でもそれがなんでエイリスからわたしを取り上げることになるのか全くわからない。とんと理解できない。

眉根を寄せて首を傾げると、金色の人が微笑みながら教えてくれた。

「召還された女性に対して、数多い男達が自由に貰い受ける権利を有する。これは法で決められた貴女方の基本的処遇です。つまり、我々がミヤを望めば魔女は貴女を引き渡すほかない」

今さらっと人権無視な発言がありませんでしたか？

あんまりひどいことを当然のように宣言されて、更にわたしの肩間に皺が寄る。

「我々が貴女の所有権を申請したんですよ。ですが1年に1度の召還式から半年も経ってしまっている。しかも既に魔女が引き取り手のない娘として所有権を獲得していたものですから、なかなか許可が下りなくて遅くなってしまいました」

いやいやいや、所有と違って家畜やペットじゃないんだからそういうのありなんですか？

疑問いっぱい顔で見上げて当たり前前なこのように言い切っ

た人たちの表情は変わらない。むしろ混乱しているわたしの方がおかしいとも思ってるんじゃないかって表情だ。

助けを求めるように振り返ると、エイリスが苦虫をかみつぶしたような顔でまた長い長い溜息をついた。

「まさか、ミヤみたいな娘を欲する連中が気軽に下町に現れるなんてねえ。予想してなかっただけに抜かったわ」

「違うし。わたしが知りたいのはそこじゃなくて、基本的人権についてなんですけど？」

誤魔化そうとして微妙に核心から話しをそらした魔女を強引に引っ張り戻す。

伊達に半年も一緒にいたわけじゃない。この人が都合の悪いことを煙に巻く手段はいつも一緒。主題のすり替えなんだから、簡単に騙されたりしない。

顎をしゃくるって偉そうな態度で早く話せと促すと、小さく舌打ちしたエイリスは嫌々隠していた事実を語り始めた。

「召還は不足している女を補うために行うもの。喚ばれた女性は国家の財産であり、子を成すための重要な駒。欲する男がいれば無条件で渡さなければならぬし、数人で取り合う羽目になった場合、男の財力と権力がある方に下賜される。…わかるでしょ？下賜されるって表現からもあんたたちに選択権がないってことが。生きた商品って扱いなよ、召喚された女は」

言い切られ、やっぱりかと思う反面、ふざけるなと怒りが湧く。そして、気づいた。

いい加減な魔女だと思っていたが、実は彼女にわたしは護られていたんだと。

好きでもない男に無理やり連れ去られるより、一生独身でも自由に暮らせるほうがいいに決まっている。そうしてエイリスは自立するための手段として魔術まで教え込んでくれていたのだから、きちんとわたしの人権を認めてくれていたのだ。
少なくとも、この世界の誰よりも。

魔女は、黙って立っている。さっきと同じような苦渋にあふれた顔をして。悔しさを滲ませながら。

「まったく…人がせつかく育てた弟子を、この国の連中ときたら…」
呟きながら彼女の視線はわたしの背後に向けられていた。
金と銀、似すぎるほど似すぎた2人に。

「これほどキレイなものを、隠しおおせると思ったなんて愚かです」
「ええ。奴らより先に私たちが見つけられてよかった」

相変わらず、彼らの言うことはわからないことだらけだ。
なんでわたしを『キレイ』っていうのか、奴らって誰なのか。

「ご冗談を。どちらに見つかつたとしてもこの子にとっては決して幸せなものじゃないでしょう？だから、魔女にしてしまおうと思っていたのに」

いつにない強い口調のエイリスに、自分の未来に立ち込める暗雲を垣間見た気がしたのだが、それは強制的にかき消される。

軽々と子供でも抱き上げるみたいに銀の人に捕まってしまったから。

それから半年の間に増えた自分の物をまとめる時間ももらえず、わたしはようやく住み慣れてきたエイリスの家を後にした。

魔力車に乗る前に見た、
魔女の歪んだ笑顔は多分一生、
頭から離れないと思う。

4 悪魔に会いました エサ認定されました

歩き慣れていた街が、下層に属する人たちが住む場所なのだを知ったのは、魔力車の窓から見える風景が一変した時だった。

元々魔力車は操り手の魔力で走るため、回転する車輪がほんの少し地面から浮いていて、あまり衝撃を拾ったりしないのだけれど、それでも急に全く振動がなくなれば何かあったのかと思わず外を覗いてしまうものだ。座ったわたしには少々高い位置に付けられている窓にうんせとしがみついて、驚いた。

1メートルほどしかなかった道が急にその倍以上の広さになり、歩道を挟んだ町並みは小綺麗な店が軒を連ねている。

あの街で見る石畳は、所々欠けたり剥がれたりしたみずばらしいものだったのに、こちらに敷かれているのはタイルと見まごう光沢を放った、カラフルで大ぶりの石板だ。それが歩道にまで施され、道行く人はわたしと同じ中世風のロングドレスではあるが、デザインや生地は質、なによりレースなどがふんだんに使われた華やかなものが多い。時折見かける使用人風の人たちも、メイドですと一目でわかるような上質なお仕着せだった。

…でも、メイドカフェのお姉さん方のようにミニスカートや絶対領域は存在してないんで、ちょっとだけ残念に思ったりもして。だって、膝上10センチが当たり前な制服を着用していた身としては、こっちの服は動きづらくて歩きにくいんだもん。できるなら後30センチはスカートの裾を切りたいとこなのよ。
エイリスに怒られるから、我慢してたけど。

ふと、本当は優しかった魔女の顔を思い出して胸が痛くなった。

結局まともなお別れさえ言えなくて、残っている記憶と言えは裏でこっそり悪口言ったり、本人目の前に毒づいたりしたことだけだ。せめて、ありがとうって、今までお世話になりましたって、言いたかったのに。

そこまで考えて、目の前に並んでる同じ顔を軽く睨む。拒否権がないのは短い会話で充分わかったけれど、挨拶する時間くらいくれたってよかったのに、と。

でも相手はどこ吹く風。にこにこ不気味なほどご機嫌で、わたしを見てまた繰り返すのだ。

「ああ、なんてキレイなんでしょう」

「本当に、すぐにでもむさぼりたくなるほどにキレイです」

……自分に自惚れられるほど無駄な自信があったなら、この手の言葉に『当然よ』とか答えられたんだろうなあ。ただし、言った相手の容姿がこっちより劣っているのが前提ですが。

つまり、何言ってるんだこの人達はと訝しむことはあっても、真に受けて嬉しくなることは決してないこの台詞。むしろ、痛いし寒い。背筋に悪寒が走りました。

ってことで、盛大に顔を顰めて、並んだ顔に舌を出す。

「お宅に鏡はないんですか？明らかにそっちの方が綺麗でしょうに。わたしをバカにしているんですか？それなら理解できるんで納得ですが、それでもむさぼるって表現はいかなものでしょう。エサじゃないんだから、むさぼっちゃダメでしょう。せめて撫で回す程度に留めて下さい」

言い切って、あくまずかったかなとぼんやり思う。

撫で回すんだって良くないわ。愛でるくらいが丁度いい愛情表現

じゃないか？

しまったと横を向いて聞こえない程度の舌打ちをすれば、きょとんとして2人は真顔でむさぼるで正しいです、とかほざいてる。

「キレイな魂は汚して傷つけて、そこからあふれ出す闇をむさぼるのが美味なのですよ」

「そうそう。痛みを知らない魂は簡単に血を流すんです。昏く濃厚な恐怖や憎悪がどれほど良い舌触りか、想像するだけでほら、体が歡喜に震えます」

恍惚とした表情つて、日本に住んでた17年で一度も見たことがなかったんだけど、これは一生見ない方が幸せだったんじゃないかと今、思います。

うつとり恐ろしいことを夢想しているらしい2人は、なまじ容姿がよろしいだけに怖いなの…。

「…こっちのがよっぽど悪魔みたい…」

渦渦の角と羊の目をしてるっただけで、悪魔扱いしたエイリス、ごめんなさい。一見人に見えるこの2人の方がよっぽど悪魔でした。言動も中身も容姿も、全部悪魔。悪魔以外なし！

「おや、私たちが悪魔だとか存じだったんですか？」

かわいらしく首を傾げたのは、金の人。

「あの魔女は我々の存在を隠していたようでしたが、どこかで調べでもしましたか？」

相方と対になるように、やはり首を傾げたのは銀の人。

なに言ってるんでしよう、この人達。この世に悪魔なんかいるわけないじゃないですか。

「ただけノリがいいんだと、顔の前で手を振ったわたしはいやいやいやと否定のポーズ。」

「悪魔とか天使は、どっかの宗教に出てくるおとぎ話の生き物なんです。実在はしませんよ。わたしは言葉の綾です。失言です。そんなものにいちいちのっけてくれなくて全然かまいません。むしろのらないでください」

しかし、彼等はめげなかった。にこやかに逆否定をかましてくれる。

「いますよ。悪魔と天使は。貴女の世界ではどうだったのか知りませんが、こちらの世界では当たり前前に存在します」

金の人の漆黒の瞳には、一点の曇りもない。人を謀ることに長けている悪魔だと主張するなら、まずその嘘のない瞳を何とかした方がいい。

「世界を取り仕切っているのは、悪魔族と天使族です。ですから男女比率がおかしくなったと言われていくらいなので、これは間違いないありませんよ」

真摯に突拍子もないことを語られても、困るのですよ銀の人。わたしの脳みそは半年かけてやっとの思いでファンタジーな世界に慣れてきたところなんです。これ以上の混乱はご勘弁願いたいんですよ。

なのに、こっちの心中など知らぬ素振りです。彼等は最後の爆弾を落とすのだ。

「200年と少し前に喚ばれた娘も、とてもキレイで美味な魂の持ち主だったそうです」

「期待しているのですよ、貴女には。どうかおいしい食事を私たちに提供して下さいね？」

「………なんですか？嫁じゃなくてエサにするための拉致監禁なんですか、これ？」

助けてっ！エイリス〜〜〜！！！！

5 独占欲が間違った方向に暴走中です

ファンタジー、どファンタジーと、際限なく呟いているうちに目的地に着いていたらしい。

「さあ、どうぞ」

銀の人が差し伸べた手を避けて（食べられるのが怖くて触れない）魔力車を降りると、目の前に学校の体育館を2階建てにした位大きな建物がそびえている。

「どこ？図書館とか学校とか役所とか、公共施設の類い？」

あまりの規模に本気で尋ねると、絶えず微笑みをたたえている同じ顔が綺麗にハモった。

「我が家です」

「はあ?!」

「ですから、私たちの家、だと言ったんです」

「何人家族ですか?!」

「両親は別の大陸にいますので、2人暮らしですね」

「2人でこの大きさってありえないでしょっ?」

「ああ、使用人が30人はいたと思いますから、2人だけではありません」

…この人達は、庶民にけんかを売っていると思われませぬ。

代わる代わる与えられる答えは、真実なら腹立たしいことこの上ないものだったが、嘘ではないのも確かだろう。直立不動で扉前に立っていた色白、黒ずくめの若い男が深く一礼して言ったから。

「おかえりなさいませ、アゼルニクス様、ベリスバドン様」
「名前っ?!」

多分執事だろう男が彼等をそう呼ぶのを聞いて、今更だけど忘れていたと気づく。

あれだけ時間があつたのに、なんかもう金の人、銀の人で固有名詞を作ってたよ。そうだ、悪魔だって名前はあるよね。有名どころのサタンとかメフィスト、アスタロト辺りなら日本人だって知ってるんだから。

「私がアゼルニクスです」

僅かに首を傾げての自己紹介は銀の人。

「私がベリスバドンです」

格好付けて片手を背中に、片手を前で曲げながらマリー・アントワネットの映画で見たような挨拶して見せたのは、金の人。

どっちもご大層なお名前である。長すぎて覚える自信が全くない。本音は覚える気がほとんどない。

「丁寧にどうも。春日居深夜かすがいみやです。アゼルさんにベリスさん」

一応自分のフルネームを明かしながら、聞いて耳に残った頭の方だけで呼んで後ろは省略してみた。

どっちも抗議することなく頷いてたのでこれでいいんだろう。三文字くらいの名前がやっぱり丁度いいと思ってしまおうわたしは根っから日本人なのだ。そして、自分を食料扱いした輩に敬称を付ける

かどうか迷いながらも付けちゃう辺りもやっぱり日本人だわ。

「聞いての通りです、カイク。彼女が我々の花嫁ですよ」

ベリスが執事のカイクさんにそう告げた時、どれだけそれを否定したかったことが。

違います、わたしはエサです。丁寧に言い換えたとしてもご飯です。ベリスは大嘘つきです！

無言の叫びなど聞こえるはずもなく、カイクさんはおっしゃった。

「ええ、すぐにわかりました。これほどキレイな方はそうそういらっしやいませんからね」

…そうか、そうなのか。

「カイクさんも悪魔でしたか」

「はい、もちろんです。そうでなければこのお屋敷では働きませんよ。精神崩壊を起こしてしまいますから」

さらっと言われて、わたしはすぐさま回れ右をする。

「どこに行くんですか？」

暢気なアゼルの問いに答えるのもイヤだ。見たらわかるでしょうが。逃げるんですよ、逃げるのっ！

誰に所有権を主張されようが、世界に人権を踏みにじられようが知ったことじゃない。命はひとつしかないし、運良く生きていられたとしてもまともな精神状態が保てなくなるんじゃない、生きる屍になっってしまう。

誰がこんなところにいるもんか！

既に小走りに近い状態で、庭も校庭並みに広い中を駆けていく。息が切れても運動不足を痛感しても、火事場の馬鹿力で走り抜ける。ところが、ですよ。

『バサッ』

てなご立派な効果音をつけて、アゼルが人の行く手を塞いでしまった。よく見ればその背には大きくて真っ黒い翼が一对、どこから出たのかくっついていてる。

「：お父さんが持ってた漫画に描いてあったんですけどね、人間1人を空に飛ばそうと思ったたら十数メートルはある翼が必要なんです。なのにそんなごちんまりしたもんで飛んだらダメじゃないですか」

広げて3メートルじゃ飛べるはずがないんだと、現実逃避も兼ねて呟くと、彼は不自由ありませんがと言い切っておしまい。それよりもと、こちらに腕が伸びてくる。

「急に走ったりしたら、危ないですよ。外には危険な連中が山ほどいるんですからね」

最も危険な悪魔に巣穴に連れ込まれているって言うのに、これ以上のが危ないんだかわたしにはさっぱりわからない。

「そうです。ミヤはここにいないとすぐに命を脅かされてしまうほど、脆弱なんですから」

しかも隣に同じような羽音をさせて降り立ったベリスが更におかしなことを口走った。

「命の危険を感じたから逃げたんでしようがっ！！精神崩壊したら生きながら死んじゃうじゃないですか！！」

魔力車にはねられるより、道ばたで『美しくない』と罵倒されるより、ここにいる方がいろんな意味で危ないんだと怒鳴れば、彼等は薄笑いにぞっとするような冷気を貼り付けてカイムを振り返る。

「奴の言ったことが気に障りましたか」

あでやかにアゼル。

「では、消してしましましょう」

楽しみにベリス。

「やめっ！やめなさいっ！！」

全力でわたしは止めましたとも！じゃないとあの執事さんが、マジで殺されそうなんだもん。

ごめんなさいの意味も込めてカイムを振り返ると、当の本人はうつとりしたような顔でお止めいただかなくても結構でしたのにと、返してきた。

「アゼルニクス様に精神攻撃され、ベリスバドン様の折檻を受ける私をご覧になって、ミヤ様は胸を痛められるのでしょうか？その魂から流れ出た痛みの残滓を少々いただけると考えるだけで、体に震えが走るほどの喜びが湧いて参ります。ああどうか、次の機会にはお

2人をお止めにならないとこのカイクにお約束下さいませ」

物静かに見えた執事は急に饒舌になって、恍惚とした表情でその場に跪く。

懇願。

正しくそう表現するにふさわしい態度に、走ったのは悪寒だ。狂ってる。この人達の中に狂気が見える。わたしはとんでもないところに連れ込まれた気がするんですけど?!?!

自分の体に腕を回し、這い上がる寒気から身を守ろうとしていると、面白くなさそうなベリスの声が降ってきた。

「誰がおまえごときにミヤの痛みを与えてやると言った。この娘は爪の先まで、私達だけのものだ」

違います。

「強靱な人間の魂はすぐに苦痛に慣れてしまう。おまえをいたぶり倒すのは、ミヤの見ていないところだ。そうして彼女の感情は我々だけで食らうのだ」

いたぶってはなりません。ついでに食らうのはもっといけません。冷静に願います、アゼルさん。

こうして、先行き不安どころか、お先真つ暗な悪魔屋敷での生活は始まったのであった。

5 独占欲が間違った方向に暴走中です（後書き）

読んでいただいております。

参考までに。

ミヤが読んだお父さんの漫画のタイトルは『地獄先生ぬ〜べ〜』です。

6 天使は善良でなくてはならないはず

なんだかんかと、昨日は平和だった。

連行されたばかりのわたしを氣遣ってか、ただエサのおこぼれに預かるうとしてか、メイドさん達は優しいしアゼルさんとベリスさんもいじめたり食べたりはしないで、どっかのお城の一室みたいな部屋でゆっくり眠らせて貰うことができたんだから。

なので余計に、朝食の席に乱入してきた人物に対して、深い深い溜息が出たのだと思う。

「おまえ達が生きたことは違法行為だって、わかっているんだろっ！」

分厚くて重いであろう食堂の両開きのドアを、勢いよく開けて叫んだのはベリスさんより淡いブロンドのお兄さんである。お声はすてきなテノールだが、叫んで割れてしまったので評価点はマイナスです。

「落ちて着けメトロス。だからこそ我々が召還された娘を引き取りに来たのだから？」

今にもベリスさんに掴みかかりそうな彼の肩を押さえたのが、アゼルさんより白に近い銀髪を靡かせたお兄さん。因みにお声はおなかに響くバリトンです。重厚な感じが落ち着いていて評価点はプラス。

しかし、イヤなことを思い出すからあんまり認識したくないので

すが、彼等はよく似ています。まるつきり同じ顔が2つ並んでいます。髪の色は違いますが、デジャブを感じさせるこのそっくり感。

「アゼルさんとベリスさんは双子ですよ？そちらもまさか双子ですか？」

昨日のうちに確認したかったのだけれど、脳が容認できる許容量を超えたので翌日に持ち越された質問を、丁度いいとばかりにしてみる。

もちろん空気を読んでないのは火を見るより明らか。ばつちり緊迫した空気をぶち壊したくならない質問だ。

それを証明するように、殴り合いの喧嘩を始めそうだったベリスさんと闖入者は手を止めてこくりと頷き、比較的落ち着いて食事を続けていたアゼルさんと後続のお兄さんもつつすら笑みを浮かべながら肯定してくれた。

「…………やはり、人間というのは神経の太い生き物なのだな」

「失礼な発言ですねサンフォル。そこはミヤの良いところです。貶さずに褒めて下さい」

どっちも失礼だと、私は思いますが？図太いと言われて喜ぶ女がどこにいる。

多分の恨みを込めて睨み付けたら、アゼルさんには極上の笑顔を、見知らぬお兄さんには感心した表情を貰ってしまった…微妙にむかつく。

「人間が意外に丈夫な生き物だというのは、今の一言で実感できたけど、だからといって易々とおまえらのエサにさせるわけにはいかないんだよ」

「エサではなくて花嫁だ。もちろんエサにもするが、扱いとしては

花嫁なのだから天使如きに何を言われる筋合いもない」

そしてやっぱり、こっちの2人も失礼だった。エサエサ連呼するんじゃない。

と、腹を立てながらもぞんざいな口調でベリスさんが放った一言に、遅ればせながら反応する。

「天使い?!」

素っ頓狂な叫びを上げれば、四対の瞳は一瞬こちらを見て、様々に言葉を交わす。

「この世界の種族構成くらい、きちんと教えてやれよ!」

「私達に言うな。ミヤを隠していた魔女が、故意に教えていなかったせいだ」

「ならば昨日引き取りに行った後に教えれば良からう。博識でならしたアゼルニクスらしくもない失態だな」

「悪魔と天使が存在すると聞いただけで彼女は混乱してしまいましたので、世の仕組みについては今日、これから教えるつもりだったんですよ」

なんかこの様子だと、まだまだわたしの知らないことが山とありそうだよな。: 一体、何を隠していたんだエイリスよ! 強制的に呼びつけておいて半年も経つってのに、基本的な知識くらい授けておいて〜。

自分がすっごいバカになった気分でへこんでいると、いつの間にやら隣に来ていたアゼルさんが優しく頭を撫でてくれる。

「やはり、ミヤの感情はとても美味です」

はあつと顔を上げると、反対側ではベリスさんも満足そうに微笑んでいる。

…どうやら2人とも、人の自己嫌悪を召し上がったらしい。一体どうやって食べているんだか非常に気になるところだが、それより本気でエサだったのかと思うと怒りの方が湧いてくるから不思議だ。

「黙って食べないで下さい」

「ならば今度は断ってからいただきますね」

「はい。ちゃんとミヤに言ってから啜ります」

「啜るとか言うなっ！」

なんて気味の悪い表現方法をとるんだと、ベリスさんを怒鳴ったのがまずかった。うっとした恍惚の表情：また食べられた：なんなんだ悪魔って生き物は一体…。

理解できないと小さく頭を振っていたら、アゼルさんを押しつけて、テノールのお兄さんが現れる。

「あんたバカ?! 悪魔相手に負の感情をまき散らさないでよ。見な、あなたの感情を食らって連中の魔力がみるみる上がっていくじゃないか!」

そんな不可抗力を全力で怒られてもと困惑していると、今度はバリトンのお兄さんが彼を背後から窘めた。

「落ち着けメトロス。アゼルニクスがその辺りも説明していないのだから、その人間を責めても仕方あるまい。それよりこちらの話を聞かせることの方が大切だ」

庇われているのに、仄かに腹立たしい理由は彼等がわたしを『お前』だの『人間』だのと言うだけで一個人として扱っていないから

なんだろうなあと、ぼんやり思う。

その点、アゼルさんとベリスさんはきちんとわたしをミヤと呼んでくれた。初対面で名前を告げてからずっと『人間』の括りで呼ばれたことはない。

しかも『話しを聞かせる』とかめちやくちや上から目線だよなあ。

「わたしの世界の天使はですね」

今できる限り、最高の作り笑顔で唐突に話し出したわたしに、闖入者2人は視線をくれた。

「悪い悪魔と敵対する善の象徴として物語に登場したり、宗教で崇められたりするんですけど」

ここで僅かに顔を引き攣らせたのが悪魔の双子で、鷹揚に頷いて見せたのが天使の双子だ。

だけど話しはここで終わりじゃない。ちゃんと最後まで聞くように。

内心にやりとしたわたしは、天使をじっと見つめて、一拍置いた後、言っただけで終わった。

「この世界の天使は、悪魔より高飛車で性格悪いですよなあ」

きっと漫画なら真っ白に風化する場面なんだろうなあ。

返す言葉もなく立ち尽くす双子を見ながら、性格悪くそんな想像をしたのだった。

6 天使は善良でなくてはならないはず（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございます。

感想をいただき、スペースなどを入れてみました。

少しは読みやすくなっているとよいのですが。

7 無知では人生、渡っていけません

人間、固定観念にとらわれてはいけません。

そんな教科書にでも書いてありそうなことを考えつつ、応接室でお茶をすすっているわたしは、当然アゼルさんとベリスさんの間に腰を下ろしていた。

対する天使の双子は、向かい側で難しい表情のままこちらを見ている。

邪魔された朝食はあのまま食べ続けられるはずもなく、腹八分目どころか半分も満たしていない状態でわたし達は応接室に移動するはめになった。

だというのに、早朝から人の家を襲撃した迷惑天使は『保護する』とか『助けに来た』とか言い募って、悪魔の双子からわたしを引き離そうとしたのだ。

そこで、さっきの考え事に戻るわけだが、天使が善で悪魔が悪なんてのは物語だけの話しなんじゃないかと思うわけ。だって現実ときたら、明らかに天使の方が無理難題を押し通そうとする悪い人（？）に見える。横でわたしを守るように座ってる悪魔の方がよほど善人（？）だ。

「とにかく話を聞いてくれないか」

さつきから何度目かになる台詞を繰り返しつつ、金髪の天使が言う。その真剣な群青色の瞳を見る限り、彼等はまだなんでわたしの態度が硬化したままなのか理由がわからないらしい。

すごく簡単なことだと思っただけ、どうしてできないのやら。

「一つ、いいですか？」

いい加減お茶を飲み続けるのも限界だったので、天使達に問いかける、彼等はすぐに頷いた。

「貴方たちは人の家を訪ねようと思った時、まず第一に何を気にします？」

「そりゃあ、服装や時間なんかを……」
「今、何時？」

ぐずぐず続きそうな説明をぶった切つて示したのは、大きなのっぽの古時計。レトロな置き時計である。

振り返つてその文字盤を読んだ金髪天使は、ちよつと顔を顰めた後言いにくそうに7時と呟いた。

「ですよ〜。この世界ではどうか知りませんが、わたしの住んでいた世界では人の家を訪ねるのに適した時間じゃありません」

日本人なので曖昧な表現を使っているが直訳したら『朝っぱらからインターホン鳴らすんじゃない』ってなる。もちろんその辺は気づいたのだろう。双子天使は一層顔を顰めた。

「ところでその2人組の天使。非常識にも早朝から人様の家を襲撃したのは、並々ならない理由があつたんですよね？天使」

意味もなく種族名を繰り返すと、今度は銀髪の天使が苦虫を噛みつぶしたような顔をして、視線を逸らした。

気づいたかな？気づいたよね。

「再び繰り返します。この世界ではどうか知りませんが、わたしの住んでいた世界では種族、というか人種なんです、それで他人を呼ぶのは非常に嫌がられました。おい日本人、アメリカ人、中国人などがその例です。貴方方はいかがでしょう？天使と一括りに呼ばれて気分はよろしかったですか？」

良いわけがないと、無言の表情が語っているからわたしが口をきかなかった理由にも思い当たったようだ。素直に2人揃って頭を下げると、小さく謝罪の言葉を述べたから。

そこでやっと仕切り直しだと、わたしは微笑んで自己紹介する。

「ミヤと言います。よろしければお二人の名前も教えていただけますか？」

エイリスのところのいた半年間。訪ねてくるお客相手の対応で敬語をたたき込まれていたのが役立った。無知な女子高生のままじゃ、こんな丁寧な言い回しはできなかつたろうなあとちよっぴり魔女に感謝する。

「失礼した、ミヤ。私はサンフォル。天使族の公爵だ」

銀の天使がそう言って軽く会釈すると、ポニーテールにされた銀髪がスリと肩を滑る。

「僕はメトロス。同じく天使族の公爵だよ」

金の天使もそれに倣うと、こちらは解き放っている金髪が顔を覆う。

2人とも同じような長さに髪を伸ばしているようだから、背中

真ん中くらいだろうか。腰につくほど伸ばしているアゼルさんやベリスさんより少し短いみたいだけど、やっぱりロン毛だ。なんかこの世界ではロン毛がはやってるのかな？おかげで二組の双子共にやたらとキレイな顔をしている分、黙っていれば女性モデルにでも見えそうなほど中性的だ。

瞳は深い海を連想させる群青で、身長はアゼルさん達と同じくらい。つまり2メートル前後あった。大きさはともかく、色合いはまさに天使。どっかの美術館にでも飾ってありそうな、理想の天使像そのままである。

それに比べてつと、両側を見やると悪魔がいるんだけど。

ねじれた角も、尖った鼻も（これは魔女だっけ？）、狡猾そうな顔もしていない。おじさんでもなきや、髭もない ひどくキレイな悪魔…。

「2人は悪魔、ですよね？」

思わず再確認してしまったんだけど、それに頷いた彼等は直後にああつと妙に納得する。そうして正面の天使に少しイヤそうに視線をやると、示し合わせたタイミングでハモった。

「やはり、様々なことを詳しく説明しなければならぬようですね」

わたし、一体何を知らないんでしょう？

8 体が作り替えられていたとは初耳です

エイリスの元で得た地理や魔術に関する知識は、アゼルさんが説明してくれた内容と同じだった。

問題は、召還術とそれに伴う体の中の変化、あとは様々に暮らす種族とその階級についてわたしが何も知らないことだ。

「ミヤが自分の世界の言葉だと思って使っているのは、この大陸ジャルジーの公用語です」

淹れ直したお茶のカップとお菓子を勧められながら、噛んで含めるように教えてくれたアゼルさんの言葉は、妙にすんなり納得できた。

だってずっと疑問には思っていたんだもん。地球にだって民族ごとにたくさん言語が溢れているし、同一国内で違う言葉を使っている国だってある。

それなのに異星に来て苦もなく日本語が通じるなんて、あり得ないんじゃないかって。

「召還されあの魔法陣を通る際、貴女たち女性の言語は召還者が使用しているものに強制的に変換されます。ミヤはジャルジーの民である魔女エイリスと同じ言葉を話し、理解できるようになった」

そう言ったアゼルさんが差し出してきたのは、一冊の本だ。

どこからともなく現れたそれには『建国の歴史』とタイトルがふつてある。

「どんな名前の本です？」

「建国の歴史、です」

ちゃんと漢字とひらがなで読めると付け加えると、アゼルさんは少し申し訳なさそうに顔を歪めた。

「私達にはそれがジジャ語にしか見えません。けれど、貴方の目は自国の言葉としてそれを捉える。言葉も一緒に、ミヤは自国の言葉を話しているつもり、聞いているつもりで、ジジャ語を解している。本人に無断で頭の中をいじっているのです。それが良いことだと私には思えない」

だから浮かない顔をしているんだと、やっとわかった。

悪魔なくせに変なところで律儀な人…ううん、人達。だって、ベリスさんも同じ表情をしている。

負の感情を食べるのだの、エサだのと言っていたくせに、それくらいのことです。心を痛めるとはらしくないと、なんだかおかしくなってきた。

「人によっては怒るかもしれませんが、わたしはおかげで不自由なく暮らせたんで、むしろ感謝してます。なのでそんなことを気にするより、人の感情を食べる行為をやめてもらえる方がうれしいんですけど」

笑い飛ばすとほっとした顔をするくせに、お食事禁止は即却下するとはやはり悪魔か。

最後の一言はうつかり声に出してしまっていたらしく、聞き留めたベリスさんがその認識も違うと否定してくる。

「ミヤが我々を悪魔、奴らを天使と言う…いや、なんと言ったらいいんでしょう…そう、悪いもの、善いものと表現すればきちんと

聞き取れますか？」

言っている意味がわからない。

わかるけどわからないと首を傾げたわたしに補足とばかりに、サンフォルさんがこう聞いてきた。

「ミヤの世界で悪魔とはどういったもので、天使とはどんな役割がある？」

役割、か。聖書とかキリスト教とか詳しくないからよくわかんないけど、リメイクでやってた映画や物語の中での位置づけなら説明できる。

「えつとですね。悪魔はまず人間の魂を食べたり、人間に乗り移ったり、人間を騙したり、自分の欲望に忠実だったり、卑怯なイメージです」

あ、悪印象しかなかったと慌てて両サイドを確認すると、気持ち2人もへこんでいるようだった。

ごめんね、わたしってば嘘のつけない正直者なんです。ここで彼等に構っていると、天使について答えられなくなるんでいったん棚の上に上げ、もう一度説明を始める。

「天使は基本的に神様のお使い的なイメージと、人間を助けるとか死んだ人の魂を天国までつれてくとか、そんなんです。あと頭の上に輪っかが浮いてたり羽根を背中につけて飛んでます」

そういえば、昨日見たアゼルさんとベリスさんの羽根は真っ黒だったなあとか思い出して、ふと天使だと名乗った2人に聞いてみたくなる。

「お2人の羽根は、白いですか？」
「白いよ」

言うが早いかメトロスさんの背中が派手な音を立てて、でっかい翼が姿を現した。純白の白鳥みたいな羽根は、やっぱり名画なんかで見る天使と同じで、色だけは本気で天使っぽい。

うんうんと1人納得してわたしは、一番天使と悪魔の説明で大事な部分を忘れていたと慌てて付け加えた。

「天使は白い羽根、悪魔は黒い羽根…あれ、これは墮天使だけで本当はコウモリみたいな羽根だっけ？ま、どっちにしても白が天使、黒は悪魔です」

「……それ(だ)です」「……」

いきなりハモる4人に一瞬引いてしまったが、彼等はそうかそうかと妙にすっきり納得した顔をしている。

羽根はそんなに大事なところ？それよりも白と黒？どこがそれだかわかならいいけれど、そんなもので急に納得できるとはなんとも腑に落ちない。

わたしが顔を顰めたのに気づいて、サンフォルさんが、つまりと切り出した。

「ミヤの言語がジジャ語に変化しても、君の中の知識まで魔女とシンクロするわけではない。耳から入った情報を自分の知っている知識やイメージに近いものと置き換えて判断するんだ。天使とは古き言葉で『白き翼』を意味し、悪魔とは『黒き翼』を意味する。取り急ぎ古い文献を調べたところ、以前召還された人間の世界には翼を持つ種族はいなかったとあった。ミヤの頭の中で『黒き翼』が悪魔

と変換されて、天使族悪魔族を理解したのではないかと思う」

長い、少し難しい説明だったけれど、よくわかった。

つまり、足りない知識は補えない。知らないことが多すぎるわたしは、単純に色と翼で種族名を決定していたんだと。

……ああ、義務教育中も高校生になってからも、ちっとも自発的に勉強に取り組まなかった自分を再教育しに行きたいっ！

芝居がかって嘆いてみようとか考えたけど、むしろ勉強不足の間を無理矢理連れてきた方に責任があるんじゃないかと気づいたんで、却下しておいた。

そうして、お茶を一口飲んで落ち着いてから、でもやっぱりと首を傾げる。

「人間の感情を食べるとか、それも痛いとか辛いとかの負の感情をエサとか言うのは、やっぱり悪魔だと思うんです。だって天使は食べないでしょう？感情」

ダークな感じのものは悪魔の専売特許の筈と確信してたのに、なぜだか前方2人が視線を外す。それもまあ、とっつても決まり悪げに

これは、もしやのもしや？

そろりと視線を上に向けると、何故か満面の笑みを浮かべた黒い双子が楽しそうに答えるのだ。

「食べますよ。天使も感情を食らいます」

「ええそれはもう食欲に、我々と同じ勢いで召し上がります」

……ねえ、わたしの言語変換機能って、相当性能が悪いんじゃない？普通はそういうのは全部一括りで悪魔って言うもん。

そんな心の声を、申し訳なさそうに縮こまる天使2人に免じて、決して口には出さない寛大なわたしなのであった。

9 天使までエサを食べるせいで、女性が不足しました

「誤解しないでほしいのだが」

なんとも気まずくなってしまった空気の中、口を開いたのはサ
ンフォルさんだった。

「確かに我々も他の種族の感情を食らう。だが1つその連中と違
うのは」

群青がアゼルさんとベリスさんをきつく見据え、それからゆっく
りわたしに巡らされると柔らかく綻ぶ。

「悲しみや痛み、苦痛といった感情ではなく、喜びや安堵、安寧と
言った正の感情であると言うことだ」

隣で力強く頷いているメトロスさんも、全然違うだろうとか、僕
たちの方が良い子だろうとか、必死にアピってるもんだから、わた
しはうつかり素で返してしまう。

「はい。そっちの方が良いです。痛いより痛くない方が絶対いいで
す。精神崩壊もしないだろうし」

きっちり昨日のカイムさんの発言がトラウマ化しているのが、見
て取れる発言だ。

だって、怖いでしょ？精神的苦痛は肉体的苦痛を上回るって、魔
女裁判の歴史を教える先生がいったもん。眠らせないとか、誰
とも口聞いてもらえないとか、そういう心が折れるのは、いやだ。
ましてそんな感情を好んで食べるような人達はもつとイヤだ。

やっぱり、天使の方が悪魔よりましなんだと、妙に納得したところでベリスさんがぼそりと呟いた。

「天使に感情を食われる者は、腐って墜ちる」
「腐るう??」

なんですか、腐って墜ちるって！すごい汚っぱいんだけどっある意味精神崩壊よりもイヤなだけどっ！乙女としてはやっぱり永遠に美しく汚れなくが理想で、腐るとか老けるより質悪い気がするんですけど??

この過剰反応に、何やらしたり顔でわたしを見下ろしていたベリスさんがそつと耳元に囁く。

「天使に甘やかされ、喜びと歓喜の中だけに溺れた女性は、いつしか傲慢で怠惰、最も醜い存在に変貌するんです。こうなった魂は毒しか吐き出さない、最早元の自分に戻ることもできない。打ち棄てられ、死を選ぶか、墜ちるところまで墜ちるか。どちらにしても命の終わりは普通に生きていた者より遙かに早い」
「どつちにしろ死亡フラグが立つわけですね…」

悪魔の囁きとは、よく言ったものだ。感心します。的を射てます。なんだか究極の選択じみてきました。

と、半泣きになって正気に返った。

なんでこの人達は、わたしに別の選択肢を与えてくれないんだろうか。

精神崩壊起こすとか、早死にするとかわかっているなら、解放してほしい。キレイな魂なら探せば他にいるんじゃない?いやいる。

絶対いる。だからわざわざ別の星から喚ばれた哀れな女の子を生け贄にするんじゃない、ここは潔く自国の民をエサにでも食事にでもしたらいいじゃないっ！そう、自給自足は文化的生活を営む者の義務よ、義務っ！

というようなことをやんわりと提案してみたのだけれど、4人同時にすぐさま却下。

そして、ここからが重要だからよく聞いて理解するようにと、彼等は世界情勢の説明に戻っていく。

「この世界で国の政を動かしているのは王だが、世襲制ではない。天使族と悪魔族から交互に次代もつともふさわしい者を玉座に据えるのが習わしだ。それは私達の生命力、力、知力がどの種族より勝っているからこそ成り立つ法則で、更には最強の捕食者の証でもある」

わかるか、と問われたのでサンフォルさんにはわかると答えたが、実際は1カ所意味わかんないところがあつた。でも聞いたらなんか恐ろしい返答が降つてきそうなので、取り敢えずスルーで次ぎ行きましょう。

「僕たちが翼をもっているように、他の種族も何かしら特徴があるのは知ってるかな？大きく分けると魚類から知性を持ち人型を取るようになった魚人族、獣から人型を取るようになった獣人族、爬虫類や両生類から進化した蛇族じやくになる。ミヤは確か魚や爬虫類、鳥類を経て獣が『人間』と喚ばれる種族になったんだよね？過去の人間がそう説明していたと、文献にはあつたけど」

『人間』についての説明をする辺りでメトロスさんの言葉は淀みがちになつたけれど、概ね合つてると思うので頷いておく。

なんできつぱり正解ですと言いつれぬのかは、わかりきっている。ひとえに勉強不足だ。真面目に学んでいなかったツケを、異星に来て払うとは誰が想像できたろう？できるわけがない。そして後悔も後に立たない。

しかし、200年前に召還された人は随分博識で賢い人だったんだなあ。いやいや、待て待て。ざっくり計算しても200年前つたら幕末？とか明治の始まりじゃない？いくら不勉強でもそのくらいはわかるよ。その時代に進化の過程がそんな詳しくわかるとは思えないんだけど……せめて後100年遅ければわかるけどさあ。

日本人が召還されたんじゃないや、知ってたのかな？うん、微妙なことだなあ。

なんて小難しいことを考えていたのは一瞬だ。すぐに次の説明がベリスさんにより始められたから。

「人間云々はともかく、これらの種族は階層を作っています。最下層に魚人族、次いで蛇族が続き、獣人族、天使族と悪魔族が同等。人口も最下層が最も多く、最上級層が最も少ない。まあ国の中枢を牛耳るという意味では、この人口分布は適正だったわけですが、ここで1つ誤算が生じます。それは我々が女性の魂から発せられる感情を好んで食したこと」

いやだいやだと思いつつ、先がどんどん見えてくる話しに思わず耳を塞ぎたくなつたけれど、無駄な抵抗だとすぐに諦めた。

だってどんなに逃げたって結末が変わるわけじゃない。そうでしょう？と傍らのアゼルさんを見上げると、彼は微かに頷いた。

「普通の食事だけでもしばらくなら生きてはいけます。けれど定期的に魂が放つ感情を吸収しなければ、私達は死ぬ。それも子孫を残

すのに重要な女性の感情を食べることしかできませんから、天使族も悪魔族も金を積んであらゆる種族の女性達を屋敷に引き入れ、魂を貪りました。だが彼女たちの心は弱い。悪魔と共に暮らせば精神崩壊を起こし、天使と共に暮らせば墮落する。そうして世界の女達は減少の一途を辿っていったのです」

ここから、エイリスに聞いた男女比率に繋がるのだ。
9:1。

自然界ではあり得ない現象。何かしら人為的なものの介入がなければこんなに比率が狂うわけがない。

そしてそれを誤魔化すように繰り返される女性の召還。国が推進するわけだ。何しろ自分たちの命がかかっているんだから。

ああ、腹が立つ。むかむかする。天使も悪魔も知ったことか。どつちも碌なもんじゃない。

なまじ美しいだけに余計に怒りを誘う面々を見回し、それならと意を決した。

「なんで『人間』をキレイだともてはやすんですか？なんで『人間』を特別だとも言いたげに扱うの？」

私の中の最大の疑問に、彼等はなんて答えてくれるのだろう。

10 逆ハーはとっても理にかなっているようです

「天使にとっても悪魔にとっても、人間の魂はとても強靱で強い輝きを放つて見えるのです。痛みを知り、汚れを知り、なのに優しく、強靱。どれほどの苦痛にも屈することなく、どれほどの誘惑にも溺れることのない精神力は他の種族ではありえません」

「買いかぶりすぎです。そんなに人間が強ければ鬱病もないし自殺者もいません」

随分と褒め称えてくれるアゼルさんに即座に切り返すと、彼は少し考える素振りをしてからならばと微笑んだ。

「ミヤは…いえ、ミヤと以前に召還された女性が、キレイな魂をお持ちなのでしょう。なにしろ召還条件が『美しい』で、この世界に喚ぶことができた人間は2人だけなのですから」

そんな嬉しくない限定品みたいな扱いいやだ。そんなくだらぬ理由で感情を貪られるなんて冗談じゃない。

むつつり押し黙って怒りを表現すれば、途端に両隣で悪魔がうつとりするのだから、彼等がデリカシーをどこにしまったのか後で聞き出して引つ張り出さなきゃいけない義務感に駆られちゃったよ。

「なんで勝手に感情を食べるんですかっ！少しは我慢して下さい」
「もったいないですから」

ハモらなくていいって…疲れるなあ。

いちいち怒るとまた勝手に食事タイムにされそうなので、できるだけ平常心を保って、今度は正面の双子に人間にこだわる理由を聞くことにした。なにしろアゼルさんてば話の途中で心を飛ばしち

やったんで引き戻すのが面倒だ。いつそ平静でいる方に聞いた方が早い。

なのでそう促すと、サンフォルさんが忌々しげに悪魔ツインスを眺めながら、続きを教えてくださいました。

「人間は、悪魔と共にいても天使と共にいても精神を病むことなく感情を提供し続けてくれる。更に我々との間に子を成すこともでき、その子は何故か同族にも感情を提供できるという突然変異種になる。いわば2つの種族にとって理想のパートナーとなる存在なのだ」

「へえすごい…って、貴方方自給自足できないんですか?!他の種族を食い尽くすだけ?」

「うん、残念ながら」

「うっわぁ…害虫じゃん」

一瞬学校の木を食べ尽くしたアメシロの大群を思い出して、うっかりそれを声に出してしまったらしい。周囲で4人とも傷ついた顔したんで。

「あ、ごめんなさい。ついうっかり本当のことを」

あんまりフォローしようって気にならなかつたんで、更に深みに突き落としてから改めて自分の置かれた状況を整理してみた。

まず、人間は精神崩壊起こしたり、墮落しきつた人生を歩んだりしないから、悪魔や天使といっても平気らしい。この辺は命の危険についてナーバスになっていたわたしにとって朗報だ。結婚云々はともかく、このお屋敷で命の保証はされたいらしい。

次に、キレイだと言われるのは、打たれ強い精神力と無駄に強い

らしい魂の輝きで、いきなり住み慣れた星と懐かしい家族から引き離されたのはそのせいだと。しかも子供を産んだら彼等に嬉しいハイブリットなベイビーが出てくるので、これは生け贄にされる他の種族の女性を救うためにも善いことらしい。

ただし、だからといってわたしが好きでもない人間と結婚したり、ましてや子供を作るなんて義務をいきなり背負わされる覚えはないんで、この辺はよく考えましよう。

「そろそろ復活しました？」

現状、わかる範囲で状況把握を終えたわたしは、両隣と正面の4人の目に精気が戻っているのを確認して、会話を再開した。

「何となく自分がどういう立場なのかはわかりました。そのついでに聞いておきたいんですけど、200年前に喚ばれた女性は何人子供を残して、その子孫は何人になっているんですか？だんだん血が薄くなって、仲間に感情を与えられない事態になったりしてませんか？」

これはとっても興味深いところだ。自給自足ができる身内は多ければ多いほど良いんだから、もしその人が子供を産んだとして、その子供達がどのくらい増えたのかとっても気になる。優秀な血は多ければ多いほどいいんだし。それにもしひ孫の代とかで元の天使や悪魔に戻っちゃったら元も子もないもん。

「彼女が召還されたのはこの大陸ではないので詳細は把握できていませんが、少なくとも天使の子を4人と悪魔の子を1人、産んでいくはずですよ。そして代替わりしても我々に感情という『エサ』を提供し続けられる子孫は既に10人を優に超えたよ」

「……アゼルさん、アゼルさん」

あんまりなんでもないことのように言うから、うっかり聞き逃すところだったけど、この人今さらっとおかしなことを言った気がします。いいえ、言いました。絶対言いました。

なんでしようと、柔らかな微笑みで見下ろしてもダメです。聞き逃したりはしません。

「なんで天使の子を産んでいるのに、悪魔の子も産んでるんですか？旦那さんと死に別れて再婚したとか、そんなんですか？」

じゃないと辻褄が合わないんですけど。

そう問えば、クスリと笑われてしまった。反対側でベリスさんも笑ってるし、向かいではサンフォルさんとメトロスさんもおかしなことを言うとはかりに首を傾げている。

「何故死に別れないと再婚できないんですか？そもそも再婚などする必要はないでしょう。貴女方は女性なんですから」

「女性でも再婚はするでしょう？あ、わかったっ！離婚したんですね。天使か悪魔か、どっちなかに嫌気がさして離婚したあと、別の種族と結婚したからどっちの子供もいるんだっ」

「だから何故、離婚だ死別だとおかしなことにこだわるんだ。そもそも子供の父親は全員違うんだから、いちいち死別したり離婚していたりするわけないだろう」

「はあ?!じゃ、未婚の母ですか?!エサにした上シングルマザーに5人の子供を育てさせるなんて非道な行為に及んだんですか?」

「うん、ちよつと落ち着こうかミヤ。これほど女性が大切にされている世界で、しかも唯一無二だった人間の女性にそんなまねする悪魔も天使もないよ。彼女には5人の夫がいた、それだけのことだ」
「重婚!!!犯罪じゃないですか、それは!」

「もう一つ大事なことを説明し忘れていた気がしてきたんですが、女性が複数の夫を持つことは当たり前のことなんですよ？男女比がこれだけ狂えば当然の措置だと思いませんか？」

「あーっ言われれば、思うっ！一妻多夫、そう、ありですね、一妻多夫。でも、日本の常識じゃあり得ない！っっていうか、200年前の誰かさん、一体どうやって貞操観念切り替えたんですかあー！！それとも一妻多夫の国出身者だったとか？？！！ねえ、誰か教えてー！！！」

痴情のもつれや不倫で人が殺される世界に生きていた人間としては、あまりにも理解しがたい制度に頭がパンク寸前です。というかパンクしました、既に。

逆ハーですか、逆ハーですね。ゲームや一部小説の中で最近定着しつつある新言語、逆ハーレムですね。ええ、良いと思います。イケメン山盛りが全部自分のものって憧れますよね。

でも、現実はその簡単にいかないものなんです。なにしろそういう常識の中で育っちゃいましたから。二股とかかけると女子からイジメの対象になったりするんですよ。

お話の中でだって同じです。よっぱどのがない限り女の子は群がってくる男の子の中から1人を選んでハッピーエンドが当たり前なんです。

それが、夫5人てなんだーっ！！！！！！

悲壮なまでの混乱状態では、事態など把握できるはずもなく。なににあんなこと言うからいけないんだ。

「なので、私達は2人で貴女を花嫁とするつもりだったんですよ」

「どちらかを選んで、ということではないのです」

「だから何故お前達がミヤを独占することになるんだ。どうだろう、

公平を期すためには天使も夫にするべきだ」

「そうそう、幸い僕たちも双子だし、丁度いいと思わない？」

「思つかーっ!!!」

力の限り叫んで、力の限り奴らの後頭部に突っ込みを入れたわたしを、責めてはいけません。

11 魔女を交えると話しはますますややこしくなります

悲しいかな。人間生きている限りお腹はすぐもので、怒濤の朝のひとつ時からすっかり日も昇りきった9時（地球時間では11時くらい）頃になると、疲労と空腹から自室の長いすでへばる羽目となった。

あの後、わたしの爆発した怒りをきつちり食べた悪魔の双子は満足顔で舌なめずりし、天使の双子は「笑ってくれなければ乾きは癒やされない」と懇願してきた。

もちろん、どっちもきつちりどついでその後、自室に籠もったまではよかつたんだけど。

「お腹すいたよう〜喉渴いたよう〜」

グーグー鳴る胃の抗議にそろそろ痛みを感じてきた。喉も怒鳴つたせいでひりひりするしなあ。

怒り爆発だったもんだから、これ以上悪魔に感情をくれてやつてなるものかと、メイドさんもカイクさんも立ち入り禁止にしたのがまずかったか。キッチン（この規模のお屋敷になると厨房？）のあたりかもわからなから、自力で食べ物飲み物を調達するわけにもいかない。

さて困ったと、頭を抱えてはたと閃く。

魔法使ったら、良いんじゃない？折角覚えたんだし。

そうだそうだ。エイリスってば本気でわたしに召還術を教え込もうとしてたらしくて、一番最初に教えてもらったのがどっかからどこだかは怖くて聞けなかった（物を取り出す呪文だったもん）。

急に元気を取り戻して長いすにきつちり座り直すと、丸暗記させられた何言っているんだかわからない呪文を唱える。

確か取り寄せたい物をイメージするんだったよね。えっと、お茶とばさばさしてるサンドイツチ辺りが無難かなあ。あれ、安物のパンを使ってるせいで決して美味しくなかったんだけど、何故かエリスが香草で焼いた鶏肉を挟むと急に美味しくなるんだよね。そういえばエirisは茶葉を作るのも上手で、こっちの紅茶っぽいやつより彼女の緑茶っぽい方が好きだったなあ。

「あなた、一体どんな魔法を使ったの？」

ぼんやり思い出しながら呪文を唱えきつた後、思いがけない声にびつくりして辺りを見回す。

と、何故か長いすの真後ろにエirisがいた。それも両手に生の鶏肉と茶葉を入れるポットを持って。

「え、嘘。なんでいこんなところにいるわけ？」

「だからそれはこっちの台詞」

呆れ顔のエirisは、やれやれと呟くと、右手の生肉に顔を顰めて短い呪文と共にそれをどこかへ消した。そのあと、わたし作の浄化の呪文・改で手を綺麗にすると勝手に向かいのソファーに腰を下ろす。

1日ぶりくらいじゃ、魔女の態度の大きさは1ミリたりとも変わらないらしい。相も変わらず傍若無人のようですねによりです。角も絶好調に渦渦だしね！

「で？姿を消して一日やそこらで私を呼び出す位なんだから、何かあったんでしょう？」

「…そりゃあもう」

上から目線の魔女に極上の笑顔で答えて、空腹も忘れたわたしは山盛りの怒りを込めて今朝の出来事を勢いよく話し始める。

『人間』のことから種族の階級、一妻多夫制、なによりどこより女性の数が異常に少ない理由を説明してくれなかった怒りは深いんだからね。天使からも悪魔からも『美味しくって減らないエサ』扱いはされる私の気持ちがわかる？

最後までおとなしくこれらの抗議を聞いていたエイリスは、いやみつたらしく肩をすくめると、

「その辺りは諦めるしかないわ。だってせつかく隠してあげたのに、あなたつてば見つかったちゃうんですもの」

「お気軽にいわないでよ！ どんだけ弱肉強食なわけ、この世界？」

「あら、ミヤが動物の肉を食べると変わらないでしょ、天使や悪魔が他種族の女を食べるのは」

「表現方法間違ってます。頭からかじるみたいでしょ、それじゃ。

食べるのは精神」

「そっお？」

全然気にしてないし、この魔女。

どうでもいいとばかりに人の話を聞き流したあげく、お茶くらいでないのとか言っちゃうんだから、むかつく。

だけど悪びれないその態度に、なんか毒気を抜かれて脱力しちゃったんで、話題を変えることにした。

「わかったわよ。でも一妻多夫制についてはどうなの？ このくらい説明してくれてもいいでしょ？」

「だーからー、よくお使いに出してたでしょう？ その間に街の人と仲良くなつて聞き取り調査をするとか、訪ねてくるお客とも会わ

せてたんだから、世間話装って世界情勢聞いてみるとか考えなかったの？」

すっぱり言い切られて、返事に詰まりました。

確かに半年もいたら自分から何かを調べたり知ったりする時間はたっぷりあった。

でも、そうしてこの世界に馴染むことは、2度と地球に帰れないんだって認める行為でもあってなんとできなかつたのだ。

だって未練なんかありありに決まってるもん。お母さんにもお父さんにも会いたい。友達とだって会いたい。学校だってまだ行きたかった。

けれどそれはもう望むこともできない。望んじゃダメだって心の切り替えをするために半年を費やしたのだ。

そしてやつと、時々思い出して懐かしんで悲しむ、その程度で済ますことができるようになったのに、いきなり拉致されちゃって衝撃の事実つきつけられちゃったからなあ。

それでもわたしが全部悪いんだらうか？

納得しきれず首を傾げると、人の心を読んだかのように魔女がふつと苦笑を浮かべる。

「少なくとも私に聞くことはできたでしょう？それなのに貴女と来たら、こっちが説明することを受け止めるばかりで自発的に質問したりしないんだもの。何か思うところがあるのかしら、とか勝手に喚んでしまった方としてはこれでも気を使っていたのよ」

そうでした。エイリスは本当はいい人だったんだって、別れ際、思ったじゃない。わたしの様子を見つつ気を使ってくれていたと言われればわかる。なにしろさつきも自身で認めたように、踏ん切りをつけるのに半年かかってたんだから、その間よけいな知識を入れないでいてくれた彼女に感謝しなくちゃいけないんだらう。

「ごめんなさい。確かにあの時間いてもわたし、混乱するだけだったよね。でも今は大丈夫。混乱突き抜けて空飛んでるから」

実際、衝撃が大きすぎて理解するって言うより無理矢理自分の知識にした感じ。でも、おかげで何聞いても大丈夫な気がしてるから笑ってみせるとエイリアスもほっとしたように表情を緩める。

「そう。それなら話しても平気ね。こちらの世界の女性は平均で4人から5人の夫を持っているわ。多い人になると二桁なんて例もあるから、子供が産めるうちはいくらでも男性から求められるわね」
「じゃあエイリスはもう、女性として終了？」
「失礼なっ」

いきなり小さい風の塊をぶつけられて、頭を押さえると正面で魔女が怖い顔をした。

凶暴さも、1日ぶりくらいじゃ変わらないらしい。一緒にいる頃も口答えするところという攻撃をよく受けたものだ。

懐かしさじゃなく痛さで滲んだ涙を拭いつつ先を促すと、彼女は面白くなさそうに続けた。

「魔女はね、特別なのよ。他の女達みたいに子供を、特に女の子を産むことに固執したり生涯をかけたたりしないの。それより魔力の強い男と結婚して、自分の後継者になる存在を世に送り出す、それに生涯をかけるから目的を達すると子作りより後継者の育成に力を注ぐの。因みに独立した息子も魔術師として生計を立ててるわよ。私が死んだらあの子が女性を召還する仕事を引き継ぐわ」

「へえ初耳」

「貴女がある程度仕込んだら会わせるつもりだったのよ。ついでに結婚させて後継者を産んで貰おうと思ってたのに悪魔に奪われるな

んて誤算もいいところ」

心底悔しそうなエイリスに、思わず溜息がこぼれた。

「どうしてこの世界の連中は、どいつもこいつも人の人生を勝手に決めようとするんですかねえ……。」

12 食べられたら食べないと、本気で死にます

「ところで、文句を言うためだけに私を喚びつけたんだとしたら、なぜ両手に不可解なものを抱えさせたのかしら？」

そう聞いてくる彼女の視線の先には、茶葉の入ったポットがあって、言いたいことをとりあえず言い終えたわたしはまた空腹を思い出した。

そうそう、衝撃が強くて忘れていたけど、お茶とサンドイッチを取り出そうとしてたんだっけ。

実はエイリスを喚んだんじゃないんだと事情を説明すると、彼女は一緒にいた頃よくそうしてたように、眉間にしわを寄せる。

「何度も教えなかったかしら？魔法を使うときは雑念を入れると失敗するわよって。今回は運良く私と食材が判別できる状態で召喚できたけれど、融合して出てくることだってあるのよ？」

睨みながら言われて、ちょっと想像してみた。鶏肉や茶葉とどこがどうともわからないほど融合した羊人間…。

「ホラー…スプラッタ？…まって、ある意味おいしそう？」

「師匠を食べる気？」

また飛んできた風の玉に顔面を直撃されつつ、空腹は恐ろしことを想像させるものだとしみじみ思う。

いかに羊っぽい顔をしていようと、会話ができて意思疎通が図れる存在をジングリスカンにしようという気にはなれない。そんなの当たり前だけど、それくらいお腹が空いているのだ。

「朝ごはんをちょっとしか食べられなかったんだもん。それなのにおかしな話しは聞かされるし、感情は勝手に食べられるし踏んだり蹴ったりで、今なら何でも食べられる自信があるよ。例えこの前の蛙だって食べてみせるっ！」

ひと月くらい前に食卓に上がった蛙の姿焼きっぱいものを思い出して、わたしは握り拳を掲げた。

元が羊な分、基本的にエイリスはベジタリアンだ。けどそれじゃあ物足りない雑食の人間のために彼女は度々肉を調理してくれていたんだけど、この世界の肉食種族が好んで食べると出されたあれには参った。

だって、皮とかついたままなんだよ。しかもいかにも半生っぽくて、食欲より吐き気が増したからね。2度と見たくないと思ってた料理(？)だけど、今ならいけそうなほどお腹空いてる。

「あなた、相変わらず自分の体の変化について鈍いつていうか鈍感よね」

「だけどエイリスはこんなわたしに別方向から同情的視線を送ってきた。」

自分の体に鈍感って…さっきの言葉が喋れるようになった理由を教えなかったと責めたこととかと絡めて呆れてるんだろうか？それって一体、

「どういう意味？」

さっぱりわけが分らないと顔を顰めると、魔女は微笑む。

「たかが朝食を抜いたくらいで、見るのも嫌だって騒いだ料理でも食べられそうはほど空腹を覚えるのはなぜだと思う？その食欲は異

常だと思わない？」

「え〜？そう言われれば、おかしい？」

確かに、学生時代は朝抜きで登校とかよくあったし、それで胃が痛くなるほどお腹が空くことはなかったと思えば、エイリスの微笑みは嘆息に変わった。

「悪魔に感情を食べられたせいよ。感情は即ち生体エネルギーのことだから、早急に体力の補給をしなくちゃ倒れちゃうよ？」

「はあ？！それ、早く教えてよ！！」

「あら、てつきり聞いていると思ってたわ」

なんて意地悪なんだと詰る時間ももつたいなくて、わたしは開かずの間と化していたドアを勢いよく開けるとやっぱり控えていた小間使いの男の子に（女性が貴重なのでメイドはいない）叫ぶように頼んだ。

「お腹空きました！大至急、食べ物希望です。できたら甘めの食後のデザートも」

よっぼど鬼気迫る顔してたんだろうか。言われた男の子は威勢良く返事をすると、血相を変えて厨房へ走っていく。

「あ、お湯とティーポットとカップを2人分、先に下さい〜！！」
「わかりましたっ！！」

忘れていたと駆け去る背中に叫ぶと、再び大きな声が帰返ってきた。

やれやれ、これで食料とお湯の確保はできた。昨日から出てくるのは癖のある紅茶ばかりで口に合わなくて、水を飲むしかなかった。

んだよね。エイリスには怒られたけど、わたしの召喚魔法も捨てたもんじゃないんじゃないの？

なんて浮かれて部屋に戻って、思わず回れ右をする。慌てて出ようとした扉は鼻先で閉まって、微妙に鼻先を掠めた。

「ちょっと、置いていくなんて薄情ね」

「いやいやいや、当然の反応だと思うよ、この場合」

魔女だけだと思った部屋に、いつの間に入り込んだのやら白黒の双子がいたんじゃ、逃げたくもなる。

「ほら見なさい。私達しかいないと思っていた屋敷に貴方方がいるから、ミヤが驚いて逃げたそうとしたじゃないですか」

「違うと思うね。あれはさっき彼女の許しも得ずに感情を食らいつくした悪魔が怖くて逃げたんだよ」

「そんなわけあるか。ミヤは私達の花嫁だぞ。夫を見て逃げる妻などいない」

「そうだな。だが夫を捨てる妻は、掃いて捨てるほどいるぞ」

メトロスさんとサンフォルさんは正しいが、アゼルさんとベリスさんは大間違いだ。勝手に人が何を思ったか決めないでほしい。

わたしは自室に招いてもいない人間がいることが嫌なの。だから4人全員とも歓迎してないし、花嫁云々もそっちが言ってるだけでわたし自身はまだ誰とも結婚してないんだから、その辺間違えないでほしい。

ともかく、はっきりさせなきゃいけないことがある。

「4人とも、どこから入ったんですか？まさか空飛んで窓から不法侵入とかしてないですよね？」

睨むと、全員様々なれど一様にそれを態度で肯定した。悪魔は悪びれず微笑み、天使は気まずそうに視線を逸らす。

ま、わざわざ聞くまでもなく、バルコニーの開いているガラス戸を見たら一目瞭然なだけだね。

「なんでそういうプライバシーの侵害を軽々とやらかすんですか。ここは確かにアゼルさんとベリスさんの家かもしれませんが、ここはわたしに貸し与えられた個室です。許可のない入室はお断りします」

「ですが急に魔力が蠢くのを感じましたので、もしや賊かと心配したんです」

「そうです。部屋に結界が張られて中の様子を探ることもできなかつたので、これは緊急措置なのですよ」

アゼルさんとベリスさんの必死の言い訳に、ちらりとエイリスを見やればぺろりと舌を出して見せた。

「エイリス！なんで余計なことしたの」

「だって、逃げ出したいから喚び出したって言われたら、ミヤを連れてここを出るつもりだったんだもの。結界はそれまでの足止めだったの」

「…ああ、そう。それはご親切にどーも」

親切心はありがたいけど、迷惑です。おかげで部屋が騒がしくなつたじゃない。

脱力しながらやれやれと溜息だ。エイリスは自分で『優秀』な魔女を自負するだけあって、一般人には難しすぎて使えない魔法をよく使う。その1つが簡易魔法陣を水で描いて空間を越えるというもの、ドラえもんのどこでもドア的な感覚なやつ。

ありがたいことにそれでわたしを連れ出してくれるつもりだった

みただけど、逃げ場なんかないんじゃないかな、この世界中のどこにも。だって『滅らないエサ』の存在はアゼルさんとベリスさんだけでなく、サンフォルさんもメトロスさんも知っていた。犬猿の仲にしか見えない両者が互いに知っているとなれば、国中の悪魔と天使にばれてるような気がしないでもない。

怖いから聞けないけど。

ともかく、逃げるより誰かの庇護を受けてる方が安全だと判断してわたしはここにいるんだから、せめて騒ぎを起こしてほしくないんだけど、

「なあに？最初に喚んだのはミヤの方でしょう？」

…ええ、その通りです。

13 これ以上、夫候補はいりません

「なぜ魔女を喚んだのですか？」

「またもやエイリスの失言で、アゼルさんから微笑みを向けられるはめになってしまった。この手の笑みは目が笑ってなくて怖いので、やめてほしい。」

焦って嘘でも言おうものなら怪しまれるし、なにより嘘をつかなきゃならないような理由でもないので正直に理由を話すと、メトロスさんがそれみたことかといわんばかりの得意顔で悪魔の双子を責め始めた。

「本能の赴くままに感情を食べるから、ミヤは怒って引き籠らざるを得なくなつて、とぼちり呼び出された魔女のせいだ僕たちまで振り回されたんだけど、これでもまだ自分たちだけが彼女の夫だとか言い張るわけじゃないよね？」

「…確かに、今朝ほどはやりすぎましたが基本的に彼女は私たちの妻です」

「そつだ。国にも庇護者としてきちんと届けは出している」

その辺、初耳なんですけど？…なんて言える雰囲気ではなく、サンフォルさんまで参加してドンドン空気は悪くなる一方です。

「そんなものはミヤが庇護者を変えたいと申請しなおせば済む話だ。幸い彼女がこの家に来たのは昨日、馴染んだ物や思い出もほとんどあるまい。なにより、感情を食われればそれを補うために大量の食事を必要とする、などという初歩的な説明を忘れた連中にたった一人しかいない『人間』のミヤを預けるわけにはいかぬな」

「時間がなかつたんですよ。貴方方が早朝から襲撃のように訪ねて

きたもので」

わたしの意見など全く聞く気なく舌戦を繰り広げる4人を呆れ半分で眺めていると、いつの間にもやら背後に立っていたエイリスが楽しげに囁く。

「すごいわねえ、ミヤの争奪戦。まあ、あなたの体がもつのなら何人夫を持つても構わないんだから、別に奪い合う必要はない気もするのだけれどね。どう？その勢いでわたしの息子も夫にしてみない？」

勘弁して…。

夫を1人持つにも早い年齢の地球人に、なんの試練ですか、これ？しかも人間的には乗り越えなきゃいけない何かがいっぱいあるんです、この世界の人達は。

まず、平均30センチは違う身長差。これ、思いのほか威圧感があって怖いんです。常に見下ろされてるんだよ？それが今でさえ4人もひしめき合って…小学生が高校の教室に放り込まれたような圧迫感があります。

次に倫理観。一妻多夫って、旦那さんは何人いてもいいって、言い方変えたら浮気し放題の平安貴族なイメージです。それも男女逆バ―ション。光源氏が性転換して頭の中で妖艶に微笑んでる状況に、未だついて行けません。

最後に一番大事な種族の壁。地球には肌や髪なんかの色素の違いこそあれ、鳥人間や羊人間はいなかった。ましてやトカゲとか蛇はもう、無理とか以前に受け付けません、いろんな意味で。幸い夫だなんだと騒いでいる方々は一見でっかい人間にしか見えない外見

の持ち主なので、なんとかなってますが、このうえ羊な男性に出てこられたら…考えるだけで逃げ出したくなって来た。やっぱ、羊は無理。目玉は普通がいい。

「…あなた、息子が私と同じ外見だと思ってるでしょう？残念だけど、違うわよ。あの子達は夫に似たから、狼と猫」

「猫はともかく、狼は抽象表現抜きにしてマジ襲われそうなんだけど」

一段、低い声で再び囁いた魔女に、背筋を冷たい物が流れた。

狼に襲われる、は日本人なら大抵知ってる表現なんです。ちよつと古くさいけど、今でもちゃんと伝わるんだ。『狼なるなよ』とか『送り狼』とか。それが本気で狼なんだ。耳が狼なのかな。目は犬とか同じだと白目がないんだけど、羊なエイリスにも白目はあるから狼にもあるのかな？猫は町中でちよくちよく見た記憶が…あれ？

「ちよつと、魔女は夫をたくさん持たないんでしょ？なんで息子が狼と猫なの。しかも『跡継ぎはあの子』って複数形じゃなかったから、1人だと思ってたんだけど？」

「夫が2人いたからに決まってるでしょ。ちつともたくさんじゃないじゃない。それにどつちも魔術師だけど、高度の魔法はジャイロ…猫の息子しか使えないの」

平然と言い切られるとこつちが間違ってた気分になるから不思議だ。

…そうか、2人は多くないんだ。じゃあもしも、わたしがアゼルさんとベリスさんを夫にする気になったとしても、それだけじゃ足りないわけですね。平均的には後2、3人夫を持てと。だから息子さんのどつちかを…？

「いやいやいやいや、多い。2人でも充分多い。同時に旦那さんが2人とか無理がある。どんな生活ですか」

同じ屋根の下に夫が2人を想像して、愛人と本妻が暮らす家、的想像をしてみましたじゃないですか。

本気で嫌そうにエイリスに尋ねると、彼女はやっぱり何でもないことのように笑顔で言った。

「どんな生活も女次第よ。同じ家に数人の夫と住む女もいれば、それぞれの家に通う女もいる。大概の男は女が望む生活スタイルに合わせて結婚して貰うの」

「偉そうですね、随分」

「偉いのよ、女は」

絶対的権力を女性が持てることには、全く反対はない。むしろ女とすれば歓迎だけど、ここまでくるとちょっと違う気がするから、根付いた倫理観って怖いなって思う。

ていうか、むしろ召喚術に引つかかるのが貞操観念が薄い女性なら問題ないんじゃないの？探せばいそうじゃない、カレシ何人でもオツケー、週替わり大歓迎とかの女子。実際クラスにもいたし、本命とセフレと告られたから何となく付き合い始めちゃったってカレシ3人持ちの子が。あ、それでも3人か。5人って案外難しいよね。

「だーかーらー会うだけでも会ってみない？狼はもう奥さんが1人いるんだけど、猫は独り身なの。ミヤの好きな方を選んでくれていいから」

「好きな方って、狼さんは奥さんいるんでしょう？」

「いたって構わないわ。なにしろ7人目の夫だからさして大事にもされていないし、あの子が別れたいって言ってもあの奥さんは全く

気にしないわよ。むしろ1人分空気ができたって喜ぶくらい。なにしろまた新しい男を追いかけてるらしいから」

「わお。男の人はサバイバルなんだあ」

「ええすっごい競争社会よ。だから現状に満足している女はあまり家から出ないのよね。これ以上目移りしても1人じゃ相手にできる人数に限界があるし、望みもしない男に見初められて言い寄られるのも気持ちのいいことじゃないもの」

「うーん…星を変えても存在するのか、ストーカーは」

共通文化を見つけたというのに、虚しさしか残さないとは。ストーカー恐るべし。

それにしても街でほとんど女性を見かけなかったのは、そういう理由だったのかあ。じゃあ、その中にいて声をかけられなかったわたしって、どんだけ恋愛対象外なんだって話しだよな。初めて投げつけられた『美しくない』って言葉が突き刺さるなあ。

と、ここまで考えて気づいた。それじゃあ、ダメなんじゃないって。

「あのさ、エイリス。悪魔や天使はわたしの魂が『キレイ』つまり『おいしい』から好きだって、利用価値があるって言うてくれるけど、エイリスの息子さん達には『美しくない』女でしかないんだから、会ったとしても嫌な顔されて終わり、じゃない？」

別に会ったこともないし、結婚すると決めたわけでもないんだからそんなことを心配顔で聞くこともないんだろうけど、なんとなくトラウマが疼くので言葉にしてしまう。けれど魔女はウインクでもしそうな勢いで、請け合ってくれた。

「その辺は気にしなくても大丈夫。私、ミヤを初めて見てすぐ、ひどく『キレイ』な魂を持つてるって気づいたのよ。遙か前、1度だ

け召還された『人間』だってその時にわかった。高位の魔女や魔術師なら、あなたの魂を見ることは容易だし、息子達は2人とも私とほぼ同じ力を有する魔術師。『キレイ』な貴女に惹かれないわけがない」

14 うっかり者は、結婚もうっかりするものです

なんで高度な魔法が使えると『美しくない』わたしと結婚する気になるのか、さっぱりわからなくて首を傾げているとエイリスは更に詳しい説明を加えてくれた。

「天使や悪魔にミヤの魂が『キレイ』に見えるのは貴女の魂が力を持っているからだって言うのは、わかるわよね？だから貴女を『キレイ』だと褒めるんだってことも」

こっくり。なので死ぬまで美味しく頂けちゃうんだ、っていうのもわかってます。

「魔術を操る者達もね、あまり外見で人を判断しないの。なにしろ優秀な伴侶を得なければ優秀な後継者を残すことはできないから。そこで魂に宿る力を見て、それが強い者を選ぶ。狼の息子が多情な女性を選んで妻としたのも、彼女の魂が強かったから。良い跡継ぎを作ろうとして選んだ相手だけれど、子供を産んでもらえる確率はとても低そうだし、なによりミヤの方が遙かに強い。貴女さえ彼を望んでくれればさっさと彼女と別れるでしょうね。猫の方なんてもっと計算高いから、何が何でもミヤに子供を産ませようとするかも…？」

尻すぼみに小さくなった声は、最後の方で疑問系になり小声で「まずい？」とか付け足す始末。いつの間にも眉までひそめて、口の中でブツブツ呟いてるし、あのね？そんなやばそうな息子さん、紹介してほしくないんですけど？

なにやら危険なモノを感じて全力でご紹介を拒否しようとしたところで、先手を打たれた。

「ま、何とかなるわよ！貴女だって魔法が使えるんだし、いざとなつたら天使と悪魔が4人もいるものね」

「…それ、他力本願とか運任せとか言うんだよ。全然なんとかなる気がしないから、マジで」

「だいたい天使や悪魔がいかにお金持つてようと、権力者だろつとヒエラルキーの天辺だろつと、異星から女性を召還できちゃうほどの魔法を操る相手にそうそう勝てるわけない。」

「そう言えば、エイリスは勝てるわよつと簡単に否定する。」

「あのねえ、天使だ、悪魔だつてだけで世界を牛耳れるわけないでしょ。私達と違って彼等種族は皆、生まれながらに魔力を持っているの。もちろん程度に差はあるけれど、基本的にはその辺の魔術師じゃ対抗できないレベルよ。ただし高等魔法が操れる者であればかろうじて1対1での勝負に勝利することが。だけど4対1じゃお話にならない。だから彼等という限り、ミヤの安全は保証されているわ」

「…へえ…」

「それじゃあわたしがせつかく魔法を使っても、4人には絶対勝てないってことになるじゃない。」

「本気で逃げも隠れもできないんだと、絶望を噛みしめているところに魔女は追い打ちをかける。」

「ね、だから息子に会ってみなさいよ」

「人の目を盗んで、バカなことを吹き込まないでください」

「う、わあっ」

急に掬い上げられた体は、子供のように膝裏を片腕で支えられた

だっこの形で、アゼルさんに密着した。不安定な姿勢と高すぎる視界が怖くて、無意識に彼の首にしがみつく。

それに気づいたアゼルさんは顔をこちらに向けると、闇色の瞳を三日月型に変えて「嬉しいですよ」と囁いてから唇にキスをくれる。優しい、触れるだけのバードキス。…だけど、キスはキスですっ！女の子の許可なくファーストキスを奪うとは何事ですか！

「アゼルニクス、抜け駆けは汚いぞ」
「んぐっ」

憤慨している最中に笑いを含んだベリスさんの声がすぐ隣でして、そっと頬を取られたわたしは横を向かされてもう一度キス。

ですからね、勝手に乙女の唇を奪うんじゃないって言ってるんですよ、ベリスさん！ああ腹が立つっつああむかつくっ！

と、憤慨してはっと気づく。また感情を食べられたら、もう餓死するんですけどぉ？！

しかし、きよろきよろと見比べた悪魔2人は困ったように微笑するだけで、今朝のように『怒り』を食べた様子はない。

「これでもやり過ぎたと反省はしているんです」

「久しぶりの食事だったので、つい抑えが効かなくてすみません。お腹空いているでしょう？」

謝罪してくれた彼等は、なんだかいい人に見えたりするから困る。

「絆されるな」

「騙されちゃダメだよ」

「単純だねえ」

外野はそんなわたしに否定的だけれど、労るように背中を撫でて

くれるアゼルさんの手とか、扉の外まで食事の催促をしに言ってくれるベリスさんは、嫌いじゃない。考えれば無断で感情を食べる以外の悪さをされた覚えもなく、彼等は大概紳士的だったと昨夜はおとなしかった双子達を思い出す。

なのに暴走したのって…

「サンフォルさんとメトロスさんが襲撃してくるまで、2人は優しくかったですよ。きつと今朝だって、ちゃんと説明してくれるつもりだったんですよね？」

様々な食べ物が所狭しと並んだ朝食のテーブルを思い出して、アゼルさんに問う。

起き抜けにあんなに食べられないって思ったけど、感情を食べられるとお腹が空くって知っていた彼等がそれを見越して用意していた気がする。

嬉しそうに笑ったアゼルさんは、もちろんですと請け合って、横から手を伸ばしてきたベリスさんはわたしを抱き取りながら、わかってくれて嬉しいですと頬にキス。

「許可なくキスしたらダメです。その辺は理解してないです」

むつと膨れて金色の頭を押しやると、すみませんとちつとも悪びれない返答をされ、さっきまで転がっていた長いすに彼の膝に乗る形で座らせられる。

すると目の前のテーブルにはカイクさんが1つ、また1つと湯気の立つ料理の皿を並べているところだった。

「1」飯ー」

「はい、どござ」

思い出した空腹に思わず叫ぶと、口の前までアゼルさんがサンドイッチを運んでくれている。

ここで言い訳したい。平常時のわたしなら、子供のように人に食べさせて貰うことなどないんだって。

でも三大欲の前では、人間の理性など脆いもので、無意識にそれをひと嚙りしてしまった。

「おいひーっ！」

そして、この世界に来てからは出会ったことのない柔らかな食感のパンに感動してばくばくとそれを胃に収めていく。

サンドイッチが終われば、卵料理。次は肉に野菜と、アゼルさんに差し出されるまま無心で食欲を満たす。

思い出したように、

「ほら、汚しています」

なんて声と共にベリスさんに口元を舐められても、ああまた舐めつつ風気づいてはいるけど関心は向けない。食べることに異常なまでに集中していた。お腹が悲鳴を上げるまで食べ続けて、やっと少し正気に返って。

はたと、気づいた。

「アゼルさんとベリスさんも、こんな風にお腹が空いてたんですか？」

極度の空腹を経験した今なら、溢れ出ている感情を前に箍が外れたようにそれを貪ってしまった彼等の気持ちもわかる。

わたしをのぞき込んでいた2人は、答えずに微笑んでいるだけだったけれど。

「アゼルニクス様もベリスバトン様も、最後に『エサ』をお召し上がりになったのは5日前です。私達にとっては極限状態といっても過言ではありません」

主に変わって控えめに教えてくれたカイクさんは、どうやらわたしの食事が終わるのを部屋の隅で控えて待っていてくれたらしい。見やれば他の3人も空いたソファや椅子に適当に腰をかけ、優雅にお茶していた。

「それじゃあ、うつかり感情も食べちゃいますね。さっきのは不可抗力だったんですね」

エイリスに頂戴とお茶を催促しながら、しょうがないと頷くと彼等は何故かすみませんと謝罪する。

「ミヤに初めて会った日は、10年私達に感情を提供してくれていた女性が壊れてしまった日、だったのです。最後まで親御さんにお返ししようと彼女の生まれた街へ行き、その帰りに『人間』の貴女に出会った。私達は狂喜し、神に感謝した。新たな『エサ』を探すことをやめ、ミヤを手に入れるため奔走した」

素早くわたしをソファに下ろし、その前に跪いたベリスさんが強く手を握ってきた。その表情はとっても真剣で、闇色の瞳はとても誠実な光をたたえている。

「悪魔にも天使にも感情はあります。長く共にあった女性が壊れていくのを見ているのは、辛いのです。けれど我々は生きていく限り『エサ』を必要とする。ミヤ、貴女は私達にとって最愛の人です。長い一生を壊れることなく共にいてくれる、子を産んでくれる。し

かもその子らは同胞を救う希望ともなる。貴女は理想の女性だ」

アゼルさんもまたわたしの前に跪き、真摯な眼差しでこちらを見ていた。

「愛しています。どうか私達と結婚していただけませんか？」
「はい」

あ、頷いちゃった。

勢いで返事をして一瞬後悔したものの、目の前で手放して喜んでいるアゼルさんとベリスさんを見ていたら、なんだかこれでもいいかとも思っただけ。

どうやら、本日から人妻みたいです。いきなり旦那さんが2人なんですけど、大丈夫なんでしょうか？

15 好きまでの道のりは長くて遠いようです

基本、2人はわたしの嫌がることをしない。だから結婚を承諾してしまつた日から10日たった今も、その、いたしてません。ちゃんと別々の寝室だし、不埒な真似とかされてないし。

健全よねえなんて考えながら食堂の扉を開けると、待ち構えたようにやってきた金銀の双子がわたしを抱き上げる。

「おはよう、ミヤ」

「おはようございます、ミヤ」

両頬に同時に触れる唇は、西洋で挨拶がわりとされるアレと同類だと認識しているから。この世界にそんな習慣はないらしいけど、認めない。これはキスじゃない。

「おはようございます、アゼルさんベリスさん」

日本人として礼儀正しく軽い会釈をしたわたしは、もうすっかり諦めて体を預けている。

視線が低いとかなんとか、もっともらしい理由をつけた彼等は、わたしを見つけるとすぐ抱き上げるのが習慣と化している。初日こそ抵抗もしたし、文句も言ったけれどやめる気が全くないようなので無駄なことはもうしません。

え？それは嫌がることをしない定義から外れてないかって？外れてません。大事なところではかなり譲歩してくれているらしいので、この程度は免除です。いえ、むしろこの程度で済ませてくれるなら安いものです。

17年かけて培った倫理観を根底から覆して一妻多夫制を受け入れるまで、彼等と本当の意味で結婚をする気はないので、暴走しな

いように適当にガスを抜いて貰わないと困るんです。

「今朝はお天気がいいので、テラスで朝食ですよ」

微笑んでわたしを抱いているのはアゼルさんだ。この作業はどうやら交代制らしく、食事のたびにその役割が入れ替わっている。今朝はアゼルさんの膝の上で、ベリスさんに給餌されるらしい。

そう、給仕じゃなく、給餌。鳥さんなんかがよくやるあの行為です。はい、あーん、です。

死ぬほどお腹が空いていたあの時だけのことだと思ったのに、2人ともあれがいたくお気に召したらしく、毎食ごとに赤子のように食事させられています。

もう、慣れましたけどね、ふふふ…あはは…。

「さあ、何から食べる?」

花々が咲き乱れる庭を眺めながら、お日様の光をたっぷり浴びて朝ご飯なんて、すっごい贅沢。しかも美しいオポジションまでついているっ!…と、自分を奮い立たせながら現状から目を逸らし、取り敢えず近くにあったウインナーらしきものを希望した。

「では、口を開けて」

「今日は上手に食べられるといいですね」

「そーですね…」

よく言うつよね。毎度毎度わざとソースとか口の周りにつくように仕向けて、それを舐め取って楽しんでるくせに。ついでにジンワリ沸き上がるわたしの怒りを食べて、自分たちもお腹を満たしているくせに。

本当、毎日これって嫌がらせてっていう精神攻撃だわ。ずーっと続

けられたら、いつか爆発する。絶対する。

…まさか、それが狙い?! やーよね、姑息な悪魔って。

なんて考えながら、フオークに刺さった長めのワインナーを嚙る。当然、肉汁がじゅわつと溢れて、クスクス笑いながらアゼルさんがそれを舐め取る、わたしが怒る、彼等も食事する。

こんな感じなので、朝っぱらから2人以上の食事を頂きます。じゃないと体、持ちませんので。絶対わたし胃拡張になってる。でも、好きなものいっぱい食べても太らないって、それはそれで幸せなことなのかなあ。

食後のお茶(エイリス特製)を楽しみながら(さすがに飲み物は自分で飲みます。こぼすから)、ぱんぱんに膨れたお腹をさすっていること、

「おはよう、ミヤ」

「良い朝だね!」

これまた見慣れた顔が2つ、庭にばっさばっさと降り立った。

サンフォルさんとメトロ口すさんだ。いっつも扉を使わず翼を使つての不法侵入をかます天使さんたちは、実は隣人だったらしい。

とはいえ高級住宅街、100メートルほど歩かないと隣家の玄関にはたどり着けないので、飛んでくるのは合理的? でも、非常識?

「土産だ」

どうでも良いことに頭を悩ませていると、サンフォルさんが微かな笑みを浮かべて、小さな箱を差し出してきた。中身はわかっているけれど、毎回意匠を凝らしたそれは形や味が全く違うのでやっぱり嬉しくて、遠慮なく受け取るとそーっと開ける。

「わあ…フルーツタルトだあ（ハート）」

色とりどりの果物がゼラチンを塗られてキラキラ輝いている姿は、食べるのがもったいなくなる美しさを放っていた。

「ありがとうございます、サンフォルさん、メトロスさん」

自然に湧き出る笑みを押さえきれず礼を言うと、ベリスさんがタ
イミング良くフォークを差しだしてくれる。

給餌が恒例となっている朝食で、デザートを唯一自分で食べるこ
とができるのは、これが金銀の天使の食事となる感情を生み出すか
らだ。

この家に住むことが決定づけられた翌日、神妙な顔をしてやって
きたサンフォルさんとメトロスさんは、普段犬猿の仲だそうな悪魔
の双子に頭を下げた。

曰く、食事のたびに女性の心をじわじわ壊すのは自分たちだって
望んでいない、できればわたしの『喜び』の感情を少し分けてもら
えないだろうか。

僅かに逡巡したようだけれど、アゼルさんもベリスさんも結局承
諾した。天使が好むのは悪魔が必要としない正の感情だ。同じ苦し
みを抱えた者同士、博愛精神で『喜び』くらい食べさせてやっても
構わない、と考えたらしい。

で、翌日からサンフォルさんとメトロスさんの、わたしを喜ばす
試みとやらが昼夜問わず開催されたワケなのだが、綺麗なドレスや
宝石は日常生活に全く必要がなかったせいか、ほとんど感情を動か
すことができず、甘い言葉は裏があるんじゃないかと疑い、娯楽施
設へのお誘いは悪魔の双子が許可しなかったせいで実現せず、やつ
ぱり正攻法『甘いケーキ』で落ち着いたのだ。

以来、毎朝ケーキを届けて、喜ぶわたしの感情を食べていくわけだが。

「うーっ、美味しいっ」

「そうか、ならば家に来たらどうだ」

「そうそう、そしたら毎日ケーキが食べ放題だよ」

こうして恒例のお誘いを欠かさないもんだから、空気が悪くなる。

「ミヤは私達の妻です」

「そうだ、バカなことを言うな」

「なにいつてるのさ、まだ正式に結婚したわけでもないのに」

「女性が日毎に住処を変えるのはよくあることだろう」

目に見えない何か音が立てていても、気にしない。

取り敢えずわたしの毎日は概ね平和で、食生活はこれまでにないほど充実している。

だから、きちんと夫となった人達の良いところを見つけて恋して、本当の結婚をするまで、外野のことは気にしないのだ。

例え、ちょっとと言えないほどうるさい争いが、頭上で毎日繰り返されてきたとしても。

16 朝、アゼルニクスさんに食べられ

家主が仕事に出かけると（2人とも王宮勤めなんだって）暇になるわたしは、魔術関係の書籍が山とおさめられている図書室にいることが多い。エイリスからちゃんと念押しされているので、魔術で天使や悪魔に勝てるとは思っていないけれど、いざという時、自分の身くらい自分で守れるようにしておきたいんだ。

なにしろ魂はどうあれ『人間』は他種族より圧倒的に弱い。生身では絶対負ける。なんでせめて魔法っていうアドバンテージくらいは死守しないとあつてそこから来ている行動だ。

というわけで、午前中は何かと忙しいカイクムさん達を煩わせないように、北側の奥にある図書室に早々に籠もったのだが。

「なんでこう、上へ上へ本を置きますかねえ」

でき得る限り背伸びをしてみるが、お目当ての本には指を触れることさえ叶わない。なにしろ棚の高さの基準となる身長が2メートル近いわけだから、当然と言えば当然なんだろうけれど、できれば踏み台の1つくらい用意しておいて欲しかった。せつかく学校の図書館並みの広さと蔵書を誇っているのに、欲しい物に手が届かないから読めないなんて、悔しすぎる。

あの魔術書、エイリスのところは無かったのだから、読みたかったのにいゝ。

無駄に足掻きながら、手近な使用人さんに取って貰おうか、それとも過激に風の魔法で落としちゃおうか、いやいやそれじゃあ本が傷むじゃないつと、無限ループで溺れそうになっていると、

「どれを取るんですか？」

不意に首の後ろ辺りでアゼルさんの声がして、勢いよく振り返ると間近に彫刻めいた美貌がある。

「う、わあ！」

「危ないっ」

驚いて身を引けば、背伸びしていたせいであっけなくバランスを崩し、転がる所を大きな手に掬い上げられた。

これは、アレですね？俗に言う姫だっこ。乙女の憧れじゃありませんか！

…なんて感動するわけ無い。いくら子供みたいに抱き上げられることに慣れたとはいえ、姫だっこはダメです。こんな美しい顔に、真上から見下ろされるなんて、平凡なわたしには耐えられないっ！
どうしてもっと美人に産んでくれなかったの、お母さんっ！とか顔を背けて嘆いていると、闇色の瞳がそれを追ってくる。

「どうしたんです、ミヤ？どこかぶつきましたか？」

「大丈夫、大丈夫ですからどうか降ろしてください」

「大丈夫じゃありませんよ、さ、もっとよく顔を見せて」

見せたくないから逸らしてるんです、どうかわかってっ。

困り果てて顔を手で覆うと、しばらく置いて短い溜息が零れ、ゆらゆら揺られてその先でアゼルさんが腰を下ろしたのがわかった。当然わたしは膝の上にそのまま着地、横だっこです。

そういえば図書室には、小ぶりのテーブルと椅子が用意してあったっけ。そこまで移動したんだ。

「さ、ミヤ。手をどけて」

優しく命じながらわたしの手を強制排除したアゼルさんは、極甘な笑顔でこつちを覗き込んでくる。

毎朝似たようなことしているのに、シチュエーションが違うせい
か、アゼルさん1人だからなのか、それがとつても恥ずかしくて、
微妙に熱い顔を隠すためにわたしは深く俯いた。

「ミヤ：そんな風にされては貴女の顔を見ることができません」

「見、なくて、いいです、から」

「ダメです。さ、見せて」

優しく言うくせに、有無を言わせぬ強引さで両手をわたしの頬
にかけてアゼルさんは、強引に仰向けに多分赤くなってるだろっ顔
を見て、笑みをいつそう深めた。

そうして何が嬉しいのか、柔らかなキスを顔中に落とす。音を立
てて何度も、あちこちに。

こつちは照れてアゼルさんの顔も直視できないって言うのに、無
理矢理視線を合わせた彼は甘く囁いた。

「私を意識して、頬を染めるのですね。このところは抱きしめたり、
唇を舐めたりしてもあまり反応して下さらなかったのに、2人だけ
だとミヤはこんなにも愛らしい」

「え、やっ」

抵抗する間は、与えてもらえなかった。

気づけば口づけられて、それはいつもの触れるだけのものとは明
らかに違う、意思を感じさせるから、このままじゃまずいと僅かに
身じろいだのがいけなかった。

「逃がしません」

僅かに離れた唇の隙間で、今までに無い艶を秘めた声が響く。直後、アゼルさんは身動きできないほどきつく抱きしめてきた。

そう言えば、動物は本能で逃げるものを追うんだっけ。しまった、抵抗しちやいけなかったんだ…。

今更遅いだろうかと思いつつも、期待を込めて全身の力を抜いて降伏を体現してみたんだけど、やっぱり効果は無く、むしろ攻撃は激しくなるばかり。

何度も唇を舐められ、甘噛みされて、気持ちが悪いんだか良いんだか、微妙な気分になってきた。

アゼルさんは…ベリスさんより落ち着いていて、知的で冷静なお兄さんのイメージだったのに、なんか、激しいというか、過激というか、ヤバイというか…。

これは「やめて」とか言おうとして口を開くと、そのままベロちゅーに発展する非常にまずいパターンなんで、意地でも歯を食いしばって耐えないとっ！

何度も何度も唇や、果ては歯列まで舐めていく危険な行動に、より一層警戒を強めた時だった。

ようやく諦めたのか拳一つ分ほど顔を離れたアゼルさんが、いつもの数倍目力を込めてわたしを見つめながら、掠れた声で懇願する。

「ミヤ…お願いします、口を開いて」

ずるいと思います。すつごく、すつごく、ずるいです。汚いです。わたしごときにそんな切羽詰まった顔をお願いするなんて、反則です。断れない、断れないようっ…。

それでも躊躇うのを、一瞬たりとも逸らさない強い視線で説得さ

れて、おずおず噛みしめていた口を開く。

それはほんの少いで、指一本も入らないような隙間だったのに、すかさず再び口づけてきたアゼルさんは舌をねじ込んできた。

「ん、んっ！」

ぬるぬるした未知の感覚に慣れなくて、知らずに逃げようとする頭を大きな手が拘束する。絡み合うように動いたり、上顎を舐めたり、舌を吸い上げられたり、どれも初めてでくすぐったいその感触に、次第に頭が白濁してきた。

半分は呼吸困難による酸欠のせいだけど、残りの半分はなんだろう。

何かにしがみついているなきや体がどこかに行ってしまったいそうで、わたしは必死にアゼルさんの背にすがる。その間にも角度を変え、離れることの無い唇は深く、深く絡んでいた。

「んう、ふ…」

ああ不気味な声、出しちゃった。鼻に抜けた弱々しい、おかしな声。自分のじゃ無いみたいだ。

胸が痛いくらい波打っていて、まだまだキスを続けたいような、もうやめなければ引き返せないほど遠くに流されそうな、快樂と不安の間で心が揺れている。

その瞬間、襲ったのは覚えのある脱力感。

最近気づけるようになった、感情を食べられた時に体を感じる僅かな変化だ。ちょっと囁かれた位じゃ大してわからないけれど、根こそぎ吸い上げるように食らいつかれると、全力で100メートルを走り終わった数分後のような気怠さが体を支配するのだ。

じんわりと回った疲労が、必死に握りしめていたアゼルさんの服から指先を引きはがす。それを合図としたように、唇がゆっくり離れていった。

「…また、食べました、ね？」

なんだか上手く回らない舌で弱々しく抗議すると、微苦笑を浮かべたアゼルさんが「すみません」と心ない謝罪をする。そうして、これ見よがしに舌なめずりしたあと、漆黒の瞳でわたしを捕らえたまま恐ろしいことを言うのだ。

「そんな可愛い顔で見つめていると、本当に貴女を食べてしまいますよ？」

どんな顔、ですか?!今すぐやめるんで、もう勘弁して下さい…。

16 朝、アゼルニクスさんに食べられ（後書き）

これは、R15くらいで大丈夫ですか？

17 昼、メトロスさんに舐められ

結局、図書室には仕事に必要な資料を取りに来ていたアゼルさんは、セクハラと食事を済ませた後、爽やかな顔で仕事に戻って行きました。

…ああ、セクハラじゃ無いのか。夫婦前提恋人未満ていうとつてもややこしい関係だけど、お互いの同意は少なからずあるし…でもDVの基準には無理矢理ないろいろは、その、夫婦間でもダメとか恋人感でもアウトとか、会ったような無かったような…。

大量なお昼ご飯を食べて、食後のお茶をバルコニーで優雅に頂きながら、そんな難しいような難しくないようなことを考えているところに、ばっさばっさと聞き慣れた羽音がしてくる。

まさかまたアゼルさんが?!それとも今度はベリスさん?!と、怯えて振り仰いだ先には何故か白に金が眩しいメトロスさんが…

「やあ、ミヤ。元気?」

「朝会ったばかりじゃありませんか…って、何?!なんでそんなところに降りてんの?!危ないから降りて、早く!」

「ええ?大丈夫だよ」

愉快的な天使はそう言って、20センチも無いような手すりの上を身軽に飛び跳ねてみせる。

本気で楽しそうな顔を見れば、確かに大丈夫なんだろうとは思いますが、翼もあるんだしね。けどどこっちはそんな便利な物、持ってないんです。ただただ冷や冷やするだけで、ちっとも平気じゃ無いんです。

「とにかく、降りるっ」

慌てて駆け寄ってズボンの裾を軽く引つ張ると、ちえつとか子供みたいなこと抜かしながら、彼はひらりとバルコニーに降り立った。すいません、最初からその位置に着地でお願いします。サーカスの曲芸じゃあるまいに、3階の手すりでも平均台のまねことをする方と冷静に話すのは、わたしには無理です。

サンフォルさんと悪魔2人も違う、いたずらっ子のようなメトロスさんの態度と行動にいささか疲れて、元いた椅子にどかりと座ると、なぜだか彼も向かいの席にちゃっかり収まって、控えていた侍従の少年にお茶を要求している。

「まるで自宅みたいに寛ぎますね」

その様子に呆れて言うと、彼は「うん」と無邪気に笑う。

「悪魔となれ合う気なんてさらさらなかったけどね、ミヤはここにしかないし、知り合ってみると彼等も思ったほど嫌な奴じゃなかったから」

「知り合ってみるって…付き合い無かったんですか？」

「仕事上の付き合いはあったよ。特にサンフォルとベリスバドンは同じ騎士だし、隊は違ってもたまに話すこともあったみたい。僕は文官で参謀の次官をやってるんだけど、同じ文官でも参議次官のアゼルニクスとは会議で顔を合わせて必要事項をやりとりする、程度のお付き合いしかなかった。感覚としては、同じ年に悪魔の双子がいて、それぞれキャラがぶりしてるから面倒くみたいなの、わかる？」

一息にそれだけ説明しながら、人のおやつのクッキーを貪り、淹れて貰ったお茶を飲む。話し方も行動も、落ち着きの無い小学生にしか見えないんだけど、顔はサンフォルさんそっくりの美青年なと

ころがイタイよねえ。

なんて思いながら、わたしはメトロスさんの問いかけに首を振った。

「部分的にわかりません。騎士と参謀はわかるんですけど、参議がわからないし、次官の地位もわかりません。天使と悪魔が仲良くなさそうなのはどことなく理解できたんですけど、キャラかぶりって双子だから？」

「参議は国王直属の相談役兼政を取り仕切ってる人物。王や大臣が出してきた要望を適切な書面にして、国王の決裁を取り各方面に命令出したり、お金出したりしてる。次官はその人達を補佐する人間のこと、現在仕切ってる彼等が辞めたら持ち上がりで僕が参謀にアゼルニクスが参議になる。ここまでいい？」

「だいたいわかりました、と頷いて、わたしもお茶を一口。聞いているだけなのに、難しい話しにちよつと頭が疲れてきました。何やら宇宙語を聞いている気分です。」

「けれど真面目に説明してくれたメトロスさんに、それはあまりにも失礼だと、今聞いたことは絶対忘れないと気合いで脳に焼き付ける。」

「キャラかぶりは、まんまだよ。天使や悪魔にほとんど生まれのない双子が金銀の髪って共通点持つて存在して、家は近いし互いの兄弟がついている仕事も似ている。地位も同じだから、何かって言うと比較されて、そういうのイライラするでしょう？おまけに天使と悪魔は元々仲が悪い。この状況で友達になろうとか、普通考えない」「まあ、確かに」

「そう言えば、初めて彼等に会った時も、悪魔なんか天使なんかかってお互いを盛大に貶し合ってたよなあ。」

クッキーを一口食べて、だけど、と思う。

「でも減らない『エサ』を共有することに同意したんだから、アゼルさんもベリスさんもいい人に認定、ですよね」

おもちゃの取り合いをする、子供のような小競り合いは今もしているけれど、表面上は友好関係を保てるのはそのおかげだろうと頷くと、途端にメトロスさんは顔を顰めた。

そうしてテーブル越しにずっと身を乗り出すと、群青色の奥に僅かな怒りを宿して、低い声で言う。

「ミヤは確かに『エサ』だけど、それだけじゃないよ。君はとっても面白い。天使や悪魔に媚びたり怯えたりしないし、流されやすいくせに、絶対譲らない部分もきっちり持ち続けている。弱いくせに強い、変な存在だ」

いつも陽気なメトロスさんが、こんな風に真剣な顔をしているとちよつと困る。胸がざわついて仕方ない。

さつきまで子供みたいだつてくせに、ちゃんと大人の顔してわたしには『エサ』として以外にも価値があるなんて言われたら、口説かれてるみたいでときどきする。

深い意味は無い、深い意味は無いんだって繰り返しながら、熱を持った頬を隠すように俯くと、頭の天辺、つむじの辺りに音を立ててキス、された。

びつくりして顔を上げて、午前中に続いて感じる倦怠感に、また感情を食べられちゃったことを知る。

なんで断り無く食べるのって、怒りたかったのに、少し上向きの視線の先で無邪気に笑ってるメトロスさんを見たら、声は喉で止まってしまった。

「僕の言葉で、ミヤから嬉しいって感情が滲んだの、初めてだね。すごいや。ケーキで引き出した感情よりずっと甘くて、ずっと満たされる。ねえ、もっと君を喜ばせるには、どうしたら良い？」
「知りませんっ！」

照れているのか怒っているのか、自分でもわからないままさっさと立ち上がって室内に入る背中を、メトロスさんの笑い声が追ってきた。

まったく、悪魔だけでも手に負えないっていうのに、天使までこんなだなんて、本当に質悪いんだからっ！

18 タ、サンフォルさんに囁られ

「失礼する」

それは、3時のお茶の時間だった。

カイルさんに案内されて、サンフォルさんがわたしの部屋に現れたのだ。

真っ白な軍服は膝丈の詰襟で、肩章から伸びた2本の金の組紐がとつてもカツコイイそのお姿。きつといつもならば一っと思とれてたんだらうと思う。

ただし、今日は別。朝、昼、と予期せぬ来客にセクハラされたりお食事されたりして、ちゃんと警戒心つてものが身についている。学習してるのだ。

2度あることは3度ある。またなにかされるっ?!

「どうしました?」

「…それはこちらのセリフだ。何かあったのか? 怯えているようだが」

平静を装って笑ったつもりだったんだけど、あっさりばれました。いつもぞんざいな口調なので誤解しがちだけれど、この10日ほどでわたしがサンフォルさんについて知ったのは、この人かなりのお兄ちゃん気質だったこと。こまごまとよく気が付き、いらぬことまで気をまわしてくれる。

…今日はそれが、裏目に出てるんですけどね。

「いいえ、なんにもありません。大丈夫です」

ほつとくと近づいてきて額で熱でも測りそうな勢いだったから、全力で問題ありませんアピールをしたのだけど、それがよくありませんでした。

つかつか大股で部屋を横切ったサンフォルさんは、止める暇もなくわたしの傍らに屈みこんで、顔を覗き込んできます。危険です。至近距離です。綺麗だけど、恐ろしいです。

「私は悪魔達と違って、恐怖や悲哀を食すことは無い。だから君からそういった感情が流れてくると、心配だ。ミヤにはいつも、幸せであつて欲しい。いや、幸せであるよう、どんな努力を惜しまない」

……… すいません、これ、殺し文句ですか？それとも手の込んだ嫌がらせ？どちらにしても成功のようです。わたしはすっかりサンフォルさんにときめきでドキドキですから。

メトロスさんと違って、絶対に嘘はつかないと常々言っているサンフォルさんから、真剣な眼差しを送られながらこんな台詞を言われたら、勘違いします。するなつて言う方が無理です。

軍服なのもポイント高いです。ヤバイくらい格好良さ倍増です。人間は普段と違う姿とかシチュエーションとかに、とことん弱くできていく生き物なんです。

それで、小声で「私を頼ってくれ」とか言っちゃうんですよ？頼ります。がつつり寄りかかります。

実は4人の中で一番のホスト系だったサンフォルさん、貴方に癒やされたい！

「い、いじめられたんですっ！朝はアゼルさん、お昼はメトロスさんにい〜」

2人ともひどいんですよ、と。言いつけるつもりは無かったけれど、愚痴を聞いて貰う感覚でうだうだうじうじ、怖かっただけの色っぽかっただけの疲れただのと並べ立てていると、椅子を引いてきて隣に腰掛けた彼は優しく髪を梳いてくれた。

「そうか、それは災難だったな。アゼルニクスは君自身が夫にしたのだから、まあ多少のことは仕方ないと諦めて貰わねばならないが、メトロスに関しては他人の家に不法侵入しての所業だ。ミヤにはなんの落ち度も無い。私からも詫びをしよう」
「えっ、いりません、大丈夫ですっ」

躊躇いもなく頭を下げようとする彼を制止しながら、わたしはとつても慌てていた。

だって、サンフォルさんてば本当に申し訳なさそうな顔してるんですよ。まるで自分が悪いことしたように、メトロスさんの代わりに謝ろうとするの。そんな謝罪受けられるわけが無いっ！

「別に、メトロスさんに意地悪されたとかじゃないんです。いじめられたっていうのは言葉の綾で、ただ単に感情を食べられたってだけなんです。ずっと優しくかったですよ？メトロスさん。わたしは『エサ』だけの存在じゃないって言うてくれたの、すっごく嬉しかったですから。だからそんなこと、しないでください」

そう、アゼルさんは確かにちょっと強引でエツチな上に食欲魔神だったけど、メトロスさんはわたしの疑問に答えてくれて『エサ』以外の価値があるって思わせてくれた。

それって、わたしをちょっと安心させてくれる言葉だったんだ。『人間』って特別扱いされるのは、利用価値があるからなのかな、それがなかったらわたしに価値はないのかなって、不安だったから。

あの言葉、本当に嬉しかった。

「そんな顔をして、あいつを褒めるな」

「え？」

急に険しくなったサンフォルさんの声に顔を上げると、彼はさっきの穏やかな表情はどこへやら、怒ったように眉根を寄せている。

「そんな、顔？」

どんな顔だろうって、自分の顔をぺたぺた触っていると、伸びてきた指がわたしの手首を取る。

「穏やかで、慈しむような表情だ。あふれ出している感情も、喜びに染まっている」

「そりゃあ、嬉しかったんですもん」

顔はどうだかわからないけれど（鏡がないので確認しようがない）、感情は当然天使が好む正のものになるだろう。

当たり前じゃあないですかと、肯定したら何故か詰め寄られた。

「ミヤが『エサ』以上の存在であると感じているのは、メトロスだけではない。アゼルニクスもベリスバドンも、今まで糧とする女性達を君にするように甘やかしていたことはない。なにしろそれではあれらの好む感情は食らえないからな。決して相手を嫌ってはいなかったが、必要以上に構うこともなかった。片時も傍から離さないなどということもな」

「え？」

お屋敷の中にいる間は常に2人に囲まれている状態だったから、

あれがデフォルトなんだと思ってました。『エサ』には優しく、がポリシーなのかと。ついでにたまにセクハラして怒らせて、その感情を食べるのがお食事なんだと信じて疑っていませんでした。

そういうと、サンフォルさんは首を振る。

「天使や悪魔の習性を君が知らないのは仕方のないことだが、これだけは覚えておくといい。私達は妻をとて愛する。1度夫婦として認め合えば、互い以外を寄せ付けないほどに、な。だが彼等双子は私達より似通っていて、好きになる女性も同じ人物であることが多かつたから常々、自分たちは1人の女性を妻に迎えて2人で愛するのだと振れて回っていた。そこに現れた君は、様々な意味で唯一無二の存在だ。彼等は宣言通り、全身全霊で君を愛している」

「……………初耳です」

習性などはともかく、2人がわたしを好きでいてくれているなんて、初耳だ。そりゃあ嫌われてはいないだろうと思っていたけれど、愛しているとか他の人に言われてしまうと複雑です。できれば本人達の口から聞きたかった。

今晚帰ってきたら、聞いてみようかな？などと暢気なことを考えていると、いつの間にかサンフォルさんに両頬を押さえられ、視線を彼に固定させられる。

深い、吸い込まれそうな群青に。

「だが、覚えておいて欲しい。ミヤを欲しているのは彼等だけではない。私もまた、君を愛しいと思っっているのだ。妻にしたい、腕の中に囲っておきたいと。多分それは、メトロスも同じだろう」

好きだと言われてイヤな人間なんて、いません。だけど、困る人間はいるんです。

と、言えたらどんなに良いだろう。だけど無理。だってどこかで

この言葉を喜んでいる自分がいる。サンフォルさん達にそんな風に好かれているなんて考えもしなかったから、愛しいなんて言われて舞い上がらない筈がない。

どうしよう。わたしってこんなに気が多かつた?! 浮気性?!

「あ…でも、わたしはアゼルさんとベリスさんと結婚するって言っちゃいましたから、他に旦那さんは持てませんよ」

さっきの説明でいけば、この世界の常識である一妻多夫制はとれない。悪魔の彼等は、自分たち以外の男の人がわたしに触るのを許さないってことだもん。

けれどサンフォルさんはそれに首を振る。

「君はもう忘れたのか? 初めて召還された『人間』は天使と悪魔、合わせて5人の夫を持っていたと言ったろう? ミヤは特別なんだ。他の種族の女性のように沢山の夫を持てる。いや、沢山の夫を持ち、1人でも多くの子を残すことが義務だといってもいいだろう」

「…覚えています。そうでしたね、言っていましたねそんなこと。でも義務とかは聞いてないんですが…」

一妻多夫制強制、ですか? どんな法律ですかそれ。っていうか、子供製造器じゃないんですけどわたし。

あんまりな決定事項にちよつと頭が痛くなってきたところで、サンフォルさんが初めて聞くような甘い声で「ミヤ」と呼ぶ。

「どうか、私達も君の夫にして欲しい。今すぐ答えをくれとはいわないが、せめて、他の天使を夫にはしないと約束してくれないか」

くらつと、来ました。まだ恋愛中の旦那さんが2人もいるのに、

新たなプロポーズにうつかりドキドキです。またまた胸が騒いでお
ります。

ほっといてもにやけそうになるってことは、嬉しいんだろうなあ
とか考えながら、だから頷いちゃったんです。

直後、痛いくらいに。いや、比喻じゃなく、本気で痛い抱擁をい
ただきました。

「ありがとう、ミヤ。君が1日でも早く決断してくれるよう、祈っ
ている」

ちゅっと、かわいらしいリップ音をさせて天頂部にキスが落ちる。
もちろん更にドキドキして、1人でどうしようどうしようとかパニ
クっていると、あ、本日3回目です、この感じ。

「サンフォルさん、貴方もですかっ！」

ジュリアス・シーザー調に叫んでしまいました。なんでみんな、
いいシーンで感情を食べるんですか！ちよつとは空気読みなさいっ
てんですよっ！

腕を突っ張って距離を開けてから、さすがに涙目で睨むとサンフ
オルさんは見たこともないような恍惚とした表情でこっちを見てい
た。

はい、これもデジャブです。ちよつと前に見たことのあるお顔で
す。

「そうか…胸の内から溢れる喜びというのは、含めば蜜のように甘
いのだな…ミヤ、どうすれば毎日この感情を与えてくれるのだ？」
「知りませんっ！」

やっぱり双子ですね。貴方たちもとってもよく似てらっしゃいま

す
っ
!

18 タ、サンフォルさんに囁られ（後書き）

天使と悪魔は鳥類なイメージ。

鶴とか鴛鴦とか、果ては鳳凰みたいな。一生同じ相手と番う。

人間より自制が効いてます。

鴛鴦は一年で相手を変えるのだと教えていただきました…なんてこと、慣用句のうそつき…って気分です。

19 夜、ベリスバドンさんに囁られる

そして夕食後。

今日はさすがに疲れたと、ぼんやり長いすに体を投げ出して思う。

朝から、アゼルさん、メトロスさん、サンフォルさんと、順番にセクハラ食事を繰り返されたんでは、いくら何でも体が持ちません。精神が強かるうが魂が強靱だろうが、肉体疲労の蓄積にそれが一体どれほどの力になりますか？ 答え、なりません。できることは早々に眠って回復に努めることだけです。

なので、お風呂に入ろうかなあとバスルームに向かっている時でした。

「ただいま、ミヤ」

ノックもなしに人の部屋に不法侵入された悪魔様は、それはもうその名に恥じない恐ろしく黒い笑顔を浮かべてわたしの前に立っています。

「お、かえりなさいベリスさん。早かった、ですね？」

「いつもより遅いですが？」

はじめられたように時計を見れば、針は8時を指している。確かに。いつも6時には帰宅している2人にとって、これは充分遅い時間だ。いけない…これじゃあ適当に言ったことが…

「心ここにあらず、ですね。それとも今日は忙しすぎて、私のこと

など忘れていましたか？」

ばれてるーっ！しかも何でか知らないけれど、昼間のあれやこれやも全部ばれてるようです！なんぞっ！！

動揺して周囲を見回せば、戸口に控えていたカイクさんがずっとあからさまにフェードアウトする。

あなたですか！なんてことしてくれたんです…。

「アゼルニクスはともかく、天使達にまで会っていたとは」

「あ、あ、あれは、全部がその、不可抗力で、す、よ…？」

慌てて言い訳を始めたわたしの頬を、ベリスさんの指先がなぞる。その冷たさに思わず首を竦めると、底冷えのする笑みを浮かべた彼は不意に顔を歪めた。

「忌々しい掟さえなければ、貴女を屋敷の奥深く閉じ込めておけるもの」

「か、監禁はいけません！監禁は犯罪ですよ！！」

「我々にとつては当然のことですよ。愛する伴侶を決して人前に出さない悪魔や天使は大勢います。もちろん女性の方でも望んでそうしているのです、これまで問題になったことはありません」

「ず、随分過激な一族様で…」

顔を引き攣らせながら、なんて人達のところにお嫁に来ちゃったかなあと少し後悔していたのだけれど、そこではたと気づいた。

掟って、なに？

だいぶ世界や種族の仕組みについては説明して貰ったと思っていたけれど、ここに来てまたわからない事柄にぶつかりました。

首を傾げつつ、その辺を聞いてみると、ベリスさんはあからさまに顔を顰めた後、詳しく説明してくれた。

「人間が我々にもたらす恩恵は、計り知れないものがあります。それは貴女の前の女性が比較的早く証明してくれたのですが、当然の如く1人しかいない彼女を巡って争いが起きました。何しろ人間は特異性が高い上に、生まれた子供が女の子だったこともあり、突然変異種を生み出せることがわかった。初めに彼女を娶ったのが天使だったので、彼等は人間に対してだけ一族の掟を書き換えたのです。夫を複数持つことを許す、と。…悪魔が反発しないと思えますか？」

問われて、首を振った。

とつても似ている2つの種族が、片方だけ恩恵にあずかることを許すはずがない。

にやりと唇を歪めたベリスさんは、続ける。

「『エサ』に困窮していたのは、天使だけではない。悪魔にも同等の権利があるべきだと主張され、時の天使王は折れました。人間に所有権を主張することはまかり成らぬと。以来、彼女に求愛する権利は誰にでもあり、彼女も誰の求愛を受けても構わない、我々の世界では異質な掟ができた。ミヤ、貴女が現れるまでは、私がその決まり事に従わねばならないとは、夢にも思っていませんでしたかね」
「…それはまた、ありがた迷惑な掟ですねえ…」

地球出身の日本人としては、どちらかと言えば一夫一妻制の方がありがたい。例えそれがちょっと過激な愛情だとしても。

でも、それを口にするにはできなかった。だって悪魔にとつても天使にとつても、壊れない人間の存在はとも大切だって、知ってしまったから。ひいては他の種族にとつても、崩れた自然界のバランスにおいても、わたしやわたしが産む子供は希望となる。

だから曖昧に笑うことしかできなかったんだけど、ベリスさんは違った。本当に悔しそうに言うのだ。

「本当に。アゼル以外と貴女を共有しなければならぬなんて、苦痛です。けれど、仕方がないことなのだとはわかっている。ですから1つだけ、私の願いを聞いていただけませんか？」

なんだか切羽詰まったその様子に、こくりと頷くと彼は頬を緩めた。

「どれだけ夫を持って、貴女の家はここだと決めて欲しいのです。どんな男の元に行ったとしても、最後は必ずここに帰ってくる」と

それって、通い婚の逆バージョンってことでしょうか？自宅には本妻さんがいるけれど、男の人は好きな恋人の元に通うことができるっていう、あの。

確か女性は自分の好きなスタイルで結婚できるって、言っていましたもんねえ。自分の家から夫の家に通うのも、夫を呼びつけるのも、夫と同居するのも自由。その中通い婚をして欲しいって、お願いですね。

理解して、すぐさま了承した。

本当なら夫婦として生涯1人と添い遂げる一族のベリスさん達に無理をさせることになるのだ。このくらいどうってことはない。何しろ彼等は、わたしの初めての旦那さんでもあるんだし。

約束したことに破顔したベリスさんは、ぎゅっとわたしを抱きしめると耳元で甘く囁く。

「愛しています、ミヤ。貴女をとても」

「…っ、は、い」

全力疾走を始めた心臓に邪魔されながら、絞り出した声は掠れていた。

いつか、遠くない未来に、わたしも愛していますと返せたらいい。毎日毎日、2人に対する好きを積み重ねて、彼等に負けなくらい気持ちを込めて、そう言えたら。

ついにやけてしまう顔を隠すため、ベリスさんの胸にしがみついてそんなことを考えていると。

「…可愛い…やはり、閉じ込めてしまいたい。このまま地下に連れて行ってしまおうか…」

小さな小さな呟きだったけど、聞き逃すはずありません。人間、自分に関することは結構地獄耳になるものなんですよ。それが怖い内容なら特になっ！

ざわりと沸き上がる恐怖に冷や汗が滲んだ時、本日4回目の倦怠感に指先の力が抜ける。

「~~~~~っ！せっかく、せっかく、感動のシーンだったのに、どうして食べるんですかぁっ」

もう、涙目です。何が楽しくて一日中お食事されなきゃならないんですか。この後どんだけお腹が空くか、わかってるんですか?! 緩んだ腕の中から、精一杯の恨みを込めて睨み上げると、悪びれない悪魔は笑うのだ。

「すみません、幸せの中にいる女性を見ると、どうしても怯えさせてみたい、絶望させてみたいという欲求が抑えられなくなってしまうって」

そこは根性で押さえましょうよ。
貴重な『エサ』の健康のためにも、是非お願いします。

結局、過度の疲労に襲われたわたしは、耐えきれずそこで意識を手放す羽目にあいなったのでした。

19 夜、ベリスバドンさんに囁られる(後書き)

以上、一対一パートでした。

20 猫は邪悪ではなかったはずだ

悪魔と天使の双子コンビは、お仕置きの中です。もう2日、お食事させてあげてません。もちろん、膝だつこでご飯もしませんし、貢がれたケーキにも目もくれません。……あとでこっそりカイクさんに持ってきて貰って食べますが。

そこは、それ。ともかく絶食2日目の彼等は、今日も怒っている私を横目に見ながら、渋々出勤していきました。

余談ですが。その間に放出された私の怒りは、お屋敷に仕える悪魔さん達が食べています。彼等も『エサ』としている方々に負担をかけなくてすむと大変喜んでくれて、無尽蔵に湧いて出る怒りをちよつとずつ嚙っていました。

皆さんが言うには人間の感情はとても質がよく、少量でも満腹になるんだそうです。私のお腹は当然減りますが、その辺は毎度のことなので料理をいつも通りに食べている分には問題ありません。

でも、そろそろ許してあげないと、4人とも飢えて暴走しそうですなあ。今晚辺りからはまた、お食事させてあげようつと。

などと、鼻歌交じりにご機嫌で自室に戻ったわたしは、室内から漏れ聞こえる微かな歌声にドアノブにかけた手をピタリ止める。

『~~~~お肉は焼いて食べるけど、心は壊して食べましょう だけど壊れた女の子は、元には戻らないから、結局お肉になるんだよ~~~~』

……、意味不明な上に残酷にスプラッターなお歌じゃありませんか。

誰？作詞作曲したのは。これが今流行だとか言われたら、わたしはこの星の住人の精神構造を本気で疑うけど？

一体どの使用人が歌っているんだと、そつとドアノブを回して隙間から室内を覗くと、もぬけの殻。どこか死角に隠れているのかと、苦い体勢から角度を変えても誰も見つからない。

幻聴?! 幻聴なの!!

怯えたところで背後から、ふつと耳に息を吹きかけられた。

「ひ、ひいいいい?!」

「うわぁ、萎えるね。なんて色気のない悲鳴なんだか」

跳ね退いて振り返った先に、ニッターと猫目を細めた男の人が立っている。

その姿、にじみ出る邪悪感、触ると汚れそうなやばそうな人物、考えるまでもないエイリスの猫息子!

「色気はいりませんっ! なんで堂々と不法侵入しているんですか」

「こっそり侵入したら泥棒じゃないか」

「堂々と入ったって場合によっては泥棒扱いです!!」

「大丈夫。何も盗まないから」

飄々としたその態度に、脱力です。思わず壁に懐いてしまいました。

なんでこう、最近周囲に濃い人達が集まるんだらうと、嘆いても状況が好転するわけじゃない。

そう、思い起こせば半年前。学校帰りに喚び出されたことを皮切りに…

「はいはい。いらない回想に耽らなくていいから、ちょっとは僕がここにいる理由とか聞かない?」

人を乱暴に壁から引っぺがし、心の中を読んだかのような発言を

する猫男に顔を顰めて、聞きませんとそっぽを向く。

これまでの経験で、詳しい説明を受ける「更に悲惨な目に遭う」という図式ができあがっている以上、耳は塞いでおくに限る。特にこの人は、これまでに出会った誰より、やばそうな空気を纏ってるんだもん。

身長は平均的に2メートル弱、顔は吊り目だけど比較的整っていて、金色に光る猫目は種族がわかる程度のファクター、柔らかそうな虎模様の髪はちょっと長めだけど短髪で、背中でゆらゆら揺れる尻尾がなければ、見かけはそう人間と変わるところがない。

だ・け・ど。わたしは彼を一目見た時から、小さい頃お姉ちゃんに教えてくれた小説の登場人物を思い出して仕方がないのだ。いや、あれは人じゃなかった。立派な猫だった。

「チエシャー猫の言うことを真に受けて、真剣に考えたらいけないんです。だって奴は答えを教えずに消えるのが常なんですから」

不思議の国のアス。そう誰もが知ってるあのお話だ。自分で実際読んだわけじゃないから、詳しくは覚えていないけれど、猫を見ると必ず奴を思い出すのは、子供心になんて性格が悪い奴なんだと思っていたからだ。

そして、空想は現実になる。

一瞬、チエシャー猫って固有名詞がわからなかったのか何かを考え込んでいた彼が、いたずらを見つけた悪ガキのように、楽しみに唇をつり上げたのだ。

「ふふふ。それがどんな猫なのかは知らないけれど、僕に似ている

のは確かだねえ。他人を混乱させるのは実に楽しいんだよ？」
「やっぱり猫だああああっ！！！」

猫好きの人に聞かれたら首を絞められそうな悲鳴を上げて、わたしは部屋に飛び込むと鍵をかけた。

冗談じゃない。悪魔と天使、それに魔女だけで充分手に余っているっていうのに、これ以上猫まで抱え込む余裕はわたしにはありません。全くございません。遠慮いたします。

扉に背を預けて、神様仏様どうかお助け下さいと古風に祈ったのに、この世に神仏はいないらしい。

「あのさあ、悪魔の屋敷に勝手に忍び込める僕が、こんなドア一枚に立ち往生すると思った？」

「思いませんっ！だけど、勝手に女性の部屋に入らないデリカシーくらいはあると思いました！」

背後に立っていた猫男に、この返しは絶妙のタイミングだったと、我ながら自画自賛しよう。

なにしろそれまで大変よく回っていた彼の口が、一瞬ぽかんと開いた後、気まずそうに閉じられたので。

よしよし。常識はあったらしい。ありがとう、エイリス！1個くらいはいいところつけて息子を育ててくれて！

「わかった。僕の負けです。勝手に入ってごめん」

ぺこりと素直に頭を下げる猫は、ちょっぴり可愛いのです。大きくなければもつと可愛いんだけど、この辺はどうにもしがたいところなので、諦めようと思います。

「いいんです。わかってくれれば」

「なーんて、言うわけないだろう」
「ぎゃっ！」

気を抜いてうかうか近づいたわたしは、いともあっさり猫のアイアンクローに捕まってしまいました。頭に爪が刺さって、めちゃめちゃ痛いです。ていうか、猫なのにひっかかずに捕まえるとか反則でしょう?!

恨みがましく睨み上げると、ふんつと鼻を鳴らした奴は思いっきりわたしを見下しながら言った。

「母さんの弟子は、僕の弟子。師匠に意見しようなんて、100年早いんだよ」

「どこの決まり事ですか！」

「僕のルール。ほら、弟子なら言われる前に自己紹介くらいしろ」

「ミヤです!!人間です!でも、弟子じゃないから〜」

「そうか。僕はジャイロ。ミヤの師匠で、君をお嫁に貰ってあげてもいいと思っている、魔術師だよ」

「貰って貰わなくていいです〜」

「なんですか、この超がつくオレ様は!どうしてこの世界にまともな人間はいないんでしょう…」。

21 会話を成立させようとする努力は大切です

騒ぎを聞きつけて現れたカイクさんは、一瞬動揺したようだったけれどすぐに持ち直すと、2人分のお茶を用意して部屋を出て行った。

その後ろ姿をどんなに引き留めたかったことか。目の前の猫が睨んで、できませんでしたけどねえ。

「あれ、これ母さんの作るお茶じゃないか」

「…そうですね。このお屋敷の紅茶はあまり好きになれなくて、エイリスに転送して貰っているんです」

「それなら今度から僕が持ってきてあげよう」

「全力でお断りします」

ジャイロさんの善意と書いて、悪意と読む。

短い時間ですが、わたし、学びました。生きていくために必要なスキルです、これ。まさか日本でも転用可能なスキルが、異世界で必須スキルだとは知りませんでした。魔法より、重要です。

それが証拠に、ジャイロさんは目の前でニタニタとしか表現しよのない笑みを浮かべている。そこで、背後では尻尾がゆらゆら。

「そこまで嫌がられるなら是非、持ってこないかね。ああ、なんだろうこれ、胸が疼くって言うか爪が疼くって言うか、ミヤのことを考えるとわくわくするんだよねえ」

「猫の本能です。ネズミを前にした猫と同じ反応ですから、それ」

「いいや、違うね。これは恋だ」

「恋じゃありません。絶対に違います」

チエシャー猫だし、チーズでもいいかなと思うけど、どっちにし

る恋愛感情でないことだけは確かなんで、きつちり笑顔で教えてあげる。

なのに、ちつとも人の話を聞かないジャイロさんは、しきりにうんうん頷きながら、自己完結を始めてしまった。

「ああ、これが。ふーん。今まで他人：というか、女の子に興味を持ったことがなかったから気づかなかったよ」

「いえいえいえいえ、他人にも女の子にもそう言った方面の興味を持つてはダメです。いじめたり追い詰めたりするのは、愛情表現とは違います。嫌がらせです、嫌がらせ」

「いや、恋だね。これだけ他人に興味を持って、それが愛情でないわけがない」

「……なんて偏った人：いえ猫だからこれで正しいんですか？」

「だけど、なんとかわかって貰いたいと頭を絞った結果、そこそこのいい例えが浮かんだので聞いてみる。」

「マタタビ、好きですか？」

「？そりゃあ、獣人のなかでも猫や虎は、あれに狂うよね」

「じゃあ好きなわけですね？」

「まあ、好き嫌いで聞かれれば、好きだね」

「それは。その好きが、ジャイロさんが勘違いしている愛情です。ほら、色恋じゃないでしょう？」

「ああそっか。じゃあ僕はマタタビのことも愛していたわけだ」
「……………」

頭痛がします。これが俗に言う、暖簾に腕押しですか。馬耳東風ですか。何でこんな人の相手を、わたししているんでしょうね……。口をきくのも面倒になり、お茶をすすると溜息をついた。こうなったらジャイロさんが飽きて帰るか、悪魔さん達のご帰宅を待つ意

外にない。あ、もう一つあった。エイリスを喚んじやうとか、どうだろう。

「まあ、冗談はともかく」

「冗談だったんですか！！」

いきなり真顔になったジャイロさんは、これまでのふざけた態度を一変してずいっと身を乗り出す。

人の気など、お構いなしで。なんか、泣けてきた…。

「母さんが君に会いに行けってるさいから来た、ていうのが本当のところなんだよね」

やっぱりそうだったかと、やっと気を抜いたところで、

「でも本人に会ってみたら、聞いていた以上にキレイな魂をしているもんだから、興味持ちちゃってね。つくといちいち大げさな反応が返ってくるのも面白いし、君に僕の子供産んでもらうことは、決めた」

「相手に了解も取らずに決めちゃダメです！」

だめだ、この人本気でダメだ。

すっかり諦めきつたわたしは、さっさと呪文詠唱を始めた。これはもう、責任者にひきとってもらうしかないもん。責任者と言えば制作者、といえば。

「もっつ！いきなり喚ぶなって言ってるでしょう」

お母さんですよ。例え何か危ないクスリを作っていたみたいで両手に煙の出る器を持っていても、機嫌が悪そうでも、疲れ切ったわ

わたしにはこれ以上の存在が思いつけない。

というわけで、とつてもイヤそうにジャイロさんを指さすと（人を指さしてはいけません）、覇気なく言った。

「お持ち帰り下さい。わたしには必要ないんで」

「？あら、ジャイロじゃないの、久しぶりね」

「そうだね、ざっと4年ぶりくらい？」

だからね、もう突っ込む気にもなれないんだけど、一応。

「全く会ってなかったのに、どうやってわたしのこと伝えたのよ」

対して感動もない親子の対面を無視して問うと、エイリスは決まってるじゃないとふんぞり返った。

「水鏡を使ったのよ。知ってるでしょ？」

「知らないし……。いる間に教えてくれなかったじゃん」

「そうだった？」

あーそうね、その都合の悪いことをすっきり素通りするところは、息子とそっくり。

で、話題のジャイロさんは暢気にお茶をすすって、自分には関係ないとはかりの態度なんだから、腹立つ通り越して呆れてくる。

やっぱり、いろいろ無理がありすぎだわ。

「もういいや、通信手段とかはさ。ともかくいきなり子供産んでもらうって決めたと言われても困るんで、母親の責任と師匠の温情で、これ持って帰って」

とつてもイヤそうに言ったんだよ、わたし。なのにさ、なのに、

嬉しそうにエイリスは息子に駆け寄ると、テンション高くまくし上げる。

「え？そうなの、ジャイロ？ミヤに決めたの？」

「うん。決めた」

「まあああ！よかった〜これで後継者問題に悩まなくてすむのねえ。あなたったら趣味が悪いし、マニアックな女性にばかり興味を示すから、跡継ぎは持てないのかと思ってたのよ」

「ちよつと」

「その最悪の好みのご真ん中に、ミヤがいたからね。母さん、いい拾い物したね」

「待ちなさい」

「でしよう？！人間を呼べた魔女って歴史に名前が残る上に、その娘が孫の母親なんて、自慢だわ〜」

「勝手に決めるな！」

「ははは、じゃあ早く子供産ませるためにもこのまま浚おうか」

「ふざけるなーっ！！！！」

どうして当人無視するんだ！

叫んでも叫んでもちつとも届かない虚しさに、へこんでる場合じゃない。このままじゃ貞操が危ない、人生が危険！！

逃げようとする首根っこをジャイロさんに掴まれて、本気で涙目だったわたしは絶体絶命だった。

「そつですよ。ふざけてもらっては困ります」

窓から飛び込んできてくれたベリスさんが、危険人物の腕から引きはがしてくれたから、助かったけど。

「ベリスさ〜ん、怖かったよう」

「すみません、遅くなって」

抱き上げたわたしをぎゅっと抱きしめてくれたベリスさんは、優しくおでこにキスしてくれた後、少し良い子にしていって下さいね、と背後に控えていたカイクさんにわたしを引き渡す。

もしかして、ベリスさんを呼んでくれたのは？

「差し出がましいかとは思いましたが、ミヤ様がお困りのようでしたので」

にっこり笑った彼が、悪魔じゃなくて天使に見えた。

ま、見かけは綺麗だし、美少女でも通りそうな容姿だから、この際天使でもいいじゃないの。

本気で悪魔に見えるベリスさんの邪悪な顔と、猫のくせに性悪全開、悪魔にだって勝てそうなジャイロさんを眺めているより、カイクさんを見ている方が心の平安にはよっぽどいいもん。

22 いともあっさり、決断の時は訪れます

「全く、女性の了解もなく結婚を強要するとはどういう見なんだ」

ぞんざいな口調は、ベリスさんの外向きモードの時に使われるものだ。余談だが、アゼルさんは使用人相手にこの口調になる。

どちらにしても、こういう話し方をする時のベリスさんは、概して他人に厳しい。いい例がメトロスさんとサンフォルさんで、彼等とだけ、くだらない言い争いをしている時は大抵この口調になる。例外はわたしが膝の上や隣にいる時に起こるんだけど、今日は無理そうね。だって、カイクさんに預けちゃったから。

そんなわけで臨戦態勢のベリスさんは、どっから出したのかいつの間にか手に黒い鞆に収まった、一本の長剣を持っていた。

あの、それはもしや？

「わかっていると思うが、女性の意思を無視した男は処分対象だ。しかもミヤは、国王と同等の扱いを受ける権利を持つ人間。この場で切り捨てられても文句はないであろうな？」

もつ言うのもイヤなんです。初耳です。なんですか、わたしに与えられたその権利。人権は無視なのに、保護だけは国王級とか、ちよつとした軟禁状態じゃありません？

怒りとか悲しみとか疲れとか、ない交ぜの感情で泣きそうになつてるとふわりと抱きしめられる。

こんな真似、カイクさんがする筈ないと硬直していると、押し当てられた胸から覚えのある香りがしてくる。甘い、バラの香り。きつすぎない芳香はベリスさんが纏うのと同じ。

「アゼルさん…」

「はい」

いつの間にカイクさんと入れ替わったのか、見上げれば微笑みを湛えた銀色の悪魔が、わたしを腕の中にすっぽり囲い込んでいた。

「少し、遅れました。ベリスと違って私の仕事場は宮殿の奥なので知らせを受けて飛び出すまでに若干のタイムラグが生じてしまったんです。でもカイクの機転のおかげで助かりましたよ」

そう言っただけ傍らの執事を見やる瞳は、いつもより断然優しい。褒められたカイクさんは恐れ入りますとか気取っているけれど、それでも少しだけ嬉しそうに見えた。

なぜだかこの屋敷に勤める人達は、異常に主を慕っているところがあるので、お礼とか言われちゃうと天にも上る気持ちなのかも知れない。よくわかんないけど。

なんて、取り戻した日常の延長線に立っていたわたしは忘れていた。

数歩前ではベリスさんとジャイロさんが睨み合っていたことを。いつの間にやら、鞘から抜かれた剣が不気味に光っていたことを。

「命が惜しいなら、さっさと出て行くんだな。ミヤがお前を受け入れるまでは、我々は貴様を夫とは認めない」

のど元に突きつけられた切っ先を目を細めて見たジャイロさんは、鼻に皺を寄せると一瞬で態度を変えた。

「はいはい、そうさせていただきますよ。女っていうのはじっくり落としていかないと、なかなか素直にならないもんだしね。ミヤは

特に難しそうだ」

「そうよー。弟子だった頃も、あの子の強情なところと、変に達観したところには手を焼いたんだから」

なんて、親子は危機的状況をもともせず笑い混じりに言い合うと、またねつとわたしに手を振って消えていった。

嵐のような勢いで、頭痛のするようなしつこさとは正反対のあっさり感が、なんだか腹立たしくってしようがない。まあ、ずっといられるよりは全然いいんだけど。

やれやれと大きな溜息をついて体の力を抜くと、抱きしめてくれたアゼルさんがひょいっとわたしを抱き上げて、何故かベッドに降ろしてくれる。

「……………」

どうして長いすじゃなくてベッドなんだって、視線で問うても笑うばかり。それどころかいつの間に関り込んだのか、反対側のスプリングが沈み込んだと思ったら、ベリスさんなんて人のベッドに上がり込んでいた。

この辺で気づけないほど、わたしは鈍感でもバカでもない。はい、なにやら妖しい空気も漂ってきたことですし、おきまりの台詞を言わなければなりませんよね。

貞操の危機ですっ！ジャイロさんの時の数倍増しで、身が危なくてしょうがありません！

「なんで、いきなり、ですか？」

キスしようと覆い被さってきたアゼルさんの胸を、腕をつっぱて阻止していると「いきなりではありません」と首をゆるゆると振られる。

「ずっと、貴女がこの屋敷に暮らし始めた日から、こうしたかった

のですよ」

必死に抵抗していた手首はベリスさんに捕らわれ、あっさり唇はアゼルさんに奪われた。それも口中舐め回される、すっごい深いキスで。

呼吸が苦しくなった頃、アゼルさんは離れていき、今度はベリスさんに呼吸まで貪られるようなキスを受ける。

「メトロスやサンフォルは天使族として、人間に対する不可侵をある程度理解しています。だからここにミヤがいる限り、私達はそれほど焦らずにいられた」

ぼんやり霞む頭の隅でアゼルさんの告白を聞いていると、ベリスさんもゆっくりキスの戒めを解いてくれた。

「だが、魔術師であり獣人であるあの男は違う。悪魔と天使が暗黙のうちを守っている掟が、奴には通じない。ミヤを浚うと言っているのを聞いた時、私がどのような気持ちであったか、想像できますか？」

切なげに眉根を寄せるベリスさんに、胸が痛んだ。

そうして、思い出す。

強引で、邪悪な微笑みを浮かべたジャイロさん。例え本気でなかったとしても、彼に言われたいろいろは私の感情をほとんど動かさなかった。

彼の子供を産むなんて考えることもできないし、ましてや夫の一人にするなんて無理もいいところだ。

だけ。

短い時間だったけれど、わたしを心の底から慈しんでくれたアゼルさんとベリスさんに、心は動く。

この世界に喚ばれた理由を考えれば、いつか誰かと結婚して子供

を産まなければいけないだろう。

その決断を今しろと言われたら、わたしは間違いなく彼等を選ぶ。たった1つを約束してくれるなら、今すぐそれを決めてもいい。

だから、これまでになく真剣に聞いた。嘘をつかれたら絶対見抜けるように気合いを入れて、エイリスに教わった言霊を一語一語に込めて問う。

「わたしを、愛してくれますか？一生、愛していてくれますか？」

魔術を扱える彼等なら、この言葉に込められた魔力に気づいたはずだ。そこに込められた永遠の拘束にも。

なのに彼等は、即答する。迷いなど欠片も見せずに。

「愛します。一生ミヤだけを」

「ミヤ1人です。私の全てはミヤのものです」

魂を縛る誓いに、こうもあっさり答えていいのかとこっちの方が焦ってしまったが、決意の固さがわかればわたしだって逃げたりはできない。

なにしろ此方から仕掛けたことなのだから。

「わたしも愛します。アゼルニクスさんとベリスバドンさんを一生愛します」

こうして、意外にあっさりわたしは本当の『結婚』をしてしまいました。

22 いともあっさりど、決断の時は訪れます（後書き）

23 日して、ムーンライトさんで会いできるとよろしいですね
え…。

23 酷いの後の優しいは、基本です

「次は何を召し上がりますか？」

「水分も必要ですよ」

「んぐつ、んぐ、んぐ」

口の中にもものが一杯で喋れません。

でも視線を追って、アゼルさんは欲しいと思っていたお肉を差しだしてくれたし、ベリスさんは果物ジュースのグラスを口元に運んでくれる。

ベッドから動くこともままならず腕さえも上がらない状態で、でも栄養補給をしなくちゃ死んでしまうほど疲労困憊のわたしには、このかいがいい介助は非常に助かっています。

いえ、原因を考えれば、彼等がここまでするのは当然と言えば当然の気もするんですけどね。

迂闊にも、昼前に彼等といろんな意味で本当の結婚をしても良いですと誓約してしまつたわたしは、薄闇が迫るこんな時間まで解放してもらえませんでした。

感想は…痛くて辛くてしんどかったです。ううん、現在進行形で、痛くて辛くてしんどいです。

本当は気絶していたんですけど、しばらく意識のない人の体を撫でたり摩ったりして楽しんでいた旦那様達は、いいかげん体力回復させないと貰ったばかりの嫁が本気で昇天してしまうと気付いて、食事を用意してくれました。

…というのは、彼等の自己弁護に近い説明です。事實は氣を利かせたカイルさんがいろいろな手配をしたんだらうってことは、容易に想像がつきます。

だつてわたしを挟んだベッドの両側に、いつの間に着替えたのが夜着で横たわる2人は、とつてもそこまで気が回るほど頭が動いてとは思えない、にやけきった顔、してますから。

通常モードがイケメン度マックスだとすれば、現在マイナスマックスです。自分のことを過剰評価する気はありませんが、どう見たつてわたしのこと以外、考えているようには見えません、イタイことに。

まあ、やに下がった情けない夫を見たい妻はそうそういないと思いますが、取り敢えず現在は助かっているんで良しとしようかと。

なんとか指先や首は動かせるようになったしね。

「んぐ。ごつくん、と。はい、もうご飯はいいです」

体力は平時の半分ほどしか戻っていなかったけれど、これ以上は胃拡張気味だったお腹でも受け付けないので、いったん食事を終了宣言する。

それにほっとした表情を覗かせた2人は、食器類をサイドテーブルに片付け、今度は頬にキスやら髪にキスやら、過度の愛情表現をし出した。

「すみませんでした、ミヤ。貴女に辛い思いをさせてしまつて」

「許して下さい。決して貴女が憎くてやったことではないのです。

ただ、私達にとってはああすることが普通のことなので」

その辺は理解できるのでコクリと頷いて、わたしの表情を伺っている双子を改めて見て、気付いた。

「なんだか、心なしか肌つやがよくありませんか？」

別に普段が具合悪そうだとか、不健康そうだとかそういうことではなくて、例えるならそう、キラキラ輝いて見えるとかそんな感じ

なの。取れたての野菜みたいに、鮮度が目に見えてわかる、風なんですけど？

何故だろうと、首を傾げながら彼等を眺めていると、アゼルさんがわかりますかと、嬉しそうに微笑む。

「これまでにないほど、魔力が満ちているのです。これはミヤの感情を思うさま貪れた結果だと思うのですが、今なら王でも倒せそうですねよ」

何言っているんですか、そんなことしたら国家反逆罪で捕まっちゃいますよ。

「本当に、力が漲っているのです。今までにももう良いと言っただけ感情を喰らったことはありませんが、これほど満たされたことはなかった。人間の、それも愛する方から与えられる感情とは、これほどに素晴らしいものだったのですね」

ベリスさん、目をキラキラさせて力説されても困りますから。今後もこんなことが頻繁に続いたら、わたし、死にます。確実に早死にします。

胡乱な目で興奮する旦那様達を眺めていると、いち早く気付いたアゼルさんがふっと現実に戻ってきた。

そして、わたしの頬を優しく撫でながら、大変ありがたいことを教えて下さったのだ。

「安心して下さい、ミヤ。この状態ならば、私達は10日は感情を必要としません。つまり、貴女はその間、ゆっくり体を休めることができます」

「それ、すごいですね！」

思わず本気で感動してしまった。だってこれまでは最低でも3日に1度食ばなきゃ死ぬって脅され…いえ、教えられて、それは困るところまめに食料の提供をしていたのに、それが7日も延長されるなんて、すごいです嬉しいお知らせです！これでこれ以上の胃拡張を押し

さえられると、神様に感謝しちゃいました。

わたしの様子があまりに嬉しそうだったせいか、ベリスさんは少しだけ顔を曇らせて、小さな声で聞いてくる。

「もう、私達に抱かれるのお嫌ですか？2度と愛し合いたくない？」
「……………」

言葉に詰まってしまったわたしを、責めないで欲しい。なにしろ正直に言えば、あれは2度と体験したくないことなので。

でも、返事をしなかったことを気にして、肩を落としてしまった2人を前に本音を言えるわけもない。なので、ちよつとだけ、譲歩してみる。

「いつもいつもああいうのは…イヤです。痛いのは…その、気持ちいいのとセットにして貰ったりもしたので何とか我慢できましたけど、無理矢理も愛があるんだとわかってるんで我慢しますけど、意識なくなるまで食べられちゃうのはきついです」

言い淀みまくりだったのは、我慢できることと我慢できないことを選定しながら話していたからだ。

今もあちこち痛いのは…まあ、初めてだったってことで今回はここまでひどくないだろうなって…きつと、うん、信じてる。

だけど起きたら口をきくこともできないほど感情を食べられていて、お腹が空いて餓死寸前な気分っていうのはいつもいつも味わいたいものじゃない。なにしろこっちは命が危険にさらされる、恐ろしい事態なのだ。

その辺を改善してもらえないかなあって、彼等をそろそろ伺うと、真剣な顔で激しく頷いていた。

「もちろん、今回はあれほど性急に大量な感情摂取はしないと誓います」

「今回は初めて貴女が私達を愛していると言って下さったことに興

奮して、いささか行動のコントロールが効かなかっただけです。次は決して暴走しないと約束します」

その様子があんまり必死で、普段の気取った様子からは想像もつかないほど従順で。

犬みたい。

気付いたら、忍び笑いが漏れてしまった。

もちろん2人には訝しげに見られちゃいましたが、理由は言えません。自分より年上で、その上とっても強い悪魔の貴族様に、犬とか言ったら失礼ですからね。

なので誤魔化すようにとびきりの笑顔を作って、可愛く見えますように祈りながら小首を傾げ、お願いしてみたりして。

「はい。次は優しくいじめて下さいね？」

……言葉には、気をつけた方が良くって、行動には重々注意しないと恐ろしい目に遭う。

そんなことを学んだ夜でした。

23 酷いの後の優しいは、基本です（後書き）

ムーンライトさんには、皆さん無事にたどり着けたでしょうか？
辿り着いてはいけない年齢の方、あえてそう言ったものは必要がないとお読みにならない方、前話との続きは不都合がないよう校正したつもりですが、意味がわからない等ありましたら、遠慮なく仰って下さい。修正いたします

24 色ボケすると人間、頭が働かなくなるものです

朝、目覚めて軽くなっている体に、ちょびつと安堵。

自力歩行できなかつた昨夜から考えると、充分すぎる回復です。歩みは某有名自動車メーカー開発のロボットに負ける早さだけど、文句は言うまい。言ったら両脇の過保護な悪魔に、抱えられる。昨日の今日なんで、余計な接触はできればさげたいのだ。

そんなわけで、のろのろと食堂に入って正直なお腹が目の前のごちそうに歓喜する中、食事を始めたんだけど。

「「ミヤー!!!」」

庭に続く窓が、割れるんじゃないかって勢いで開いて、天使さん達のご登場です。

えーえー、いい加減慣れましたが、今日の騒々しさには少しばかり鼓膜が悲鳴を上げましたよ？たまにはカイクさんに案内されて、その優雅なみてくれに恥じない礼儀正しい登場をしてみちゃどうなんでしょうか？

…という、多少の嫌みを込めた視線を送って、すっごく驚いた。

「えーつと？何で泣いてるんですか、メトロスさん？」

そうなのです。なぜだか金の天使は、戸口で仁王立ちしたまま、はらはら涙をこぼしていたんです。

絵になるけど、泣き虫属性のツンデレ天使とか、一部女子にえらく受けそうだけど、わたし的には気持ち悪いんでお断りなだけ。だって、想像したら不気味だよ？190越える大男が、ちよつと童顔で泣き虫…後30センチ身長が低かったら、絵になるんだけどなあ。美少女なんだけどなあ。

わたしにこんな残念な想像をされているとは知らないメトロスさんは、朝日に輝く滴を隠しもせず、ビシッとこっちを指さした。

「ミヤが！悪魔共に食べられたからに決まってるじゃないか！」

「はあ、まあ、いろんな意味で美味しく頂かれちゃいましたが、とりあえず人を指さすのはよくありませんよ。ええ」

珍しく1人で椅子に座って1人で食事を取るという、至極まっとうな行動を取っていたわたしは、なぜだか人様の行為が許せず注意する。

そう、人はね、自分がちゃんとやってる時に周りがいい加減なこととしてると、腹が立つんです。ほら、普段は平気でポイ捨てる人が、自分でゴミを拾わされる時だけブツブツ文句言う、あれと同じですよ。

行儀悪く人の膝の上で人が差し出すもの食べてるんじゃない、誰に正論を説いても笑われますけどね、今日は大丈夫。1人でできる、偉い子なんだから。

と、元気に胸を張ったのに、なぜだかメトロスさんは泣き崩れちゃった。なんか、再起できるのか心配になるほど、いじいじうじうじ、磨き込まれた床に向かって咳いている。

どこかいい病院を紹介したくなる有様です。

「ミヤ、悪魔共と結婚するというのがどういうことか、身をもつて体験したろう？あれでは体がいくつあっても足りん。今からも遅くない、家に来るんだ」

何故か断定口調のサンフォルさんは、近づいてきて痛ましいものでも見るようにわたしを見つめている。視線の先を辿れば、それは隠しきれなかった鎖骨の噛み跡で、ここを元に体を想像したなら、成る程彼の言いくさも納得できる。

しかし。

「下世話です、サンフォルさん。確かに噛み跡や痣は体中にあります。そりゃあもう、服に隠れているところなんか酷いもんです。でもそれを想像しちゃうけません。脳内だと言つても、女性を裸にするものじゃありませんよ」

黙って妄想するだけなら誰にもばれないけれど、口に出したらセクハラだと、眉根を寄せて忠告したらなぜだか肩を落とされた。

なんなんだろう、2人とも。派手に感情露出しているようだけど、意味がわからない。

一体どうしたものだろうと、アゼルさんとベリスさんを見上げると、彼等もちよっぴり困ったような顔をしていた。けれど、説明しないのはフェアでないと判断したのか、頷き合って重い口を開く。

「貴女が体験したように、悪魔は過激です。同族同士であればもつと淡泊に…いえ、義務のように子を成すためだけになる行為ですが、『エサ』に対しては感情を引き出すため容赦がなくなる」

へー知らなかった。それじゃあ、悪魔が悪魔のお嫁さんになったら、痛くないんだ…それはちよつとوراやましい。アゼルさんの答えにそうなのかと頷いて、ふと止まる。

『エサ』に対して…？

「……アゼルさん、ベリスさん、貴方達、今まで『エサ』女の人達にもあんなことしてたんですか？」

地を這うわたしの声に、びくりと体を竦ませた2人は答えに窮して表情を引き攣らせる。そして、慌てて弁解してきた。

「あのですね、ミヤ。愛があるのとないのでは、雲泥の差なのです。甘い言葉を囁いたり、当然愛を語ったりしながら触れないんですから。ただ泣かせて喰らう、その行為と昨日のあれが同じだと思

いますか？」

「思いません。思いませんが、面白くはない」

ベリスさんがどんな言い訳しても、しらない。

だって、あんなことやこんなことやそんなこと、他の女の人のし
たとか許せないんですけど。結構本気で腹が立つんですけど。

頬を膨らませて睨み付けると、オロオロしていた2人の動きがピ
タリ止まり、何やらお伺いを立てるように背を丸めて低姿勢になる。

「あの、もしやミヤ、嫉妬しています？」

「過去『エサ』であった女性に、妬いているんですか？」

「当たり前です。過去だろうが現在だろうが、2人が相手をした女
の人の話を聞いて面白いわけじゃないですか！好きなんだから、
当たり前でしょ?!」

「「ミヤ……」」

綺麗に人名前をハモった2人は、暑苦しくも両側から抱きついて
くる。

そうして頬やまぶたにキスに雨を降らせながら、貴女は特別です
とか、許して下さいとか、愛していますとか、昨日から耳にタコが
できるほど聞いている台詞を繰り返すのだ。

まったく、そう言えば許されると思ってるんだから、しよのない
双子なんだか。

「……………なんだよ、そんなにそいつらの過去が許せないなら、ミヤ
だって僕らと結婚したらいいだろ」

サンドイツチ状態でまだむくれていると、いつの間に関直った
のかメトロスさんが投げやりな口調で言う。

「そうだな、初めて相手が悪魔で、今度悪魔とだけ交わらないとな
ると、さすがの人間でも早死にしそうだな」

冷静な顔してサンフォルさんまで、恐ろしいことを…。
でも、ふとそれもそうかと思っっちゃう自分もいるわけで。

「確かに…痛くて辛いのはやっぱり続いたら、おかしくなりそうかも…」

優しくしてくれるとは言っただけ、基本悪魔は鬼畜だと思い知ったばかりなのでその思いは強い。

でも、好きな人が他の人と、そう想像しただけで怒り出したわたしが考えていいことじゃない気がして、上空の2人を見ると彼等は甘く微笑んでいた。

「いいんですよ、ミヤ。私達だって人間の貴女と結婚すると決めた日から、様々な覚悟をしていたのです。自分たちとだけいるより、天使と過ごす時間があつた方が良くという考えには我々も賛成です」「ええそうです。それにね、貴女が自分の家はここだと決めてくれた、それだけで私達は満足なんです」

…優しい。普段の数割増しで優しい。じーんと絆されちゃうくらい優しい。

思わずその優しさに胸が熱くなり、ぎゅっとしがみついちゃったわたしは、

「じゃあ、許可も出たし。僕らと行く」

「ああ。さあミヤ」

とつても嬉しそうに差し出された手のひらに、首を振ってしまっただ。

「人間は、以外に切り替えが遅い動物なんです。すいませんがもうちょっと待つて下さい」

新婚さんは3月くらいべったり張り付いているのが普通の世界の住人だったもので、昨日結婚した相手を無碍に放り出すことのでき

なかったわたしは、頭上でにんまり唇を歪めた悪魔に気づけなかった。

「騙されてるって、ミヤ！」

「冷静になることは、重要なことだぞ」

必死に説得してくれていた2人を、きっぱり拒否した自分を、1
月後殴り倒したくなるのは、また別のお話。

24 色ボケすると人間、頭が働かなくなるものです（後書き）

だんだんミヤが、かわいそうな子になってきた気が…

25 偉い人はあんまり好きではありません

心は健やかです。あんまりお食事提供を強要されなくなっただんで比例して、体は日に日に疲労が抜けなくなっています。

まだ、若いのに。10代なのに。なんか、くたびれた中年の気分です。

今朝も元気だった旦那様方を思い出して、午後のお茶をため息交じりに飲んでいたわたしは、良くも悪くも数日の休日を要求したい気分だった。

特に夜。っていうか夜。夜だけでいい、ともかく休みたい。

新婚なんて、ちっともいいことないじゃん。

これが正直な感想だから。ラブラブな想像してたけど、確かにラブラブだけど…限度って、あるでしょ？

そんなわけで、今晚のことを考えるとまたまた憂鬱になる新婚1か月目の新妻です。

「ミヤ様、お客様がお見えですが」

リビングで黄昏ていたわたしに、おずおずとカイクさんが声をかけてくる。

振り返れば、給仕の小間使いさんしかいなかった室内に、いつの間にもやら執事が控えているとは…：どんだけ意識散漫だったんだか…：ここはひとつ、しゃんとせねばと、微笑みを湛えてカイクさんに誰が来たのと聞いてみると、彼は眉根を寄せて言い淀む。

まさか、猫?!猫さん来ちゃった?!

一瞬で顔色が変わったに違いない。慌てたのはカイクさんのほうで、怪しい人物ではないと請け合ってくれた。

……エイリス、あなたの息子、このお家では完全に不審者扱いだよ。

だけど、そうなると誰が訪ねてきたのか、皆目見当もつかない。なにしろこの世界の知り合いなんて、両手で余る程度なんだから。首を捻りながらも、促されるまま応接室に移動していたわたしは、途中で今朝別れたばかりのベリスさんと遭遇して目を丸くした。

「あれ？お客さんじゃなくて、ベリスさんがお帰りだったんですか？」

「いいえ、お客様がいらしているのは本当です。ただ、粗略には扱えない方なのでアゼルニクスと共に屋敷まで案内して来たんですよ。それに、ミヤにも少々事情を説明しておかなくてはなりません」

そう言うと、わたしの腕をとって一番近い空き部屋に入れと促す。

この国で結構な地位にいて、見合った身分も持っている彼等が粗略にできない人って、誰なんだろう？

考えて思いついたのは『王様』だったけれど、それは絶対ないっていつのも同時に思い出した。

偉い人は自ら足を運んだりしないんです。呼びつけて、こっちから挨拶させる。これはどうやら星が違っても共通のやり方のように、当然『王様』も然り。

実はアゼルさん達が人間を見つけたと報告した翌日に、『連れてこい』と仰ったそう。偉そうに、10才を過ぎた子供までいるおっさんが、自分の子を産ませるからと。

…ああ、いけない。思わず本音が出てしまいました。『王様』でしたね。

でも、大丈夫です。この辺は大変ありがたい悪魔・天使族の本能と習性がなんとかしてくれましたから。

本来、伴侶は1人と決めて連れ添うのが彼等の本分で、自分たちにとつてとつても都合のいい人間が現れたからって、それが変わったりするわけじゃない。天使である『王様』は愛とか恋とかの感情をすつ飛ばして、自分たち一族が繁栄するために人間を家畜のように扱おうとしたらしいんだけど、当然反対されました。

まず『王妃様』である奥さんに、続いて国の重鎮候補である優秀な悪魔と天使の双子に、最後に人間を先祖に持つ他国の悪魔・天使族に。

因みに、最近判明したんですが、現在子孫のお一人である進化型の悪魔は、隣の隣の国の国王だそうです。7つの大陸の中では、最も力をお持ちの王様だそうです、その次期国王はこれまた人間の血が入った天使だそうです。

人間最強。

まさか地球上で最も戦闘能力が退化したといわれている自分たちが、異星ではこれほど力を持っていたとは…ところ変わればわからないもんです。

話しは逸れたけれど、こんな理由から家主の2人自らが案内してくる、重要らしいお客様の正体が更にわからなくなっていたわたしは、声を潜めたベリスさんが明かしてくれてた素性に目を見開いた。

「見えているのはハイジエント国現国王の長子、スローネテス様です」

話題の人物です。進化型悪魔の確か息子さんの名前を聞くとは、びっくりです！

偉い人は自ら出向かないって持論を、ちょっと変えなくちゃなんないかな…？国を跨いだところからわざわざわたしを訪ねてくれる

なんて、ちよつと感動。

「すごい人が来ちゃったんですね……」

いつかは会ってみたいと思っていた人間の女性の子孫が直ぐそこにいると考えて、わくわくした気持ちを隠しきれなかったわたしにベリスさんはちよつと顔を顰めた。

この段になつて、ようやく気付く。いつもにこやかに接してくれるベリスさんが、引き締めた表情を緩めてくれないことに。廊下で会つてからずっと、難しい顔をしていたことに。

普通じゃないこの様子から察するに、スローネテスさんの来訪はあんまり良くないのかも知れないとベリスさんを見上げれば、此方の心中を察したように彼は小さく頷いた。

「少し……困ったことになっています。人間の血を薄れさせないためにもミヤを寄越せと、言つてきています。もちろん私達は既に夫婦ですから、そのような要求は飲めないと申し上げましたが、初代様は何人も夫を持っていたのだから、年の半分をジャルジーで残りの半分をハイジエントで過ごせばいいと仰つて、譲らないのです」
成る程、それでこの予告もなしの訪問なのかと、納得がいった。

地球でだつてそうであつたように、人の家を訪ねるなら大抵の場合、数日前に使者をお伺いになてたり、火急なら水鏡で数時間後に行つていいかと聞いてからつてというのが、ここでの常識だ。いくら家主を伴っているからつて、いきなり来たりはしない。それじゃあ、家の方の準備ができないから。

現に、わたしは普段着のままだし、カイクさんも心なしか焦つていたような気がする。屋敷の中だつて妙にざわついた気配がするし。そこで、出したわたしの結論。

「絶対、ハイジエントには行きませんからね。誰に何を言われてもイヤです」

他人の都合を考えないとか、人の意思を無視して話しをこり押しする人は、好きじゃない。ううん、むしろ嫌い。だから強い決意を込めてベリスさんに言い切ると、彼はやっと表情を緩めてわたしを目の会う位置まで抱き上げる。

「そう言ってくれると思っていました。勿論、私達もサンフォル、メトロス、国王も同意見です。人間が有する権利は我が国だけの掟ではなく、一族全体の掟ですので、ミヤの意見は何者にも侵すことはできない。安心して下さい」

微笑みながら強く抱きしめてきた腕は、わたしを安心させるためと言うよりベリスさんが安心したと伝えてきていた。

全く、あれだけここがわたしの家だって約束したのに、ちっとも信じてなかったってことですか。この人がこんな風に思っているのなら、きつとアゼルさんだって同じ不安に苛まれてるにちがいない。仕方ないなと苦笑しながら、ぽんぽんあやすように彼の背を叩いて、だからわたしは促した。

「じゃあ、早く客間に行きましょう。ちゃんと断らないと失礼だし、アゼルさんもそんな人と2人ならきつと気詰まりなんじゃないですか？」

「…はい、そうしましょう」

頷いて扉を目指すベリスさんは、どうやらわたしを抱いたまま目的地向かうつもりらしい。

できれば降ろして貰いたいんですけど…あ、無理？そう、ですか。はい、諦めます。

26 柄にもなく、お説教してしまいました

一言でいうならば、傲岸不遜。王子様の印象は、それに尽きた。あ、王子様じゃないのか。この国は世襲制じゃないんだから。

髪は、鬘を思わせるつややかな漆黒で長めだけど短髪、わたしなんかよりよっぽど黒い。だけど瞳は深い紫色で、彫が深い顔立ちはこれまでに出会った悪魔と同じく、彫刻のように綺麗でとっても冷たい印象だ。

そんな美術館にでも置いてありそうな彼は、ベリスさんに抱っこされたまま現れたわたしを見て、僅かに表情を変えることもなく、低い声で言い放った。

「お前が2人目の人間か」

訂正します。印象じゃなく、冷たいんだわ、この人。ついでに失礼。

あまりにも予想通りの人物像に驚くこともなく、むしろ冷静になっってしまった。

それにこの気持ち……いきなり喚び出された時以来の、不快感だ。

「はい、人間ですが、何か？」

にっこり笑って答えてから、気づいた。どうやらわたし、怒ってるみたいですよ？

この感情は相手に伝わったのか、否か。相も変わらず無表情の男は、どんな反応も返すことなく言葉を継ぐ。

「ならば、私と共に来い。人間の血をより濃く守るために、不本意だが貴様を娶るよう命じられたんでな」

「お断りします」

こっちの返事も間髪なかった。

ずっと男の周りの気温が下がった気がしたが、そんなものどうだつていい。むしろ気になるのは、いつの間にかわたしの隣に並んでいたアゼルさんと、ベリスさんからジワリと怒りが染み出してきたことだ。

あつちが臨戦態勢なら、こつちも臨戦態勢。一触即発つてこういう空気を表現しているのかあなんて、呑気に納得している場合じゃなかった。

血を見たり、お家が壊れる前に、お引き取り願わなくっちゃだわ！

喧嘩売つたくせに、その結果に焦つて、わたしは頭をフル回転させて、目の前の不快な人物を追い返す言葉を探し始める。

「えーとですね、不本意なら別の人に頼むとかしてください。美しくない人間にだって、選ぶ権利はあるんです。それとわたしはアゼルさんとベリスさんと結婚しています。場合によってはまだ旦那さんを持たなきゃならない…いや、なんかこの辺は拒否権なくて多分メトロスさんとサンフォルさんも旦那さんにしなきゃいけない予感がヒシヒシしますが、とりあえずジャルジーを出る気とこの家を出る気は全くありません。次に来る方にも、結婚どこのという以前に、この国に住むつもりで来てほしいと伝えてください」

ああ、説明つて疲れる…。

一息に喋った感想はこれだった。目の前の人物は変わらず無表情だけど、とりあえずアゼルさんとベリスさんの怒気は消えたんで、良いです。1つでも心配事が減れば、よし！

自己満足に頷いていると、前方からは更なる冷気が流れてきた。「できるものならとくに別の男に任せている。だが、一族が選んだのは私だ。お前のような貧相な小娘を、人間だと言うだけで妻にせよと命じられ、尊厳を踏みにじられ権利を剥奪されたのは私の方だ。それを断るだと？貴様、何様のつもりだ」

「人間様です」

答えた途端に襲ってくる、痛いほどの殺気は、どうしたものでしょう？ああ、そんな射殺せそうな目で睨むの、やめて下さい。

この口！全てはこの口が悪いんです！正直に思ったことをつい零してしまった、この口が。

……って、全然フオーローになってませんね。ええ、そうです。再びわたし、怒ってます。

なので、笑顔を貼り付けたままアゼルさんの方を向いて、聞いてみました。

「こういう悪魔をオレ様って表現するんですか？違いますよね。これはただの無礼者です。どんな育ちをしてきたんだか存じませんが、人間の血を受け継いでると確か、ハイブリッドな感じになるんじゃないよね？希少な上に優秀で、甘やかされて煽てられたんでしょ？そんなもの、クソ喰らえです。人間の血のおかげで優秀になったのに、何様だとか聞いちやう無礼者、話しをするのもイヤです」

一瞬の、沈黙。後、肌を刺すような殺気、倍増。

けれど怯む気のないわたしに当然アゼルさんとベリスさんは気付いていて、

「申し訳ありません。妻がこう言っておりますので、お引き取り願います」

懇勸に、けれど断言したアゼルさんは、扉を示す。

「急なことでしたので、たいしたもてなしもできず失礼しました」わたしを抱えたまま、会釈程度にしか頭を下げていないベリスさんは、これで話しは終わったとばかりに外に控えているであろうカームさんと呼ぶ。

「お客様のお帰りだ。お見送りしろ」

そこまでされて、ようやく失礼な客人はちよっぴり表情を動かし

た。

形を潜めた怒りと、現れた動揺。

きつと、身分や育ちのせいで他人に真つ向から反抗されたことも、
”ありがたい”申し出を断られたこともなかったんだろ。どうしてわたしが、そしてその夫達が、こうまで自分に逆らうのかわからないと、顔に書いてある。

横目でその様子を観察して、小さく溜息をついた。

まったく、親切に教えてあげたのに理解できないなんて、血の巡りの悪い人は好きじゃないんですけど。

今度は胸の中だけで毒づいていると、唇に苦笑を乗せたアゼルさんが、親切にも無礼な方にわたしの内心を解説し始めた。

「妻は身分の上下がほとんどない世界から来ました。ですから一口一ネテス様がいかに悪魔族の頂点に近い場所にしようとも、謙るという考えがありません。きちんと礼を持って接しなければ、会話すらままならないと思いますよ」

「でも、お年寄りには敬いますよ。年功序列万歳な国の住人でしたから」

誰からも対等に扱われようとは思っていないので、そう言い添えたんですが、そこで大変いい考えを思いつきました。これは是非、聞いて貰わないといけませんよね。

「あの方が後40年ほど年をとつたら、無条件で言うことを聞いてあげてもいいです。だってお母さんが、おじいちゃんのことを、年をとると因業になって困るって言ってましたもの」

これは良い考えだと手を叩きながら提案すると、ベリスさんがさすがに苦笑いでわたしを宥めにかかる。

「ミヤの怒りはよく、わかりました。けれどあの方があんなってしまわれたのは、なにも本人の資質だけではありません。周りに碌な方がいなかったことも原因なんですから、その辺で許して差し上げ

て下さい」

「でも、大人になったら自分で考えて善悪の判断をつけるくらい、できますよね？まさか、そこまでの向上心がなかったんですか、偉いのに?!」

これは、追い打ちです。言いすぎかなあとも思ったけれど、自分を見つめ直すお勉強には必要かと思つてわざと口にしたんです。

すると、しばらく沈黙していた王子様もどきは、静かに戸口に向かって歩き出しました。

「また、日を改めることにする」

と、小さく呟いて。

「えーと…わたし、言い過ぎちゃいました？」

今更ながらちよびつと気の毒になつて問うと、旦那様方はそろつて首を振るんです。

「いい薬です」

そう、ですか。ならいいんですけど。

それにしても、悪魔族の中で最高位に近い場所にいながら同じ一族からこんな風に言われちゃうなんて…早く目を覚まして下さいねえ〜。

27 自分の知らないところで、話しがどんどん進んでいます

「すごいね、ミヤ」

「ああ、すごいな」

「ふへ？」

傲岸不遜な悪魔が現れた日の夕飯時、ケーキを手にメトロスさんとサンフォルさんがお食事をしに来たのですが、昼の顛末を聞くなりケーキをほおばっていたわたしにこう言うわけです。

そして何のどこがすごいのかわからず聞き返したのを、アゼルさんがすかさずフォローしてくれるわけで。

「スローネテス様は、人間を祖とする悪魔の中で現在、最強と謳われているお方です。その上お父上は現国王、権力においても最高位に近い場所におられるわけですから、年頃の娘を持つ悪魔達は毎日彼のお方に縁談を持ち込んでいられると言われていたほどです。それを貴女はいつそ気持ちいいほどの冷酷さで切り捨てたんですから、2人が驚くのも無理がないと言うことですよ」

無礼な人が置かれている状況を聞いて、わたしは啞然とする。

偉いのはわかってたけど、能力もある人だったわけね。そりゃあ、あんなこと正面切って言われたら、怒っちゃうかもね、うん。

納得して、口の中のケーキをこくりと飲み込んだ。

余談ですが、男女比率が狂った星において、唯一正常なほぼ5：5を保っているのは悪魔族と天使族だけです。こうなると、あの人がいった『犠牲者』というのは、あながち嘘じゃあないようですよ。

同族で、容姿も好み、能力も同等、権力も釣り合うお嬢さんと、人間という以外の付加価値を持たない女。

どちらを選択するかは、推して知るべしです。わたしなら何が何

でもわたしとの結婚だけは避けます。絶対お断りです。

「それは本気でお気の毒様ですね、あの方。なんとか別の方にトレードして下さいって交渉は、できないんですか？」

生涯を1人の相手と共に過ごす彼等だからこそ、嫌いな女と結婚しなくちゃいけないのは苦痛だろうと提案すると、4人は揃って顔を見合わせ、何故か幸せそうに目配せしている。

「交渉はお任せ下さい。得意とするところです」

「だね。謀はかごとなら、僕とアゼルニクスはかごとの2人で充分いける」

「もしも揉め事になっても私達がいるしな」

「ええ、これでも荒事は得意なんですよ」

……なぜ、それほど満面の笑みなのか？聞くのは怖いので、あえてスルーします。

取り敢えず、皆さん一致団結してあの方を救う気満々だったことは、理解できました。

お互いのためにも、それが最良の道でしょう。

それはいいです。それはいいいんですが。

「あの〜？気のせいじゃ無ければ、微妙にメトロスさんとサンフォルさんが浮かれているように見えるんですけど、気のせいですか？」
それは、彼等が屋敷に現れた時から感じていたことだったのだけど、話題の中心があの方に終始していたもんだから、なんととはなく聞きそびれて食後まで来てしまったことだった。

殺伐とした話題からの転換には、無難な内容だろうと、お天気の話でも振る気軽さで問いかけてみたのだけれど。

「見間違いですよ」

アゼルさんは何やら背筋が寒くなるような微笑みで、否定。

「ミヤ、食後のお茶はどうですか？」

ベリスさんは脈絡なく、ティーカップをくれ、

「ふふふ、いいことがあったんだよ」

メトロスさんは、それはそれは嬉しそうに顔をほころばせ、私達を次の夫に選んでくれたことに、礼を言う「

珍しく唇に笑みを乗せたサンフォルさんが、答えをくれた。

わたしはというと、彼等の言葉をゆっくり反芻し、お茶を飲み、無言を貫くという、ささやかな現実逃避に出ていたのだけれど、不機嫌に顔を顰める悪魔ツインスと不気味に顔を緩める天使ツインスが、それを許してくれなかった。

所謂、現実ですと、態度で皆さん語るんです。

「……………えゝ…わたし、選びましたか？…覚えがないんですが、いつ頃…？」

たった1度だけ、そうと疑われる発言をした記憶はあるんですが、まさかさっきの今で、しかも限られた人しかいなかった場所での発言が、はつきりとした意思を持つとも思えず、とぼけてみました。

上機嫌な天使さん達が、見逃してくれませんでした。

「ここを出た後、スローネテス様が王宮に”メトロス”と”サンフォル”を名指しで訪ねて来たんだよ。そして、僕らの顔を見るなり聞いたんだ」

「貴様らが、人間の選んだ次の夫か、とな。事情を質せば、ミヤ本人がそのように言っていたと言うのでな、貴女の意味が固まったのなら我々に否やのあるはずはない」

ここは、いいですよ？当然、悪態をついたって許されますよね？

あのくそ悪魔！！次会ったら、絶対殴る！そこが王宮だろうが、王様の前だろうが、絶対殴る！！

己の発言とは言え、まさか本人達に伝わると思わなかったわたしは、心の中で熱い怒りをたぎらせながらも、一体どうやって彼等に言葉の綾だったことを納得して貰おうかと思案していたのだが。

「僕ね、王から祝辞を頂いたんだよ。ついでに娘が生まれたら、是非とも息子の妻に貰えないだろうかって打診していたからね」

「そんなもの、私だって結婚を宣言した一月と少し前に頂きましたよ。息子の妻の話も、同じようにね」

「天使族の長からも、お褒めいただいた。我らの、ひいては世界の未来にも関わることなのだから、しっかり子作りに励むようにも命じられた」

「同じですよ。世界の、そして一族の未来を愁いているのは、悪魔と一緒なんですから。しかし、子供なら先に結婚している私達の方が、有利だと思いますが？」

「関係ないだろ、後先なんて。あんなのタイミングの問題だよ」

「ならば余計に、ミヤと禰を共にする数の多い私達が幸運を掴むでしょうね」

あああつ！どんどん会話に取り残されていく！そして、なんだか否定できないところまで勝手に話しが進んでる！どうする？どうする？！

喧々囂々議論を戦わせ、全く本人無視の人達に割り込むタイミンが見失ったわたしは、途方に暮れていた。

しかも微妙に下ネタが混じってる気がする。そういうの、人前でして欲しくない話題なんだけどとか、言いづらい空気が流れてる！だから冷や汗を流すっていうのを、比喻じゃなく本気で実践してたわたしは、4対の瞳が一斉にこつちを向いた時、完全に冷静さを失ったんだと思う。

「で、ミヤ？今晚は家に泊まるよね？」

「そうだな、事実上も結婚するのなら早いほうがいい」

「バカなこというんじゃない。ミヤにだって心の準備が必要だろう」
「そうですよ、自分たちの都合を押しつけないで下さい」

言い合いも、言いたいこと言えないのも、もう沢山！

椅子を蹴倒す勢いで立ちあがったわたしは、全力で食堂を逃げ出
した。

「色々全部、考える時間を下さい〜〜！！！！」

尾を引く叫びを残しながら、その夜、久しぶりに自室に戻るとき
うちり鍵をかけて眠った。もちろん、バルコニーにも施錠を忘れな
かったのは、取り乱しても学習機能が働いたおかげだと思う。

28 心身ともに平和に過ごしたいのですが

逃げて朝は来るし、現実は一晩寝たくらいじゃ劇的な変化をしない。そういうもんなんです。世の中は。

「おはようございます」

身の処し方を決めかねたまま、取り敢えず向かった食堂には既に悪魔と天使の双子が揃っていて、期待に満ちた、というよりも感情に飢えた顔をしていた。

そうでしたね。そろそろ『エサ』を摂取なさらないと皆さん限界なんでしょう。こんなことなら昨日のうちに、お食事を済ませて貰えばよかった。

こんな後悔が役に立つはずもなく、さてどうやって怒って、どうやって喜んだものかと、わたしは考えを巡らせながらアゼルさんとベリスさんの間の席に座る。

「ミヤ、昨日は…」

「そのお話は後にしましょう。とにかく、お食事です」

何かを言いかけたサンフォルさんを遮って、食卓に目をやると並んでいるのは好物ばかり。思わず一気にテンションが上がって、目が輝いたのはいうまでもない。

「え〜すごい！ベーグルっぽい物に、ベーコンっぽい物に、スクランブルエッグ！どうしたんですか、これ！！」

ほとんど”ぱい”がつくのが微妙に悲しいが、取り敢えずこれらはこのお屋敷に来てからわたしが好きだといったものばかりだ。

なにせ、エイリスの家ではほぼベジタリアンだったので（たまにはわたしだけ肉も食べたけど）、ベーコンの存在を知らず、同じ理由でスクランブルエッグもほとんど食べたことがなかった。けれど悪魔はそんなこと気にせず、美味しいものを食べる。

それら全てが人間の口に合うわけではないけれど、この郷愁をそそる食事は地球を思い出すこともできるから、わたしの大好物になっていたのだ。

「わーい！ベークルサンド」

食感もちもちだけどドーナッツ状ではなく、四角くて手のひらサイズなこのパンはあり『合わせのものサンド』にとっても合う。

そーつと横から半分に裂いて、間にレタスのような葉っぱとベーコン、スクランブルエッグを挟んだわたしは元気に頂きますをして、一口頬張った。

「おーいーしいーっ」

「それはよかった。お口に合って、なによりです」

にこにこ笑いながら、アゼルさんはもう一つのベークルに今度は生サーモンぽいものとチーズっぽいものを挟みながら、これもどうぞとスペースのできた目の前のお皿に置いてくれた。

ありがたいし、嬉しいけど、結構量のあるこれを2つも食べられないだろうと、断ろうと思ったところで力が抜ける。

感情を天使に食べられた。

理解できると一緒にお腹が空いてきて、成る程そういうことかと満足そうなメトロスさんとサンフォルさんを、交互に眺めた。

はつきり美味しいと口元を緩めるメトロスさんと、ほぼ表情筋の変化はなく、けれど美味いと微かに目元を和ませたサンフォルさんに、怒ろうとしていた気が失せた。

いつか、遠い未来に彼等も夫にと、成り行きとはいえ口にしたのはわたし。まさかこうも急だとは考えもしなかったけれど、密談だと信じていたあれやこれやを2人にバラされては、前言撤回もできない。そこにいって1年猶予期間があるうが、1日しかなかろうが結果が変わるわけじゃあない。

ここは1つ、覚悟の決め時でしょう。

「今晚：メトロスさんとサンフォルさんのお屋敷にお泊まりしたいです。明日の朝にはこっちに戻りますから、外泊してもいいですね？」

抽象的な表現だけれど、全員に意思は伝わったようだ。

仕方ないとばかりに肩を竦めた悪魔組、途端に表情を輝かせた天使組。

つまり、わたしの旦那様は今晚また2人、増えるということですよ。あまり望んでませんが。

けれど決意は固めたと、彼らを見回すとアゼルさんがうすら寒い微笑みを浮かべています。なにやら、とっても嫌な予感のする笑みです、が？

怯えて頬を引き攣らすわたしをなぜかスルーして、彼は天使の2人に視線を据える。

「ミヤをそちらにお貸しするのは、後2日待っていただけませんか？」

「……………」

「どうして。彼女がいつって言うてるのに、君がそれを邪魔するわけ？きちんとわけを説明してくれないかな」

意味がわからず首を傾げたところ、メトロスさんが不満そうに理由を質してくれた。同様にサンフォルさんも顔を顰めていて、訳知り顔なのはベリスさんだけだ。

「貴方たちも、天使ならわかるでしょう？己の伴侶を他人と共有しなければならぬ苦痛が。この怒りを抱えたまま登城すれば、私たちは必ず他の方を被害者にする自信があります。そうしないためのガス抜きを今夜させてほしいと言っているのですよ」

…えっと、愛の告白のようにも聞こえますが、わたしの命が風前の灯のようにも聞こえますが？怯えてアゼルさんを見上げると、なぜか反対側のベリスさんまで恐ろしいこと、言いました。

「それに、食事もちんちんとしておきたいので。体も心も貪れば、回復に1日は必要でしょう。その後ミヤを手に入れた貴方方だって、1日や2日で彼女を返してくれるつもりはないんでしょう？ならば2日、我慢してください」

間違えました、風前ではなく、すでに死亡フラグが立ってます。

もちろん、理解しがたいその理由に納得したメトロスさんとサンフォルさんは、2日後の約束をして帰っていきました。
そして、わたしはなぜかそのまま寝室直行です。

「え？あの、お仕事は？！」

「今日は、休みます」「」

いや、休んじゃダメでしょう！！

28 心身ともに平和に過ごしたいのですが(後書き)

次回、ムーンでお会いいたしましょう。

29 隣家への道のりで、不可解な関係に遭遇です（前書き）

少々、箸休めのお話です。進展はほぼ、ありません。

29 隣家への道のりで、不可解な関係に遭遇です

へ口へ口になるまで、いろんな意味で食べつくされた翌日。さすがに罪悪感にかられたアゼルさんとベリスさんから、ぺったべたに甘やかしてもいました。

満足です。体は辛いですけど、めっちゃめっちゃハッピーです。しみじみと、優しくて綺麗な旦那様をもってよかったなあと、愛されちゃってるけどわたしだって恋しっちゃってるって自覚しました。

まだ、愛になっていないところがポイントです。もしかしたら2人も愛じゃなく、執着とか『人間』に対する独占欲かもしれないけど、ともかく繰り返し愛していると云ってくれるので、彼らのは愛だと信じておくことにします。

でも、わたしは恋。だって、愛なんてまだわからない。本気で人を好きになった時の行きつく先を理解できるほど、大人じゃありません。

なので、約束の朝、迎えに来たサンフォルさんとメトロスさんに連れられていく様は、多分かの童謡のような風情だったのではないかと思うのです。

金銀の大きな白人に両手をそれぞれ預け、連れられていく小さい日本人。

背後では悲壮感を漂わせた悪魔の旦那様たちと、悪魔の使用人の皆さんが見送ってくださいっている。彼らは状況が呑み込んでいるのに、当の本人のわたしは大した感情もなく、ぼんやり連れて行かれるがまま…これで赤い靴を履いていたら、完璧なのにつ！

なぜか握り拳を作ったわたしを、天使さんたちが不思議そうに見下ろしていますが、当然です。日本の童謡を遠く離れた異星の住人

が知っているわけないし、ましてや内容なんてわかるはずもない。

「えっと、お2人のお家ってお隣なんですよね？」

そのあたりの説明が面倒で、さっさと話題転換しようとしてこり笑って見上げると、サンフォルさんがなぜか顔を顰めながらもそっだと頷いてくれた。

どうしてそんな怒ったような目でわたしを見るんだろうと、首を傾げているとメトロスさんが答えをくれる。

「これ、あいつらがやったの？」

加減なしに後ろから襟元を引っ張られて、ぐえってなった。

ドレスは苦手なので、足首丈のシンプルなワンピースを普段着にしているわたしは、今日は首の半分以上まで隠れる高襟のモノを着用している。

理由は簡単。夜というか昼というか…その、口に出しづらいうろいろの最中に、双子のどっちかにカプリと首筋を噛まれちゃったから。意識朦朧中にはよくあることなんです。特におとといがひどかったのは、まあ、今日のことがあったからなんだけど。

苦しそうにしているの気づいて、メトロスさんはすぐ手を放してくれたけど、視線はずっと噛み跡に据えたまま、わかりきってる返答をわたしがするまでそうしているつもりらしい。

しょうがないからできるだけなんでもないことに見えるよう、へらっと笑いながら頷くと、少々子供っぽい発言が多い彼はあからさまに不機嫌な顔をして舌を鳴らした。

あの、ガラ悪いです。天使の容姿で、舌打ちとか似合いません。

少々痛い子を見る感じでメトロスさん見上げると、更に彼はご機嫌を斜めになさいました。

「あのさ、ちゃんと嫌だっついていいなよ。噛まれたり、縛られたり、

好きじゃないでしょ、そういうの」

ぐつと目の高さまでひっぱり上げられたわたしの手首には、擦過傷がある。できるだけ傷つかないように気を使って、柔らかくて太い布で縛られながらやっぱり口に出すのははばかられる行為をしてくれたんだけど、苦痛と快楽に我を忘れてもがくので、どうしてもこういうのが残ってしまうのだ。

きちんと袖で隠していたはずなのに、どうしてばれたんだと視線だけで問うと、わかるに決まってるよと冷たい目をされてしまった。

「連中は苦痛、恐怖、悲哀を好んで喰らうんだよ？ミヤを愛しているながら、それらの感情を大量に摂取しようとしたら、ひどく抱くしかない。君をベッドに縛り付けて羞恥を引きずりだし、快楽を与え、前に押し入って痛みを喰らう。その後で囁くんだ『愛している』『赦して欲しい』ってね。ほーんと、間違った愛情表現しかできない連中だよ」

「あの、覗いてませんか？寝室」

あんまり的確に状況を再現してみせるものだから、ついつい疑いを抱いてしまったのだが、

「…へえ。ミヤの僕に対する評価がよくわかったよ」

これこのように、全く暖かみを感じられない笑顔で返されると、もう言葉も出ません。恐ろしくて。

悪魔より、天使の方が邪悪なんじゃありません？

体を縮こまらせて思わずサンフォルさんに救いを求めると、ふつと口元を緩めた彼は自分の片割れを諫めてくれた。

「その辺にしておけ。ミヤが我々の間に根付く嫌悪を理解しない限り、悪魔と天使は互いの習性を知りすぎるほど知っているという事情に、納得することはできないだろう。となれば、今の発想は極めて自然だ」

「わかってるよ、そんなこと」

不機嫌ながらも頷くメトロスさんと、苦笑いを浮かべるサンフォールさん、そして部外者のわたし。

天使と悪魔に関わるようになってから、そこそこ理解していたと思っていたこの星の住人の生態が、度々意味不明になるのはこんな瞬間だ。どうやら天辺に君臨する2つの種族の間には、とーっても高い壁があるらしい。それも双方向に『立ち入り禁止』とでも書かれた、ひどく嚴重なやつが。

これは是非謎解きをしておかねばなるまいと、手短に彼等の説明を求めると、本気で簡潔明瞭なお答えを頂けた。

「生理的嫌悪、これに尽きる」

「本能的に彼等そのものを、受け入れられないだよ」

すぱつと、言い切っちゃうんですね。そして、わたしの翻訳機能は大変正常に働いていたわけですか。

天使が悪魔を敵対視するのは、地球では当然のことだと理解されていた。なにしろ、黒と白、善と悪、天国と地獄、彼等に関係するものは相反するものばかりだ。

行動もさることながら、生理的・本能的に受け付けない存在ならば、嫌い合っているも仕方ない。そして、なぜだかそういった相手こそ、よく知っているものだしイヤでも関わっちゃったりするものだ。

なので、理解したし、できた。

彼等はお互いを大変意識し合っていて、お互いを無視できないほどの感心を持っていて、お互いに常に競い合っていなければ気が済まない好敵手だということが。

そう説明したら、2人は顔を真っ赤にして反論してきましたけど

ね。

延々と、100メートルの距離を自宅へ着くまで、ずっと。
手を変え品を変え言葉を選んで、いかに自分たちが悪魔を嫌い
か説するんです。

だから教え損ねちゃいました。

嫌いの本来あるべき姿は、無視だったこと。本当に嫌悪する相手
には、無関心になってしまっただってこと。

早く、気づけると良いですね、2人とも！

30 お隣は、執事カフェですか？

「おかえりなさいませ、ご主人様、奥方様」

玄關脇に整列した執事さんはじめとする使用人の方々に、こんな風に出迎えられたわたしは、思わず白亜のお屋敷の上にとあるものを探してしまった。

「なにしてるの？」

「や、どつかに”執事カフェ”って看板がないかなあとと思って」

「それはなんだ」

「…えーっと、世間につかれた女性の皆さんが通う癒しの空間、もしくは一部マニアが趣味を丸出しにしても許される、別世界のことです」

真剣に聞かれると少々返答に窮してしまいが、あながち間違った説明はしていない、と思うのです。

だって、悪魔のお屋敷の男性方も美しくはあったんですがこちらの皆さんはなんとというか…王子様です。なんか、全体的に色素が薄い方たちばかりのせいか、高貴で神秘的な感じがバリバリです。

あつちが魔王のお屋敷なら、こっちは王様の宮殿、どつちがより執事カフェっぽいかと聞かれたら、断然こつちです。

「初めまして、奥方様。執事を務めさせていただいておりますリワンと申します」

美人の集団は迫力があるなあと、眺めているところに1人の男の人が歩み出てきた。

茶色にも見える濃い色の金髪を太い三つ編みにして右肩から垂らし、こげ茶の瞳が柔らかな光を湛えた30手前くらいに見えるお兄さんだ。執事ということは、カイルさんと同じ役職ってことだけど、年齢のせいかわろち着きが違う。いかにもお仕事ができそうな雰囲気

を醸している。

「あ、初めまして。ミヤです」

慌てて頭を下げて、くすりと笑われた。

「どうか私に頭を下げたりなさいませんように。皆、奥方様の使用人なのですから」

「そんな、恐れ多い…」

あっちのお屋敷でもそうだけど、使用人とか言われると恐縮してしまう。なにしろ見かけも能力も絶対わたしの方が下なのだ。ちょっと魔法が使えるだけの、無力な人間に過ぎない。

そんなわけでぶんぶん首を振って引き攣り笑いを浮かべた後、リワンさんをお願いした。

「あの、奥方様とか言われると落ち着かないので、ミヤって呼んでください」

「しかし…」

言い淀んだ彼が見つめた先にいるのは、2人の主だ。

悪魔のお屋敷でもそうだったけれど、正式に結婚したあとも名前前で呼んで貰うには夫である人達の許可がいるらしい。それで少々揉めたので、視線で問うリワンさんの行動の意味は直ぐにわかった。

アゼルさんとベリスさんは意外とすんなり許可してくれたんだけど、彼等はどうだろうか？

反応を確かめたくて顔を上向けると、ちょうどメトロスさんが頷いたところだった。

「ミヤの好きにさせてやって。彼女は人間で僕たちの掟の中にはいない。その辺りは了解しているから」

一瞬投げやりにも聞こえる声音だけれど、表情に浮かぶ諦めを見つければ、わたしに天使の常識が通じないことを無理矢理自分に納得させていることがわかった。サンフォルさんも僅かに顔を顰めているが、何も言わなかった。

伴侶を大切に、伴侶だけを愛する天使や悪魔にとって、妻の名を他の男に呼ばせることは許しがたいことなんだって、こっそり教えてくれたのはカイクさんだった。でも、わたしが人間である限り、独占することもできないとちゃんと2人はわかっているから、許しさえももらえるならこれまで通りに呼んでくれるとも言ってくれた。

はたしてアゼルさんとベリスさんは我が儘な願いを快諾してくれただけけれど、メトロスさんとサンフォルさんもこの辺はきちんとわかってくれているみたいで、特に何を言ったりもしない。なにしろ自分たちだって悪魔の双子と結婚しているわたしを呼び捨てしているのだから、納得はできないけれど理解はしてくれているのだろう。

「では、ミヤ様とお呼び致します」

主の反応を見てにこりと微笑んだリワンさんは、そう言うのと金の金具で縁取られた白く重そうなドアを、ゆっくり開いてくれる。

「どうぞ、中へ。お茶の用意が調っております」

「ん。さ、どうぞミヤ」

腰に手を回してエスコートしてくれるメトロスさんに促され、覗いた室内はこれまた見事に真っ白だった。ぴかぴかの床も手垢一つない壁も膨張色の白一色。

「…やっぱり、天使は白が好きなんですねぇ…」

あっちのお屋敷では黒が多め、程度だったけれど、こっちはもう目が痛くなるほどの純白です。しかもアクセントが金ばっかりなんです。落ち着かないことこの上ないゴージャスさです。

半ば呆れ、半ば諦めての呟きに、背後からサンフォルさんが答えてくれる。

「好き、というより、我々一族が正式な場で纏う色が白と決まっているからな、必然的にホールなどは白が基調に使われるんだ」

「それなら、個室は違う色なんですか？」

「いや。家具はともかく、内部は白だ」

「…ですか」

肩を落としてしまいました、反射的に。

白と金、白と金…想像するだに落ち着かない。そんな乙女チックでお姫様チックなお部屋じゃ、寛げない。

別にその色が嫌いというわけではないけれど、これまでの経験からするにわたしにあてがわれる部屋は天蓋付きベッドがある可能性が高いわけで…となると、庶民にはとても落ち着けない部屋になることは想像に難くなかった。

どうやって普通の部屋にして貰おうか、お茶の用意されている客間に案内されながら思索していると、メトロスさんの笑いを含んだ声が降ってきた。

「心配いらないよ。君が華美な部屋を好まないことは、あちらの執事に確認済みだからね。まあ、白い室内は諦めて貰うしかないけれど、家具は装飾の少ない木目を生かしたものに替えてある。ベッドプレスやカバーモレースやフリルで覆われてないから、安心して」
「そうなんですか?!」

請け合って貰って、どれほど安心したかは言葉で言い表せません。そりゃあ、目をつむって寝てしまえば布団の寝心地以外、気になることなんてないかも知れないけれど、お茶を飲んだり読書をするのに人の部屋にいるような緊張感を常に強いられるのはお断りです。

なので、ウキウキと回想して下さったらしいお部屋に思いを巡らせて、ソファーに腰を下ろそうとしたところで腕をメトロスさんに引き上げられる。

「見たいでしょ、自分の部屋」

につこり。微笑まれて、背筋が凍った。天使のくせに、お腹真っ黒な笑顔はやめて下さい。思わず後ずさりますよ？

腕の拘束は解けないまでも、距離くらいは取った方が無難だろう

と、下がったところにサンフォルさんがいて。

「ああ、見ておいて方がいいぞ。自分の部屋くらい」

こちらははつきり見て取れるほど、よろしくない目つきで私のことを見つめてらっしゃいました。

焦ったのは。わたしです。まだ、昼前だし。まだ、明るいし。まだ、このお屋敷に来たばかりだし。

全部”まだ”でくれる状態だっというのに、何故貴方はそうもいかがわしいモノを発してわたしを見るんですか！

こういった節操ない行動を、一月ほど重点的に裁いてきたせいか、ある程度の耐性ができていたわたしは慌てたりしなかった。

必殺微笑み返して2人を一瞬黙らせると、ドスをきかせた声をお願いします。

「喉、乾いてるんです。お茶にしませんか？」

果てしなく色仕掛けに向かない身なので、必死に覚えたんですよ、この必殺技。でね、これがまたよく効くんです。

「う、うん、そうだね」

「ああ、そう、だな」

普段、猫をかぶって大人しくしているだけに効果は絶大です。

ちよっぴり驚いたらしい2人は、大人しくソファアに座ってくれましたから。

さて、第一関門は何とか難を逃れることができたけれど、これ、いつまで持ちこたえられるかな。

3 1 藪を突いたらアナコンダが登場です（前書き）

見方によっては、精神的残酷表現があると思います。
お気をつけ下さい。

31 藪を突いたらアナコンダが登場です

「ところで疑問があつたんですけど、解消してもらえますか？」

微妙にタイミングを計っている節のある双子を煙に巻くため、いろいろ、本当にいろいろあつて聞けず終いだつた謎を解いてもらえないかと水を向けてみました。

あ、因みにまだ平和な客間にいますから。お茶はいつの間にも手に入れたのかエイリス謹製のもので、1人用のソファアームにどっかり座るわたしの正面に、カウチに並んだ天使さん達がいます。

空気は緊張感が漂うモノですが、気にしちゃいけません。ようは夜まで持ちこたえれば良いんですから。そこまでいったら、わたしだつて諦めます。

そんなわけで、退屈な時間を紛らわすための質問をしていいかと思うと、メトロスさんが頷いてくれた。

「いいよ。何が知りたいの？」

許可が出たなら、幸い。お茶をテーブルに戻しつつ聞いてみる。

「天使と悪魔つて、お互いの一族同士でしか結婚しないんですか？たとえば天使のお母さんに悪魔のお父さんとか、どっちの血も受け継いだお子さんとかか、存在しないんですか？」

「いるよ。すごく少数だし、その時点で悪魔にも天使にも認められない存在になるけど、いる」

「…は？認められないって、どんな扱いなんです？」

「他の種族と同じ扱い。でも、感情は食べるんだよね。『エサ』にはなれないのにな」

「え、可愛そうじゃないですか、それ。どっちかの一族に入れてあげられないんですか？」

「無理。だつて喜びも苦痛も食べるなんてどつちつかず、質が悪いじゃない。お互いを嫌悪し合ってる僕らが、受け入れられるわけな

いでしょ」

平然と言いながらクッキーを口に放り込んだ彼を見て、脳裏に浮かんだ場面がある。ハーフの子供が謂われのない差別を受ける、戦時中を描いたドラマだ。

別に殺し合うほど仲が悪いわけじゃないのに、そこまでお互いの存在を否定し合うなんて、生理的嫌悪って言うのは大げさな表現じゃないみたいですよ。むしろ具体例を示さなかっただけ、婉曲表現だった気がします。

「そこまで根本から受け入れられないのに、よく結婚しようなんて強者が現れますね」

生まれた子供はどちらからも受け入れられないとわかっていながら、それでも生むんだから酷く勇気があるだろうと呟くと、サンフオルさんがそうだなと同意してくれる。

「全く理解できないが、必ず現れるんだ。数十年に一組くらいそういう物好きがな。だが、本人達は幸せでも、子供は哀れなものだ」
「……………確かに」

身勝手な自己満足から生を受けた子供は、どれほど両親が愛情を注いごうとも世間から認められない。しかも親は自分より必ず先に死ぬんだから、残された彼等はたまったものではないだろう。

「どこで暮らしているんですか、その子供達は」

どこにも属せないどこにも属さない、そんな天使や悪魔は生まれ育った社会にいないことができないんだから、どこかでコミュニティを作っているんじゃないだろうか。

何となく思いついたことなのに、メトロスさんは不快そうに顔を歪めると吐き捨てた。

「スラムだよ。『エサ』が手に入りやすく、一族の目につきにくいスラムで奴らは暮らしている」

いつにないその怒りに、やっぱりそんな人達を彼は嫌っているん

だと切ない気分になっていると、

「あんなバカ共のせいで、子供達は最悪な環境で育つ羽目になる。やっと保護しても大抵は手遅れで、凶悪な暗殺者になることが多い」

悔しそうなその声に、ああ違う。この人は優しいんだとしみじみ思った。

理解できない、一族には迎えられないと言いながら、生まれ出でた命を哀れんでいる。だからこそ、その末路に腹を立てるのだと。

スラムはエイリスと住んでいる頃に、近づいてはいけない場所だと教えて貰った。あの出不精の魔女が、裏路地を数本入った先までわざわざ一緒に来て、ここから先がそうだと見せてくれたのだ。

昼でも陰鬱としたそこは、荒れ果てた石積みの建物と腐臭、なにより血の臭いのする場所だった。日もほとんど当たらず、人の気配もない。

お化けでも出るのかと聞いた時、魔女は少しだけ顔を歪めて否と言った。ここには人が住んでいるのだと。訳あって表で生きられない者達のねぐらで、少々魔法が使える程度のわたしではいいカモにされ殺されるのがおちだから、決して近づいてはいけないと。

あんな場所で育たざるを得なかった子供。天使からも悪魔からも見放され、きつとこの世の全てを憎んでいるだろう子供。

殺人を生業とするには、もってこいの生い立ちだろう。いや、それ以外にできる仕事がないのかも知れない。

そう考えるともっとメトロスさんの辛さが染みるようで、わたしは胸を押さえた。

まさか時間稼ぎのつもりでした質問に、これほど重い返答がなされるとは思ってもいなかったのだから。

「あの、変なこと聞いてすみません。そんなつもりじゃなくて、ただ天使の王様が悪魔のアゼルさん達とわたしの子供を息子の妻に欲

しいっていつていたのを聞いて、異種族結婚とかあるのかなって考えてただけなんです」

お互いを嫌悪し合っている者同士でありながら、なんでそんなことを言ったのか気になっただけなのに、思いがけずダークサイドを覗いてしまつてオロオロしていると、微笑みを浮かべたサンフォルさんがこちらの疑問は解決してくれた。

「同じ一族でなくとも、人間の血が入ったのなら話しは別だ。彼等は女であれば、夫の食料となる感情を生み出せる。男であっても他の同族より強い力を持つことは確実だが、感情の提供はできない。だから、息子限定で妻に欲しいと王は言ったんだ」

納得すればそれは至極簡単なことでした。

そうか、そうなんですか。あのスラムの子供達も、一滴でも人間の血が流れていたのなら、あんな場所で暮らさなくても一族の中で大切に育てられたってこと、なんですね。

理解した途端、わたしは妙な使命感に駆られてしまった。

勿論、大前提としてメトロスさんサンフォルさんを好きになるところから始めなくちゃいけないんだけど、それさえ過ぎれば後はとつても簡単だ。

握り拳を作り、未だ怒りの抜けきらないようするのメトロスさんと、穏やかにこちらを見ていたサンフォルさんに顔を寄せる。

「頑張りましょう。一杯、人間の血を残せるように。何十年かに一度恋愛して子供作っちゃう天使や悪魔のために、わたし子供産みます！」

知らなければやり過ぎせることも、知つてしまえば何かせずにおれない。といったわけでの子作り宣言だったんですが、2人は斜めに取りました。都合の良いように軌道修正をしました。

「そりゃあ名案だね。それじゃ早速寢室に行こうよ」

「ああ、善は急げというしな」

立ち上がりわたしを抱き上げに来そうな勢いにちよつとびびりましたが、負けません。これ、大事ですから。

逸る悪魔を簡単な足止め魔法で止めて、術を破られる前に早口で宣言です。

「まず、知り合いましょう。夜までの間はお話タイムです。お日様が昇っている内にいかがわしいことしたら、即隣に逃げ帰りますからね?」

絶対譲らない覚悟で見やると、一瞬考える素振りをした2人は小さく舌打ちして元のソファに逆戻り。

やっぱりわたし程度がかかる魔法は、秒殺で突破されちゃうみたいで。

「りょーかい。納得したいわけじゃないけど、せつかく結婚する気になつてる奥さんに逃げられるのは、ごめんだ」

行儀悪く足を組み、背もたれに両腕を預けたメトロスさんは天井を仰いで降参のポーズ。

「そうだな。こんなに早くミヤが来てくれただけでも、喜ばしいんだ。夜まで待つくらいどうということはない」

一方、両膝に腕を預けて前屈みで口の端を上げたサンフォルさんは、大人の余裕を見せている。

ともかく、アゼルさんとベリスさんとのあれやこれやの跡が残る体を、夜まで隠せることになっただけよしとしましょう。

あれ見たら2人も、すっごく怒りそうだしね…。

32 温度差はいつか埋めるつもりです

知り合つと言え、お話をするのがスタートラインでしょう。

というところで、そのまま客間でだらだらと会話を始めたわたしたち、初っ端から躓きました。

「ミヤは僕たちのどこが好き？」

何気なく、本当に何気なくメトロスさんは聞いたんだと思う。これから結婚する相手にする質問としては最も妥当で、害のない質問だから。

でも、わたしにとってこれは鬼門な問いかけなのです。食べかけのクッキーを噛み損ね、舌先を噛んじゃうくらいには。

「え、あの、その……」

血の味が広がりました口内のことより、どう答えたらいいのか必死に頭を巡らせるんですが、その時間が長引けば長引くほど、メトロスさんの機嫌が目に見えて悪くなっていくわけで。

「答えられないの？」

「え、その……あの、顔？顔が好きです、よ？」

迫力に負けて、1番無難な返答をしてみました。だって、美人はみんな好きでしょう？

なのに、上目づかいで窺ったメトロスさんはあからさまに不機嫌だと眉を顰め、隣でサンフォルさんまで苦虫をかみつぶしたような顔をしている。

何気に地雷、踏みました？

背中を流れる冷や汗に、何かフオローをと考えても都合よくは出てこない。むしろパニックで頭は真っ白。

そこに追い打ちをかけて、サンフォルさんから質問がもう一つ。

「では、アゼルニクスやベリスバドンのどこが好きなんだ」

じつと見られていても、これなら答えられます。なにしろ一月、一緒にいたんですよ。

「優しいところですよ。意地悪しないと感情が食べられないから、時と場合によつては痛かったり辛かったりしますけど、それ以外の時間は2人ともとっても優しいんです。お仕事の合間に顔を見に寄ってくれたり、小さな花束をお土産にくれたり、わたしが1日何をしていたかなんて大して面白くもない話を真剣に聞いてくれたり、大事にされてるなって実感させてくれるところが好きです」

些細なことの積み重ねだと言われれば、それまでなのだろうけれど、わたしが彼等の好意を抱き始めるにはそれで充分だった。少々手順と順番がぐちゃぐちゃになっている節はあるけれど、じっくりゆっくり、好きが増えていく。確実に昨日より、今日の方が2人を好きだと言える。

今は、そんな関係だ。

「…ふーん。あいつらも気の毒に。それじゃあ、報われないよね」
けれどしみじみ幸せをかみしめていたところに、そんな爆弾を落としたのは、少しだけ機嫌が上向いたらしいメトロスさん。

意味が分からず視線でその先を促すと、にやりと人の悪い笑みを浮かべて続ける。

「僕たちはこれと決めた伴侶に、心も体も奪われる。じっくりとお互いを愛していく場合もあるけれど、大抵は一目で相手を見定めるんだ。とても不思議な感覚で、うまく表現できないけれど、これは本能に近い。愛しくて、離したくなくて、閉じ込めてしまいたい。狂気じみた独占欲を互いにぶつけあって番つかいになり、添い遂げる。僕たちがミヤに対して持つこの感情を、奴らも持っているんだ。なのに、君の感情はとても稚拙で、子供が親を好きな程度、友人より多少はまじって代物だ。身を焦がすほどミヤを愛している2人とつ

て、これほどの苦痛はないだろうさ」

感情の温度差。

わざわざ説明してもらおうと明確になるそれは、こここのところ自分でも感じていただけに、言葉に詰まってしまふ。

彼等が注いでくれるのと同等の愛を、わたしは返すことができない。もちろん嫌いなわけではないけれど、なんとなく流されてここまで来てしまったというのは、偽らざる事実としてあって、その延長線上の結婚が深い愛に溢れているかときかれれば、答えは否だ。

もちろん、同じことは目の前の2人にだって言える。

じっと私の反応をうかがっている彼等に真実を見通されるのが苦痛で、ふと視線を逸らせばサンフォルさんがため息交じりに笑った。

「メトロスが言ったことなど、気にすることはない。あれは、貴女の気持ちが自分に向いていると言い切れない苛立ちをぶつけただけの、幼稚な行為だ。人間がそう簡単に1人を決められないというのは、前回の記録にもある。感情面で獣人たちに近いというのは本能だから、理屈でどうこうできるものではないだろう」

「すいません…」

なんとなく、謝る。ずっと1人の人だけを好きでいる天使や悪魔に比べて、多情で不誠実だと遠まわしに言われた気がして、申し訳なくなってきたのだ。

確かに、人間はよく浮気する生き物だしなあ。男女関係なく、心変わりすることがよくあるんだよねえ。

正面の2人をちらちら見やりながら、自分の旦那さんはほかにもいるんだと隣家に想いを飛ばすわたしは、十分すぎるくらいに人間だ。悲しくなっちゃんくらい、彼等には似合わない。

「あの…子供は産みますから、メトロスさんとサンフォルさんは本

当の奥さん、持った方がいいと思いますよ？」

言いながら思い出していたのは、数日前に見た傲慢で気の毒な悪魔だった。あの人が求めたのはわたしの人間っていう特性だけ。

アゼルさんやベリスさんは何度も愛している、そばにいてほしいと言ってくれたので、きつと伴侶としてわたしを認めてくれていたんだと思う。

でも、メトロスさんとサンフォルさんは？もともと同じ双子ということもあり、悪魔の彼等に並々ならぬ対抗心を持っていたから、人間との子供という貴重な存在をあちらにだけ取られるのは我慢が出来なかった、だからわたしと結婚したいと言った。

常識的に考えてこのルートが正解な気がして、俯けた顔から視線だけを2人に送っていたのだけれど、それに返されたのは殺気を含んだ声だった。

「どつという意味？」

低い、少しふざけたところのあるメトロスさんには似つかない声に、肩が反射的に跳ねた。

「ミヤは我々が貴女を利用しようとしている、そう思っているのか？ぶつきらばうな口調とは反対に、お兄さんのように優しく面倒見のいいサンフォルさんが本気で怒っている。」

彼らの全身から立ち上る怒気に、どうしていいのかわからず下唇を噛んでいると素早くテーブルを回り込んだメトロスさんがわたしの正面にしゃがみ込んだ。

深い、海の色にも見える群青がひたところを見つめる。

「ほぼ一目ぼれで伴侶を決めるっていったらどう？僕はあいつらの屋敷で君を見た瞬間、自分のものにするって決めた」

偽りのない告白は、ゆっくり胸に沁みる。

「私も同じだ。初対面での印象は良くなかっただろうが、あれは奴らに貴女を独占されまいと、この手に貴女を抱きたいという、強い

願望の表れだったんだ」

向かいのソファで、サンフォルさんも同じ目をしてわたしを見ていた。

こんな風に思われるほど、わたしは彼等を愛していない。

自分の気持ちがわかるほど、居たたまれなくなって黙っていることができなくて。

「わたしは、お2人ほど強い思いがあるわけじゃないです。まだまだ小さな芽が胸の中にあるだけで、それでも、こんなわたしでいいんですか？」

問えば、メトロスさんもサンフォルさんも微笑んで頷いている。

「いいよ。いつか愛しているっていわせるから」

「かまわない。それでも貴女が傍にあってくれるなら」

ジンと胸が熱くなったのは、申し訳なさからか、恋がつぼみを付けたからか。

わからないけれど、無性に嬉しくてなぜだか泣けてきた。

閑話 魔女と悪魔の密約（前書き）

内容的に不快感を抱く方もいるかも知れません。最後の数行は間接表現ですがあれな感じですよ。

そんなわけで、読み飛ばしても全く害のない話なので、悪魔双子や魔女の間にあつたやりとりなど読まずにいける方はとばして下さい。

閑話 魔女と悪魔の密約

また、若い娘を壊してしまった。

狂った、もう決して長く生きることができない彼女を、最後に家族の元に送り届けたアゼルニクスとベリスバドンは、深い深い溜息をつく。

言葉を交わさなくとも互いの考えていることがわかる彼等は、同じ悲しみと虚しさを抱いて、窓から流れるぼんやりと眺めていた。

悪魔は、他種族の女達から負の感情を喰らうことで生きている。

それは老婆であろうが若い娘であろうが、どちらでも構わないのだが『エサ』を傷つけることをよしとしない彼等は、できる限り自分たちと年の近い娘が好ましかった。

老婆からマイナスの感情を搾り取るうとすれば、肉体を傷つけるか精神を追い詰めるしか方法がない。けれど若い娘であれば、酷く抱きそこから溢れる感情を啜った後、優しく快樂を与えてやることができる。

当然『エサ』としての持ちも後者の方がいい。老婆や死期の近い女は買って1年もしないうちに壊れてしまうが、若ければ扱い方1つで10年近く使い続けることができるのだ。

なにより、別れの辛さ、壊した瞬間に味わう罪悪感はできるだけ感じたくないものだから、2人は長く同じ女という。情が移るほど長く、長く。そんな悪魔や天使は隣人で同じ双子である天使しか知らないが、ともかく今回も予想通り重苦しい感情が彼等の内を満たしていた。

「人間がいれば…こんな想いはしなくていいのだろうな…」

魔力車は未だ獣人達の住む街を抜けられず、雑多な景色をベリス

バドンの瞳に写す。その中に女の姿を見つけれられない現実が尚彼の心を痛ませ、そんなおとぎ話を口の端に上げさせた。

「そうですね。例え夢物語だと笑われようと、私も人間に会いたい」
200年前、彼の国に現れたという異界の娘は、見た目は凡庸でも輝く魂を持っていて、伴侶とした悪魔や天使の腹を生涯満たし続けたという。

壊れも腐りもしない、不思議な女。彼女がいれば、自分たちはこの空虚感から解放される。

今2人が、喉から手が出るほど欲しいと思っている存在だ。愛せなくとも手元に置き、一族の、ひいては他種族の救いとなる子を成せる娘。

人間がこの世に再び現れることは、あるのだろうか？

僅かな希望でもあるのなら縋りたい。そんな想いを彼等は、深い深い吐息に乗せる。

その時、前方に柔らかに輝く魂を見つけた。淡く輝き、甘く誘う。悪魔を引きつける魂。

互いに気付いたことを確認しようと視線を合わせた瞬間、魔力車の外から盛大な水音と小さな悲鳴が聞こえた。

車越してもはつきりとわかる芳香を上げる魂に、慌てて御者を止め。

逸る気持ちを抑え、ゆっくりとドアを開けるとそちらを振り返った2人は、大きな帽子を目深にかぶり籠を下げた子供の姿に、少々落胆する。

魅力的な魂の持ち主であるのに、ああ小さくでは閨に引き込むこともできない。

それでも数年後、屋敷に来て欲しいと頼んでみる価値はがあると、蜜に誘われる虫のように彼女の前まで歩みよった悪魔達は、濡れ鼠にしてしまったことをまず謝罪した。汚れを全て拭うことはできな

いが、せめてとハンカチを取り出すと、少女が自分たちを呆気にとられたように見上げていることに気付く。

大きな帽子に隠しきれなかったらしい面は、想像通り幼く凡庸であった。焦げ茶色の瞳に獣人特有の特徴がないところを見ると、狼や熊、犬などの種族だろうか。

そんなことを考えている内に、ハンカチに注意を移した彼女は顔を顰め、お気になさらずと宣言すると小さく呪文を唱える。少々変則的な響きを宿すそれは、元は浄化の呪文だった気がしてアゼルニクスとベリスバトンは瞬時に視線を交わした。

既存の呪文に変化を加える術すべを知る娘であれば、将来は魔女候補であろう。彼女自身が女を喚ぶことはできなくとも、魔法陣を支える基礎となることは可能かも知れない。となれば『エサ』にすることは難しい。

なにしろ異界から女を招くことは自分たちの食料を確保する上でも重要なこと、王が魔術師を無条件で保護すると決めている以上、この美しい魂を啜ることはできないのだ。

だから2人は気取られないように、少女の素性を聞き出す為の問いかけをする。

『えらいですね、小さいのに魔女なんて』

『本当に、まだ子供なのに』

アゼルニクスの言葉にベリスバドンも乗った。ここで彼女が嬉しそうに微笑めば、諦めなくてはならない。だが、聞きかじりの呪文を改造してみただけで、まだ魔女として才を覚醒していないのであれば、両親に頼んで貰い受けることもできるだろう。

そんな打算的な質問に、少女が返したのは盛大な溜息と、イヤそうな声だった。

『小さいけど、小さくないんで。もう17歳と半分ちよいを数えま

した。既に18に近い年齢です』

反応したのはアゼルニクスが先だった。

小柄な女性もいるにはいるが、子供ほどの大きさしかない娘が成人だというのなら、何かの病であるかもう1つの可能性しかないのだ。

美しい魂と、小さな体。もし、もし彼女がそうであれば。

『君、召還されたんですか？』

『君、名前は？』

素早く可能性を問うたアゼルニクスと、もうそうであると決めてしまったベリスバドンでは微妙に質問の内容が違ったが、2人が同じ可能性に行き着いたことだけは確かであろう。

逸る気持ちを抑え、できる限り冷静に待った答えは、果たして期待通りだった。

『はい、召還されました。名前はミヤです』

小さな、外見の美しさを有さない、召還された娘。

もう文献でしか知ることのできない存在が、目の前にいる。しかも今回の召還は半年も前に行われていたはずだ。なぜ魔術師から『人間』が出現したことが報告されていないのだろう。

疑問は腐るほどある。だが、それら全てがどうでもよかった。双子の悪魔にとつて、切望した存在が目の前にいることが全てだったのだから。

『へえ、だからキレイなんですね』

うっとりとして、心が震えた。隣にいる互いの半身も、体中から喜びと愛しさを溢れさせているのがわかる。

彼女に気付かれないようそっと交わした微笑みで歓喜を伝え合った彼等は、同時に自分達が目の前の娘を生涯の伴侶と決めたことも理解する。

理屈抜きの一目惚れだ。

だから心からの褒め言葉を彼女に贈ったというのに、急に怒り出した愛しい人は踵を返して駆け逃げてしまった。

「何故？…何かいけないことを言ったのだろうか」

呆然と後ろ姿を見送るベリスバドンに、アゼルニクスは首を振る。「そうではありませんよ。彼女はきつと、召還されて直ぐに美しくないと邪険にされたんでしょう。確か、初めての人間もそうだったと聞いています。平凡な容姿に何故召還条件が違えられたのか、魔術師達が必死で理由を捜したとありますから。なのに私達が『キレイだ』と褒めたので、あの反応です」

「成る程…魂が美しいと言われたとは、思わなかったのか。だが姿も充分愛らしかったじゃないか」

首を傾げた片割れに、違いないと頷いてアゼルニクスは既に違うことを考えていた。

直ぐに戻って今回召還を行った魔術師を調べ、あの娘を手に入れるための手はずを早急に整えようと。

4日後。宣言通りの行動力でアゼルニクスは書類を、ベリスバドンはあちらへこちらへと駆け回って彼女を迎え入れる準備は全て終えた。屋敷も彼等の部屋近くの一室を改装させ、若い娘を迎え入れるに十分な手を尽くしてある。

問題は、事実を隠蔽し人間の娘を自分の弟子にしていた魔女、エイリスだ。

世界に数人しかいない召還魔術師の1人でもある彼女は、ふざけた言動とは違い実に真面目に喚び出された女達のアフターケアをしている数少ない存在である。その彼女に、今後悪魔と天使にいいように人生を操られ、子孫を残すためだけに使われるであろう貴重な『人間』を渡せと、命じなければならぬ。

揉めるだろう。しかし、先の間人もそうであったように、自分達

に彼女を縛る権利はなく、彼女には他の女性達より余程強力な選択権があるのだと知れば許してくれるかもしれない。

手駒を揃えた悪魔達は再び下町を抜け、二階建ての、いかにもといった風情を醸す魔女の家を訪ねた。

「……………イヤな予感を感じていたのよね。あの子が酷く怒って、言いつけを守らずに帰ってきた日から。全く、なんだって貴方達は、自分達の利益になる物を探し出すのが上手いのかしら」

出迎えるなり2人を見てそういったエイリスは、本気で悔しそうな顔をした。

この半年、慎重に隠してきた娘だったのだろう。なにしろ調べたところによると、外出時には必ずつば広の帽子を被らせて獣人の特徴がよく現れる頭部を隠させ、衣服も目立たない地味な色の物ばかりを着せていたようだ。周囲には魔女候補の娘を預かっていると聞いて、子供でも女の子であれば青田買いをしようとする連中の牽制までしてある。

そのまま彼女が魔術を覚え立派な魔女になれば、悪魔や天使といえどおいそれと手出しはできなくなっただろう。なにしろ女性を喚ぶ重要な術士だ。例え人間といえどその役目を兼任するのなら、誰を夫にし、どんな人生を選ぶのか、全ての決定権は本人次第となる。けれど人間がただの人間に過ぎなければ、全権が1度、悪魔か天使に委ねられることになっていた。エイリスはこの裏道を利用して、彼女に自由を与えたかったのだろう。

「全ては偶然です。けれど、勘違いはしないで頂きたい。私達は彼女を伴侶と決めました。都合の良い『エサ』としてでも、『繁殖用の雌』としてでもない、大切な一生の相手です。決して無碍に扱ったりは致しません」

アゼルニクスの真剣な宣言に頷いて、ベリスバドンも口を開く。

「1度我々と結婚すれば、彼女には自由な権利が与えられる。天使

の夫を選ぶことも、獣人の伴侶を持つことも、そのどれもせず静かに暮らすことも、全て自由だ。もちろん貴女に会いにここに来ることもできる」

「悪魔は伴侶を独占する。いくら一族の中で掟を決めていると言っても、妻にしたあの子を本当に好きにさせてやることができる？」
彼等の習性を知る獣人からすれば、2人の言葉など決して信じられる物ではないだろう。

だが、200年前に彼等は学んでいるのだ。人間がキレイな魂であり続けるためには、翼を折ってはならないと。

「ええ勿論。なんなら『魔女の刑罰』を受けても構いません」

「今後彼女を妻とする、他の悪魔や天使にもその義務を課しても問題は無い」

即座に言い切った彼等に、エイリスはしばし思案し、結局扉を開いた。

当然『魔女の刑罰』を受けることが、条件ではあったが。

「じゃあ約束破ると、アゼルさんもベリスさんも死んじゃうかも知れないんですか？」

濃密な時間を過ごした後、今晚は少し余裕が残っていたらしいミヤがアゼルニクスとベリスバドン、2人共が首につけている同じ刻印を不思議がったのがことの始まりだった。

まだそう遠くない過去の一幕を思い出しながら、ベリスバドンは右首にある爪ほどの大きさの印を指でなぞりながら、頷く。

「はい。そういう呪いまじななのです。程度によっては、命までは取られないかも知れませんがね」

魔女は言った。ミヤが不幸でないのなら、どれほど彼等が彼女を束縛しようが、この呪いは発動しないと。ただ悪魔の習性がミヤを苦しめた時、同じだけの呪いの呪いが返ると。

基本的に『魔女の刑罰』は制約違反した者の罪の重さ分だけ、肉

体が傷つけられる呪いだ。そういう意味では、ありえないが彼等が浮気した場合にも発動するということになる。

「なんか、いやです。2人がそんなのくつつけてるなんて。エイリスとかならとれたりしないんですか？」

薄闇の中、顔を顰めて黒い花の刻印に触れてくるミヤは、頼もつと言っている相手がこれをつけたことを知らない。もちろん双子達もそれを教えるつもりはないから、ありがとうと微笑んだ。

「いいのです。これは、つけておかなければならないんです。それに約束を破らない自信が私達にはありますから、心配は無用ですよ」
自分達を心配してくれている嬉しさに頬を緩めながら、アゼルニクスはそつとミヤの髪を梳いた。

手放したくない。誰の目にも触れさせたくない。

彼女が妻になってから、彼等の本能は膨れる一方だ。けれど、無理矢理それを押さえ込まなければ、ミヤはミヤでいられなくなってしまう。

だからこれで丁度いいのだと、2人は微笑んでいた。

「さ、もう休みましょう。起きられなくなりますよ」

「そうそう、ほらちゃんと暖かくして」

「はい」

両側から柔らかく小さな妻を抱きしめて、視線を交わした彼等は明日話そうと決めた。

近くミヤの夫となることを望んでいる双子の天使に、『魔女の刑罰』を受ける覚悟はあるかと。きつと躊躇わずに頷くだろうことは、想像に難くないが。

キレイな魂に捕らわれた男は、甘んじて極上の呪いを受けなければならぬ。

今後ミヤは抱かれる男の腕の中で、いつでも同じ黒い花を見つけるだろう。

細く差し込む月光に照らされた刻印を。

閑話 魔女と悪魔の密約（後書き）

いらぬような補足

基本的にベリスは通常口調が違います。ミヤに接する時だけ丁寧なのは故意にアゼルと合わせているからです。彼女に双子を別の男と認識して欲しくない、彼等の意図がその辺に出ています。

なんとなくそうだろうと考えられている通り、エイリスは良い羊…いえ、良い魔女です。

そのうち閑話で200年前のお嬢さんのお話を書いたら良いなとか考えてます。ネタは…あるような、ないようなです。時々投下する閑話ではこうした裏ネタをばらしていけたら良いなあと思ってます。余談ですが、たまにお話がシリアスチックになるのは、いきなり出てくる連中がみんなミヤを好きじゃおかしいだろう！…っていう矛盾を解消したい欲求が私の中にあるからで、何事にも理由をつけなければ納得できないいうざつたい性格のせいです。そんなもんどうでもいい、とにかくラブラブが好き！って方は、くどくなった時点で読み飛ばしていただけるとありがたいです。

っていうか、すでにここに書いてることがうざつたい。すいませんでした。

次話からちょっとだけ、シリアス傾向になる、予定です。

33 モラルは突然帰還する

それからメトロスさんとサンフォルさんと過ごす時間はほのぼのと幸せで、お互い知らなかったことを話しながらお茶を飲んでいただけれど、そこに控えめなノックが響く。

「入れ」

誰も通すな、しばらく構うなと言いついて客間に籠もったのに、有能な執事がそれ破ったことを不審に思ったのか、サンフォルさんの声には不快ではなく不審が浮かんでいる。隣のメトロスさんも同様で、一瞬で表情を引き締めた。

「失礼致します。城よりオフィエール様とセフィーラ様がお越しになり、どうしてもご主人様方にお会いになると…」

「メトロス！」

「サンフォル！」

扉を薄く開き、静かに用件だけを伝えようとしたリワンさんの試みは、全く徒労に終わった。なにしろ彼を押しつけて、2人の女性が室内に押し入ってきたのだ。

憐れ、有能執事さんは数歩踏鞴を踏んで、なんとか無様に転ぶことは免れていましたが、乱れた髪とちらりとお顔に見えた疲労は隠せませんでした。きつと主の命を守ろうとなんとか踏ん張っていたのに、押し切られたんでしょう。お疲れ様です。

苦労性なんだろうなあと、そんなリワンさんをわたしが心配している間に、ずかずか室内を横切った女性は向かいのメトロスさんとサンフォルさんの隣にぎゅむつと体を押し込んで座ってしまいました。

何事？

訳がわからず呆気にとられている先にいるのは、清流のような水色の髪を優雅に結び上げた空色の瞳の美人と、新緑の髪を腰まで垂

らした焦げ茶の瞳の美少女だ。彼女達はそれぞれ、メトロスさんとサンフォルさんの腕に絡みついて、なんとも複雑な表情をしている2人を見上げている。

「酷いですわ。わざわざ人間などのために、わたくしとの婚約を反故にする必要はありませんでしょう？」

「大あります。僕は妻は1人と決めていきますから」

水色美人の抗議を一刀両断したメトロスさんは、普段よりいささかかしこまった口調ですが言動がストレートすぎでした。

「わたくしをお嫁さんにしてくれると、約束して下さったじゃありませんか。なぜ人間のためにそれを破るの？」

「約束はしてません。いつか、貴女に見合うお相手がいなければ考えると申っただけです。残念ながら、私の方が先に生涯の伴侶を見つけてしまいました」

新緑美少女が瞳を潤ませているのに、サンフォルさんの言いようはあまりに容赦がなさ過ぎでした。

故にお2人の怒りの矛先は当然、正面の人間に向くわけで。

「『エサ』をわざわざ妻にする必要は、ないでしょう？」

ちよつとです。ちよつとですが、ぐっさり刺さりました。自分でもさつき同じようなことを言っつて、彼等に天使の奥さんを持つことを薦めたような気がするんですけど、いざ現実を突きつけられると想像以上に堪えます。

…これが既に婚姻関係を結んでいる、アゼルさんとベリスさんに起こったとしたら……軽く家出くらいしちゃうかも。もしくは怒って嫉妬して、部屋から出てこなくなるとか。

どっちにしても、正式に結婚したわけじゃないメトロスさんとサンフォルさんに起こった出来事でよかつたと、本気で考えてるわたくしって、彼等に対してまだまだ愛情が不足している気がする。

美人と美少女に睨まれながら、暢気に反省をしていたわたしは、更に値踏みする視線に晒されもとより小柄な体（この星のひとにすれば）を縮こまらせる。

「ミヤは『エサ』じゃない。僕たちの妻だ」

「彼女を侮辱するのは、たとえ王の娘であろうと許さない」

ところが薄情なわたしと違って、2人は優しく有言実行だった。彼女達をソファに残して立ちあがるとテーブルを回ってこちらに来て、代わる代わるわたしを宥めてくれる。

「あんな風に言わせる前に止められずに、すまなかった」

「ごめんね。不愉快だったでしょ」

優しい言葉と髪を撫でってくれる仕草と、嬉しいけれど少し戸惑う。だつて気持ちの上でアゼルさん達より下なんだつて、しみじみ実感した後だもの。罪悪感が心を占めるのは仕方ないと思うんだ。

それを見透かしたように、彼女達は辛辣だった。

「既に人間は悪魔を夫としているのでしょうか？今後変異種を生み出すだけなら、何もメトロスが犠牲になることはないわ」

「文献で読んだ人間は伴侶を1人と決められず、言い寄られるがままに何人も夫を持っていたのよ。彼女の夫はまだ増えるのに、サンフォルだけが妻を1人とするのはおかしいんじゃないかしら」

番を見つけたら他の異性には興味を持たないと言った天使と違って、わたしは流されてどんどん結婚相手を増やしている。

どちらの一族も立てなきやいけないと言い訳して、既に2人、これから2人。これは地球にいたら重婚で裁かれる状態なのに、ここではこれが普通なんだと納得してしまっている。

始めの頃、叫んでたくせに。一妻多夫なんて信じられないって。

獣人の中であらともかく、天使や悪魔にはそんな習慣はないと知った時に、パワーバランスなんか考えないでアゼルさんとベリスさ

んだけの奥さんでいればよかった。

これだって変則的な結婚ではあるけれど2人は納得しているし、あちこちに大して好きでもない結婚相手を作るより余程健全だった筈だ。

「あの、わたし隣に帰ります」

急に思い出したモラルにいても立ってもいられなくなって、立ちあがる。

「ミヤ？」

「なにをいつているんだ」

困惑した様子のメトロスさんとサンフォルさんが引き留めようと手を握ってくるけれど、その強くない拘束からわたしはするりと抜け出した。

「貴女には他の天使をご紹介するわ」

「オフィエール様!!」

水色の美女が優しく約束してくれたのを、怒ったメトロスさんの声がかき消す。

「必要ありません」

首を振って断る自分の乾いた声音に、本人が1番びっくりした。

感情がこもっていないなって。なにしろ軽薄な己を軽蔑することに忙しくて、他人の心の内を読んでいる余裕がない。

「リワン、送って差し上げて」

「余計なことを言うな!!」

サンフォルさんが美少女がすぐみ上がるほどの大声を出したけれど、それを諫めることすらできなかった。

ただ急いでソファアを離れ、遠慮がちに近づいてきたリワンさんを促しながらドアへと向かう。

「ミヤ、待って!!」

「帰らないでくれ!!」

「すみません。ちょっと、考えたいことがあるんです」
追いつがる声に振り返ることもできず、逃げるようにわたしは外へ出た。

ここへ来るまで、浮かれて歩いてきたことなんてもう空の彼方だ。人間の性さがについて客観的に言及されると、こつとも自尊心が傷つくのだとは予想外だった。これまでも似たようなことは言われていた気がするけれど、面と向かって切り捨てられると僅かに残った矜持に縋りたくなる。

誰もがふらふら浮気するわけじゃない。きちんと真面目に恋人と付き合い、結婚し、生涯お互いだけを大切にして生きていく夫婦だって沢山いるのだ。わたしはそうできるのだと。

小走りで既に自宅と言える館に帰り着いたわたしは、登城するため馬車に乗り込もうとしていたベリスさんを見つけて腕の中に飛び込む。

「ミヤ？」

不意打ちにもかかわらずすっかり体当たりを受け止めてくれた彼は、馬車から降りてきたアゼルさんと一瞬視線を交わすと、後ろに控えていたカイクさんに城に使いを出すよう命じて、しがみついたままのわたしを抱いて屋敷の中に逆戻りした。

「お茶を飲めば、落ち着きますよ」

下唇を噛んだまま口をきかないわたしの背を優しく叩き、ベリスさんが囁く。

「美味しいお菓子があるんです。ミヤ、甘いものが好きでしょう？」
優しく髪を撫でながら、アゼルさんも微笑んでいた。

そうだ。大事なのはこの人達だけでいい。いつだって無条件で受け入れてくれる、2人だけでいい。

それが普通だ。

我慢していたはずなのに、ぼろりと零れた涙がスイッチだったよ

うで、わたしはベリスさんの胸の中で子供みたいに泣き出した。

33 モラルは突然帰還する（後書き）

ちよつと立ち止まると、自分の現状が見えて不安になる不思議。

34 重要事項は内密にお願いします

子供みたいに大泣きし、やっと泣き止んでも口を開こうとはしないわたしに付き合っつて、アゼルさんとベリスさんはただソファーに座っていてくれた。黙って、時折髪を撫でたり手を握ったりするだけで、決して何があつたか聞こうとはしない。

けれどわたしは話したかつたんだと思う。自分の考えを整理するためにも、現状を理解してこの先のことを考えるためにも、言葉にしていくことを望んでいたの。

だからぼつりぼつりととりとめどなく話す。人間だつてほとんどの場合、悪魔や天使と同じように1人の相手と婚姻を結び、一緒に生活するのが困難だつたり、心変わりしたりしない限り、同じ相手と添い遂げること。『エサ』なんて言われて気分がよくないこと。何もかもが性急に進みすぎて、心がついていけないこと。最近頻繁に人権を無視されることに、本当は耐えられないこと。

なにより、わたしの人生を潰してまで、この星の人達の未来を助けるのなんかごめんだつて、実は思っていること。

「すみません：本当はとても、利己的な人間なんです」

彼等は魂がキレイだと言ってくれたのに、わたしはこんなに俗物で自分勝手だ。

泣いた後の倦怠感のせいで、半分意識が飛んだところに溢れた本音は、酷く薄汚れているように思えた。

だが、2人はゆるゆると首を振る。

「利己的で傲慢なのは、私達の方ですよ。遠い場所からミヤを連れ去り、自分達のいいように利用している。同じ立場であつたなら、私はこんな扱いをする連中を許さないでしょう」

「『エサ』扱いる相手に、貴女がどうして罪悪感を抱かなくては

ならないんです？怒って当然なんです。腹が立つたら攻撃魔法を使っても構わない。そうする権利がミヤにはある」

アゼルさんとベリスさんの肯定は耳に心地よく、心に優しい。

なんだ、怒ってよかつたんだ。あの傲岸不遜な男をやり込めたように、何を言ってもよかつたのか。

惚けた頭で納得すると、急にさっき一方的に失礼な言葉を投げつけられたことにも、腹が立ち始める。

「じゃあ水色の美女や緑の美少女にも、言い返してよかつたんだ」

『エサ』だの人間如きだの、かなり酷い台詞で好き勝手に罵倒してくれたけど、考えれば酷く理不尽だと憤慨していたら、左右でアゼルさんとベリスさんが眉を跳ね上げた。

「水色の女：いえ、女性といえばオフィエール様ですか？」

「緑のバカ：いや、少女といえばセフィーラ様ですか？」

「う？…えつと、多分そんな名前、だつたかなあ…？」

急激に温度と機嫌を降下させた旦那様方に、だるさが飛んで一気に意識が覚醒する。

なんで、わたしより2人の方が怒っているんでしょう？意味不明ですけど、これじゃあこっちの怒りを維持するのが難しくなっちゃつた気がしますよ？

何かあつたんだらうかと、さり気なくその辺を聞いてみると、2人は絶対零度の微笑みで彼女達の素性を簡潔かつ冷淡に説明してくれた。

「オフィエール様は現王の長女です。お母上が天使至上主義のいけ好かない女：失礼、女性なもので侍女達も右へ倣えでしてね。悪魔は天使より劣っている、他の種族は自分達のためだけに生かしてやっている、人間の卑しい血を受けたハイジエントの天使や悪魔は、既に同族ではないと教育された憐れな方です。ただ成人して自分で見聞きできるようになつてもその考え方が変えられないのは、愚の

骨頂ですが」

辛辣すぎて、少しだけオフィエール様に同情したくなる説明なのは何故でしょう。

「セフィーラ様は現王の次女です。生まれと育ちは姉上と同じで最低最悪：失礼、お気の毒な方ですが、未だ成人していないのを良いことに、自分を美しく見せること、有望な夫を選ぶことにしか関心のない典型的な貴族令嬢です。おつむが弱いのは生まれつきです。で、責められません」

年端もいかないお嬢さんにその言い様、さすがにセフィーラ様が可愛そうなんですけど。

なんだか微妙な気分になってきたわたしを余所に、お2人は笑っているのに笑っていません。

「そういえば姉妹揃ってメトロスとサンフォルに纏わり付いていましたが、もしや屋敷にまで押しかけましたか？」

「ミヤの様子を見る限り、その上で貴女を侮辱した気がしますがいかがです？」

勘が良いのか、彼女達の普段の行いが悪いのか。何を話したわけでもないのにすっかり状況を把握してしまった彼等は、ふふふと背筋が寒くなるような笑い声を上げて隣家に何やら呪いを送っている模様です。

「メトロス…ですからはつきり、お前は伴侶にはなり得ないと断りなさいと忠告していたのに、面倒だと放置するからミヤが傷つく羽目に陥るのです。相応の報復は覚悟しなさいね」

「安易にいい顔するんじゃないと注意してやったのに、サンフォルめ。我が儘な上に頭の軽い娘が遠回しの拒絶など理解できるものか。おかげでミヤが泣いた責任は、とってもらうからな」

口を挟める雰囲気じゃないので、呪詛を黙って聞いているしかなかったんだけど、言葉の端々からアゼルさんとベリスさんが彼女達

を好きじゃないということだけは理解できた。

悪魔より天使が勝ってるって思われたら、いい気はしないよね。なにしろ同等の力を持つ一族だって、どちらも認めているから王様は交代で出してるんだし。

それに人間の血が入ったら天使じゃないって…その方が能力が上がるし自給自足できるんだから、いいんじゃないのかな？だからこそ貴重な人間を独り占めしないルールが決められたんだよね？

代わりに怒ってくれる人がいる分、冷静になったわたしは彼女達の言動の根本がどこにあるのか、なんとなくわかって溜息をつく。

お母さんですね。そして彼女を支持する周りの人。

日本が嘗て軍事教育で現人神を至上の存在と教えたように、お隣の閉鎖的な国で今現在も最高指導者は空から降ってきた神だと教育しているように、幼児教育は人間を洗脳する。そしてそれは一朝一夕に目が覚めるものではない。なにせ前例が山ほどあるんだから、間違いないだろう。

そうになると、一概にあの言動を非難できない気もするんだよね。今も王宮なんて閉鎖的な空間で生活してるんじゃない、本当の世界を知る機会も少ないだろうし。

という具合に、むしろ同情してしまつたわたしは、アゼルさんとベリスさんを宥めにかかつたんですが2人はその辺を汲んでくれるつもりは爪の先ほどでもないようです。崩れることのない作り物の笑顔を貼り付けたまま、アゼルさんは相変わらず彼女達を非難しましたから。

「王宮には悪魔も沢山いるんですよ。かくいう私もメトロスという機会が多いので何度かお会いしたことがあります、自分より年上で要職に就いている悪魔に挨拶もせず敬意も払わない場面を何度か見ております。以前にもお話ししましたが、王の娘もただの貴族令嬢に過ぎません。そのような行動を繰り返せば悪魔のみならず天使

からも非難され、その矛先は現王にも向いているんですがね、さすがあの親にしてあの娘ありで少しも改善が見られない。おかげで我が国では近々代替わりの儀を行わざる得なくなってしまうたんです」
「淡々といっていますけど、それ…」

「国王をやめろってこと、ですか？」

「はい。議会の承認は先日通りました」

笑ってということじゃないと思います！自国の王様がリコールされるっていうのに、なんでそんな余裕なんですか！！

わたしの内心パニックを察したベリスさんが、大したことじゃないと請け合おうので余計に混乱しました。普通、大問題だと思いますけど？！

「よくあるんです。愚王を立ててしまつて早々に代替わりとか、数年王位に就いていたら国政を混乱させるようになったので代替わりってというのが。種族的には決して友好的とは言えない悪魔と天使ですが、政と地位・名誉に関しては対等だと考えている者達がほとんどです。現王やその伴侶は一部の少数派で、それでも公正な施政を行っている内はまだよかつたんですが、最近では要職に天使だけを起用すべきだなどと腐れたことをほざき始めたのであっさりと解任は決まりましたよ」

……… なんだか普段ベリスさんの口からはあまり出ない乱雑な表現が、随所にちりばめられた説明だったように思いますが、気のせい입니다。うん、きつと気のせい입니다。

無理矢理自分を納得させて、話の流れでとんでもないお国事情を知ってしまったわたしは、当初の混乱と怒りをしばし忘れていたのだった。

34 重要事項は内密にお願いします(後書き)

悪魔ツインズの反撃？

35 過去の教訓がわたしを守ってくれています（前書き）

ともかく説明文が多いです。文字が詰まっています。辛くなったら適当に斜め読みで、話の筋だけ拾って下さい。

お手数をおかけします…。

35 過去の教訓がわたしを守ってくれています

「さて、もう失脚が決まっている方々が放った暴言について、なんですか」

ひとしきりお嬢様達をこき下ろしてすっきりしたのか、混じりつけない本物の笑顔を浮かべたアゼルさんは、落ち着きを取り戻したわたしに温くなってしまったお茶を勧めながら、1つ昔話を聞いて下さいと語り始めた。

それは、200年前のこと。

繁殖用に雌を定期的に召還していたこの星に、奇妙な娘が喚び出された。

外見の美しさ、体の丈夫さを条件に女を喚んだ筈なのに、獣相もなく子供ほどに小さい彼女は一見するとなんの価値もない。焦げ茶の髪も平凡で青い瞳もありふれている。体つきも痩せて貧相、顔立ちもぱつとしない、となれば引き取り手などいるはずもなく、術に失敗したと魔術師が責めを負わねばならない話になった。

ところがそこで彼は言ったのだ。

『この娘の魂は、喚び出されたどの女よりも美しい。子を成すことはできずとも、天使族や悪魔族の腹を満たすことはできましよう』と。しかし素性も知れない彼女を受け入れようなどという、心の広い者はそうそういない。時の天使王は困り果てていたのだが、彼の息子は違った。

『父上、彼の娘を私に頂くことはできませんか？』

誰に、否やのあろう筈もない。

かくして王の長子に引き取られた娘は、何故か『エサ』としてだ

けではなく屋敷で彼の恋人のように扱われるようになった。どうしてそのようなことになったのかは、後年になっても2人は笑うばかりで詳細を語るうとはしなかったから謎のままではあるが、ともかくいつしか番のように過ごした彼等の間に娘が生まれる。

父の金髪と、母の青い瞳を受け継いだ彼女は、何故か天使そのものの性質を持っていた。正の感情を喰らわねば生きることの叶わない不思議な存在。

異種族間結婚で生まれた娘など、一族に加える気のなかった天使達は驚いた。当然スラムに追いやられるはずの存在が、自分達と同じだということに。

だが、長じれば変異するかも知れない。

両親は薄氷を踏む思いで愛し子を育み…奇跡は起こる。世話をしていた乳母が、娘の発する甘やかな感情に欲求を抑えきれず、ひと舐めしてしまったのだ。

途端に満たされる食欲に呆然とした。天使や悪魔は『エサ』となる感情を生み出すことはできないはずなのに、人の血の入った娘は平然と他人に感情を提供したのだ。

そして、その母も。天使に感情を食われ始めてとうに10年は越そうというのに、一向に心が腐らない。喚ばれた当初と変わりなく健やかに日々を過ごしている。

人間は奇跡だと、誰が言ったのだろう。

娘を殺された弱き種族か？壊れゆく『エサ』に心を痛めた天使や悪魔か？

どちらにせよ、唯一無二の存在に人々は群がる。彼女を救ったのはただ1人の男であったはずなのに、手のひらを返した亡者共が、利益を欲しがり抵抗する術を持たない彼女を翻弄する。

嘆き疲弊する妻が壊れるのではないかと、危惧したのは夫だった。けれどこのままでは騒ぎが収まらないと、知っていたのも夫だった。

た。

嫌がる妻を説得し、父王の助けを借り、他にも夫を作り、子を成すことを条件に煩わしい老人達を黙らせた。

かくして選ばれたのは、彼の友人で妻を蔑ろにすることなく対等に扱ってくれた3人の天使と、ライバルで誠実だった1人の悪魔。人間の娘は己の倫理観を押さえ込んでこの理不尽な要求を飲んだのだが、最終的には優しい5人の夫と幸せに暮らしたのだという。ただ1つだけ、後世のために天使と悪魔に掟を作らせることだけは忘れなかった。

自分と同じ思いをする娘が出ることはないよう、数少ない人間の血を継いだ者が不当に扱われることのないよう、死ぬまで願っていたという。

「ですから、ミヤがあ的女性達の言葉に心を痛める必要は、ないんです」

長い物語を話し終えたアゼルさんに続いて、ベリスさんが微笑む。わたしはその顔をぼんやり見上げながら、始めの人間が味わった葛藤に心をはせていた。

容姿から、彼女は東洋人ではなく西洋人だった気がする。だとすれば200年前：ちょうど江戸末期辺りの人だったんだろう。キリスト教徒なら、重婚とか一妻多夫なんて受け容れがたい現実だったに違いない。

信教を持つ人の少ない日本でだって普通感覚としてそういうのダメなのに、神様に禁じられてるんじゃない苦痛以外何ものでもなかったらう。

でも彼女は、自分を助けてくれた旦那様のため、この世界での理のため、全てを享受した。時間はかかったらうけれど、日本風に言うのなら郷に入ったら郷に従え、だ。

「偉かったですね…その旦那さんと、人間さんは」
何事も先駆者というのは苦勞するものだ。

わたしが最初に浴びた侮蔑や誹りを、彼女はずっと受け続けた。どれほど時間がかかったのかはわからないが、救いの手が延べられるまで長い時間を一人で耐えた。その上、愛する夫に重婚してくれると頼み込まれ、5人も父親の違う子供を産んで。

絵本のように表面をなぞるだけの語りでは彼女の心情まではわからないけれど、最後：死の間際に幸せだったと思えるまで、どれほどの時を過ごしたのか。流されるまま、大きく躓くまでこの重要さに気付けなかったわたしとは、悩んだ時間も違っただろう。

けれど、1つだけ彼女と同じでありたいと思うのだ。

「その人にとつて、旦那さんは心の底から愛した、ただ1人の人だったんでしょね」

すっかり冷たくなってしまったお茶を飲みながら、呟く。

伴侶を独占したい本能を持つ悪魔。けれどアゼルさんとベリスさんはわたしが他にも夫を持つことを許した。

少し、考えなかったわけじゃない。好きだって言いながら他の人と伴侶を共有できるのは、その気持ちと同族の女性に抱くものより軽いからじゃないかって。

だから心のどこかで仕方がないと納得したのだ。じつくりと愛を育む時間なんかない。子供はこの世界に必要で救世主となる存在、悪魔だけじゃなく天使の子供も産まなくちゃ、バランスが崩れるって。

でも、もし。

見上げればいつでもわたしに微笑んでいる彼等が、少しだけ笑み

を曇らせていた。それは悲しげで、諦めを含んでいて。

ならば、望みは叶うのかも知れない。希望が芽生える。

「わたし…メトロスさんとサンフォルさんが彼女たちに触れられているのを見て、これがアゼルさんやベリスさんだったら絶対許さないって思ったんですよ？自分から2人と結婚するって宣言しておきながら、そんな光景を見せられて考えていたのはそんなことなんです。その前には子供は産みますから、奥さんは他に持って下さいって言っちゃいましたし」

さつきは白状しなかった心の中ややとりまで口にする、一瞬目を見開いた2人は直ぐに破顔した。

「私達には、嫉妬して下さいませんか？」

「します。家出するか、口もきかないで部屋に籠もるって考えたくらいですもん」

本当に嬉しそうに聞いてきたアゼルさんは、わたしの答えに更に喜んで頬にキスをくれる。

「私達には、他に妻を持つようにと薦めたりはしなかったじゃないですか」

「当たり前です。そんなことしたら、離婚しますから」

冷たく返したつもりだったのに、やっぱりこれまで見たこともないくらい上機嫌になったベリスさんも、反対側の頬にキスをくれた。

ああちゃんと愛されてる。伴侶として認められている。

これまで言葉を尽くされても信じられなかった愛情が、すんと胸に落ちた。安心して良いんだと、やっと気を抜くことができるんだと、安堵が広がる。

初めて召還された人間の女性が手に入れたのと同じものは、ずっと前からここにあった。切望しなくてもちゃんと、差し出されていたのだ。

「…1つ、我が儘を来てくれますか？」

ならば無理を承知で願ってみようと、上目遣いに2人の表情を探る。

「はい」

「いいですよ」

まだまだ上機嫌を保ったままの旦那様達は、なんでも聞いてくれそうな勢いで頷いた。

「わたし…本当は他の人と結婚なんてしたくないです。そりゃあずっとは無理だつてわかってますけど、まだ3人でいたい。せめてわたし達の子供が産まれるまで…ダメ、ですか？」

王様も知っているって言うってた、メトロスさんとサンフォルさんとの結婚。

だけど肝心の王様が替わっちゃうなら、その辺りうやむやにしたりはできないんだろうか。多少の権利が認められているらしい人間だし、1、2年、夫は増やさないとを了承してもらえたらいいなあって打算一杯のお願いだったんだけど、無理だろうかと見上げた先で2人は大丈夫ですと力強く頷いている。

「貴女の権利は、自分で思うよりずっと強いんです。確かに子供を1人産んでしまえば天使族の連中が騒ぎ出してあちらの子供も産まなければならぬでしょうが、その程度の我が儘なら通らない筈なはずです」

「そうです。サンフォルやメトロスがなんと言おうと、ミヤがそれを望むなら奴らにも拒否することはできない。いいじゃないですか、身辺整理の時間が持てて彼等も喜びますよ」

請け合ってもらえて安心した。

ゆっくり物事を進められるなら、わたしだってこの世界に順応できるとも知れない。

「ありがとうございます！」

終始笑顔の2人に抱きついて、なんだかやっと心を落ち着けることができると、わたしは思っていた。

36 人語を解さない人間と話すのは、とっても疲れる作業です

しばらく現状維持と決めて、少し経った頃だった。

遠慮がちなノックと共に、カイルさんが来客を告げる。

「メトロス様とサンフォル様、それにお嬢様がお2人お見えです」

あまりのタイミングの良さに、もしやと2人を見上げると予想通りの返答だ。

「優秀な彼のことです、足止めをしてくれましたでしょう」

「貴女にあんな風に逃げられて、奴らが追ってこないはずがないですからね」

「…ですね」

やっぱり来ちゃったのかって思う反面、来なくてよかったのにと
思う自分が溜息をつかせた。

折角、この先どうするのか決めたところなのだ。できるのならこの
状態のまま、逃げていたかった。

安易に結婚するとか宣言した自分が悪いのは百も承知だけど、ご
めんなさいしてしばらく待って下さいってお願いするのは、かなり
大変なんだろうなって想像に難くないから。

だって、自分が同じ立場なら腹立たしいし、悲しい。付き合っ
て下さいって告白してオッケーの返事貰って、その日のうちにやっぱ
り後2、3年待ってとか言われたら、絶対キレルし泣くもん。

けれど、わたしは同じことを彼等にしなくちゃいけないのだ。そ
れが責任で、逃げたらダメな現実。

更に事の詳細を、一緒に来ているというお嬢様達にも聞かれて、
また色々言われるのかと思うと心が重くなる。

「大丈夫ですか？私達から説明しましょうか？」

再び溜息を零したわたしを、氣遣ってくれるアゼルさんに首を振

った。

「それじゃダメです。きちんと自分で説明します」

「ならばせめてオフィエール様とセフィーラ様には席を外していただきますか？」

「ううん、いて貰って下さい。もしメトロスさんとサンフォルさんがわたしを待てないって思ったら、他の結婚相手を探さなくちゃいけないでしょう？それなら立候補している人達が同席した方がいい気がするのです」

彼女達だつて自分にチャンスが来たことを知りたいはずだからつて真面目に考えたのに、なぜかちよつと不機嫌そうなベリスさんに顔を顰められてしまいました。

「何度説明しても、ミヤには我々の本能が理解できないんですね。伴侶を決めたら他の女性など目に入らないといい加減わかつて下さい」

「それは…そこそこ理解しましたけど、みんながみんな成就する恋愛をするわけじゃないでしょう？」

誰とも好きな人が被らないで両思いなんて、すごすぎる奇跡じゃないかと疑問を呈すると、ベリスさんはやっぱりわかっていないと首を振る。

「決定権は女性にあります。例え百人に求婚されようと、選ばれなければ男は諦めて他の相手を探します。けれどミヤは彼等を伴侶と認めた。こうなれば貴女が死ぬまで、彼等は他の女性を選びませんよ」

当たり前だとも言う口調に、冷や汗が流れました。

今更ですがわたし、とんでもないことを軽々しく約束したんじゃないですか？いともあっさり、他人の一生を縛ってしまった気がしますけど？

顔を引き攣らせて2人を交互に見た後、喉まで出かかった言葉を飲み込む。

つつても言える雰囲気じゃありませんでした。わたしが死ぬ以外で彼等を諦めさせる方法ありませんか？なんて。だって2人と大まじめな顔、してましたから！

「じゃ、じゃあ！なんでお嬢様達は全然諦めてなかったんですか？！結婚を決めちゃった男の人の心を変えることはできないんですよ？人間のわたしならともかく、彼女達はその辺、熟知してるんですよね？！」

「そんなの、貴女が人間ごときだからよ」

掴みかかる勢いでベリスさんに詰め寄っていたのに、返事は背後から女性の声でもたらされる。

まさかと勢いよく振り返ると、申し訳なさそうにしているカイムさんの後ろに、仁王立ちしているお嬢様方と疲労の色を滲ませたメトロスさんとサンフォルさんが見えた。

「押し負けたな、カイム」

「申し訳ございません、アゼルニクス様」

「気にする必要はない。あんなものを押さえきれという方が無理だ」「はい。こつも凶暴：いえ、お強いお嬢様にお目にかかったのは初めての経験でしたので」

なにげに失礼な主従にヒステリーを起こし始めたお二方を、面倒そうに宥める2人の天使はなんとも憐れに見えました。

ちよつと前に別れた時は元氣いっぱいだったのに、どうしたんですかメトロスさん。冴え渡る毒舌が形を潜め、億劫そうに宥める声しか聞こえませんかよ。

あああ、サンフォルさん喋って！実力行使で美少女の口元を押さえるのも結構ですけど、鼻まで押さえちゃってるから彼女、酸欠で顔色が悪いですよ！！

どうしたんです、何が貴方方からそれほど生気を奪ったんですかあ！！

ただオロオロするわたしと違って、左右の悪魔はすこぶる冷静だった。

「メトロス、婉曲表現が理解できるのは、ある程度の知能を有した者だけですよ」

アゼルさん、婉曲に馬鹿にするのはいけません！

「サンフォル、どうせならきっちり息の根を止めておけよ。後々面倒だ」

ベリスさん！！怖いですが、なに犯罪者みたいなこと言ってるんですか！

けれど疲労困憊の天使達も、面倒そうにそれに同意する。

「だろうね。なにしろこの女、僕の話すジジヤ語すら理解できないみたいだから」

”様”がとれちゃってます！この女扱いはまずくないですか？！
「ああ。剣を使うと床が汚れるし、毒でも飲ませるか」

ひいひい！殺人はやーめーてー！！

あんまりな会話に口を挟むこともできず、おそろおそろお嬢様方を窺うと、彼女達は白い頬を紅に染めて眦をつり上げている。

「このつ無礼者！！わたくし達を誰だと思ってるの！！」

水色の美女が叫ぶと、何故か重なるアゼルさんとメトロスさんの声。

「「コーランド伯爵家のお嬢様方でしょう」」

あ、伯爵様だったんだ、今の王様。初めて知る情報をわたしが噛みしめる間もなく、今度はサンフォルさんの腕から逃れた緑の美少女が声を上げる。

「それ以前に、現王が娘よ！お前達悪魔より、偉いのよ！！」

「数日内に元になる。因みに次の王は悪魔だが、その理屈でいくと天使のお前は偉くなくなるな」

ベリスさんとサンフォルさんも気味が悪いくらい息びったりだ。

「見事に八毛るんですね」

思わず呟くと、一瞬間を見合わせた二組の双子は、これまた息ぴったりに答えてくれた。

「……偶然です(だ)」「……」

うわあ。説得力皆無。

疑わしすぎると訝しんでいるところに、期せずして無視する形となってしまうたお嬢様方が再び乱入なさいました。

「どういうこと?! お父様はまだご健勝でいらっしゃるのよ。なぜ悪魔などに代替わりしなければならぬの」

つんと顎を上げたその様子、お姉様の言葉に妹様も頷いているところを見ると、まったく退位の件をご存じなかったらしい。

当事者なのに、なんで? 首を傾げるとメトロスさんが、いつのまにか正面のソファ―にどかりと座つてめんどくさそうに口を開く。

「何度も話してるんだけどね、奥方様がお認めにならないもんだから、お嬢様方もこんな調子なわけ。ミヤが帰ってからだって繰り返し教えてやったのに、性能の悪い耳してるもんだから、都合の良いことしか聞かないんだよね」

「全くな。挙げ句に父親の権力を己の物だと勘違いしているから質が悪い。王の妻や子はあくまで通常通りの地位しか持たない。それを”様”づけで呼ばせているだけでも業腹だというのに、議会の決定を拒否するとはそれこそ何様のつもりなんだ」

同じくメトロスさんの隣に腰を下ろしたサンフォルさんも、言葉の端々に怒りを滲ませて盛大な溜息をついた。

その間もお嬢様方は2人の言葉にいちいち反応して騒いでいて、疲れないのかとこつちが心配になるくらいだ。

やっとわたしにも彼女達の立場が理解できた。つまり2人は総理大臣の娘、的な位置にいるらしい。

その時々で実力を持った人が王様になるって制度は、大統領や総

理大臣みたいなものに近い気がする。王様ってわたしに翻訳して聞いているのは、王宮があったりする関係上じゃないんだろうか。

ともかくそうになると彼女達が権力を笠に着るのは、確かにお門違い。その上、悪魔の方が劣ってるなんて言うのは、人種差別発言に近いものがある。

けれどそれが正しいと子供の頃から信じていた人達を、果たして正論で黙らせることができるのか。

怒れる美女、疲れ切った天使、どこ吹く風の悪魔を代わる代わる見て、思わず溜息をついちゃったわたしだった。

…本当に、面倒くさいわ、この人達。

36 人語を解さない人間と話すのは、とっても疲れる作業です（後書き）

長くなりそうなので、お話をぶっちぎりました。

37 後始末は辛くて痛くて当然です

だからといって、このままお嬢様方を放り出すわけにも行かない。なにしろ、部屋の中で2人を説得できそうなのはわたしだけなんだから。

メトロスさんやサンフォルさんにこれ以上の努力を強いるのは気の毒だし、端から戦力外のアゼルさんやベリスさんをやる気にさせる方が大変そうだもの。

そんなわけで、何を言っても怒られるだろう覚悟で口を開く。

「えっと、わたしが人間だとメトロスさんやサンフォルさんが伴侶だつて決めても、自分達が妻になれると思う理由はなんですか？」

スタート地点はここだつた気がしているんだけど、どうだろう？

予想は的中したみたいで、怒れるお嬢様方はしばらく矛を収めて天使というものが人間に比べていかに優れているかを揚々と語り始めた。

「人間は獣人達下等生物と同じ生き物です。節操なく男の方と関係を持ち、誰の子かもわからない子を産み落とす。特に雌は享樂に弱く、狡猾で墮落している。200年前に喚ばれた娘も己の欲望のままに何人もの天使と悪魔を毒牙にかけたのですよ。例え結果的に産まれた子が特異な性質と強い魔力を持っていたとして、それがなんだというんです。わたくし達のように、ただ1人を愛し慈しむ高らかな精神を持たない者の腹から出でた輩など、誇り高き天使を名乗ることさえおぞましい」

「そうですね。お前、サンフォル様とメトロス様がジャルジーの天使の中で、最も優れた力を持つと言われているのを知らないのですよ？それ故に人間などと望まない婚姻を強要されて、強き子孫を残すために犠牲になられるお2人の気持ちを考えてことがあって？

本来ならば美貌と知性、家柄を兼ね備えた良家の子女を娶ることができる方達の妻に人間如きがなつて良いはずがないでしょう」

完全に見下されて、啞然とした。

彼女達にとつては、天使以外は蔑みの対象でしかないのか。力なき者は差別の対象になつて当然なのか。

小さい島国では単一民族として育つたわたしには、酷いカルチャーショックだった。アメリカやフランスで人種差別の問題が取りざたされても対岸の火事だったけれど、実際面と向かつてぼろくそ言われると少し…ううん、かなり辛いものがある。

更に美人でないことや家柄のことまで論あげつらいられるんだからたまらない。自分で顔が選べて産まれる家が選べるなら、誰だつて彼女達のように恵まれた環境を選ぶだろう。

そうできないから、他の種族の人達は権力者の『エサ』にならざる得ない現状に甘んじているのに。

「人間だつて、本当は1人の人としか結婚しないんですよ？宗教によつては離婚を禁じているくらいで、年々離婚率が上がつていて言つても基本的に1度選んだつた1人と添い遂げることがほとんどなんです。それでも、天使より劣つてますか？」

200年前の人も、わたしも、だからこそ簡単に夫を増やすことができなくて困つているのに、他の種族の人だつて、これほど女性が少ないならなければ一生を同じ伴侶とだけ過ごす人だつているだろうに。

負けないよう顔を上げて、立つたままの彼女達を強く見据えると、鼻で笑われてしまった。

「既に夫を2人持つているお前が言つても、説得力がないわね」

美少女の嘲りは心臓に悪い。

確かにその通りだよ。わたしの今の夫はアゼルさんとベリスさん。うっかり勢いに乗つて結婚していたけれど、この状態で充分犯

罪である重婚だ。

結婚相手は1人だけと大見得切った後に発覚した事實は、結構なダメージポイントだった。

「ミヤがそう望んだわけじゃない。我々2人を夫にしてくれと、こちらが言い出したことだ」

がっくり頂垂れていると、ベリスさんが涼しい顔のままフォローを入れてくれる。

究極にへこんでいるところにさらっと入る助け船って、いいよね！ 拜む勢いで彼に感謝の眼差しを送っていたのに、あっちは全然容赦なかった。

「まあ、悪魔の言いそうなことです。妻を共有しようだなんて品のない」

……そうでした。彼女達は悪魔も嫌いなんです。

余計なことで旦那様方にまで暴言を吐かせる羽目になってしまったわたしは、もちろん落ち込んだ。盛大に己の軽率さを悔やみ、再び頂垂れる。

うっ、申し訳なくて2人の顔が見られないよう。

けれど、味方は当然やってくる。

「僕たちもミヤを共有しようとしてただけど？」

いつの間にやらカイルさんが淹れてくれたお茶を飲みつつ、お嬢様達をちらりとも見ずにメトロスさんが落とした爆弾に、顔色を変えたのは水色美女だ。

「ですからそれはっ！ 長老方がお決めになったから仕方なく、でしょう？ 本来ならメトロス様もサンフォル様も、好きな方を選ぶことができるというのに、わざわざ人間1人をご兄弟や悪魔と共有する必要はないじゃありませんか」

またまた正論です。涙が出ちゃうくらいその通りです。

メトロスさん達は彼女が言うように有能で力の強い天使の様です

から、わざわざわたしを選ぶ必要ないんですよ。やっぱり偉い人たちに子供を作るよう言われたんでしょかね？初対面は、確かにそんな雰囲気もあったし…。

静かに人間であることを悔やんでいると、いかにもバカにしたようにメトロスさんがそれを鼻で笑い飛ばした。

「冗談でしょ？力があるからこそ、あんなじじい共の言いなりになるわけないんだよ。でも、ミヤは1人しかない。先細りの未来を憂うことしかできない連中の思惑通りになるのはしゃくだったけど、彼女を欲しいと思ったなら、誰かと共有するしかないことはわかっていた」

始めの勢いはどこへやら、だんだんと自嘲を含んだ言い様になるのを継いだのはサンフォルさんだ。

「そうだな。少なくとも私達はその悪魔と違って、2人で1人の伴侶を持つなどという非倫理的な構想は抱いていない。けれど1つしかないものが欲しいのだから、現状は当然の結果だろうな」

ずくりと胸が痛む。

自分で言うのもなんだけれど、わたしには人に誇れる美貌も、驚くほどの性格の良さも、ずば抜けたスタイルもない。ど真ん中一直線の容姿と、長短バランスよく配合された普通の性格と、低めの身長に寸胴でない程度の腰と控えめな胸しか持っていないのだ。

ここにお集まりの美貌の皆様からは当然百歩も二百歩も劣るわけで、なのに生意気にもここまで自分を想ってくれるメトロスさんとサンフォルさんに失礼極まりないことを言おうとしている。しかも自分が軽率に了解したことを、更に自分の都合でひっくり返そうっていうんだから、これで罪悪感に逃げ出したくならないわけがない。

「あ、の、それ、なんですけど」

このタイミングで言っているのか、わからなかったけれど黙って

いることができなくて声を上げる。

途端に集まった視線に竦みそうになったけれど、逃げ腰になる自分を叱りつけた。

きちんと責任を取れって。

「お2人の妻になるっていう、あの約束…もう少し待ってもらえませんか？」

勢いよく言い切ると、途端にメトロスさんが纏う空気が冷気を帯びる。サンフォルさんは何を言われているのかわからないとでもいう風に、眉根を寄せていた。

「……………どういう意味？この人達のこと僕たちがイヤになった、そういうこと？」

くいつと顎で指されたお嬢様達はとつても不満そうだけれど、違つと首を振る。

「そうじゃなくて…あの、さつきも言ったようにわたしの国では、たくさん男の人と結婚するのは犯罪で、警察に捕まって刑務所に入らなきゃいけない罪だったんです。…言い訳になりますけど、ここでは重婚は当然だつていうこととあの他国からのお客さんのせいで、うつかり勢いに乗つてお2人と結婚するつて決めちゃいましたけど、実は全然気持ち追いついてません。子供産むのにそんなもの必要ないかもしれないですけど、どうしてもきちん好きになりきつていない人と、その……………そういうことするの、抵抗があつて…だから、このお話しはいつたん白紙に戻して貰うか、いつそ別の方を伴侶にすることを考えて貰えないでしょうか…………？」

ベリスさんに天使や悪魔の性質については聞いていたけれど、わたしが全面的に悪すぎる現状に彼等が愛想を尽かしたらその限りじゃないんじゃないだろうか。

そう考えてのお願いは、無言で立ちあがりこちらをちらりとも見ずに立ち去つたメトロスさんと、小さく辞意を告げて部屋を出たサ

ンフォルさんから、了承をもらえることはなかった。

「人間にしては、賢明な判断だったわね」

「たまには人の言うことを聞くのが、長生きのこつよ」

代わりにお嬢様達からありがたくないお返事を頂いたけれど。

立ち去る華奢な後ろ姿を見送りながら、当然の結果にわたしは落ち込むこともできず溜息さえも飲み込んだ。

37 後始末は辛くて痛くて当然です(後書き)

責任は、痛い。

38 悲劇のヒロインで居続けるのはとっても難しいのです(前書き)

本文中に女性にとって不快な表現が出てきます。
覚悟してお読み下さい。

38 悲劇のヒロインで居続けるのはとっても難しいのです

『がんばりましたね』って、アゼルさんもベリスさんも褒めてくれたけれど、気持ちは重いままだった。

だって、2人とも怖い顔をしてた。当たり前だけど、わたしの言っただけのせい。

それにベリスさんに『彼らは貴女を諦めないですよ』と、もう一度言われてしまったし。

けれど不謹慎なことに、その反応と『諦めない』っていう言葉に、どこか喜んでいて自分がある。

わたしなんかを好きだって言ってくれた彼等の手を、離したくない欲張りなわたしがいる。

なんて不誠実なんだろう。アゼルさんやベリスさんときちんと恋愛できるまで夫は増やさないと決めてたくせに、ほかの人まで望むなんて。欲張りで、卑怯だ。

自分の中の嫌な感情に気づいてしまったらアゼルさんやベリスさんの顔を見ていることが申し訳なくて、自室に引き籠ったわたしはオレンジに染まった部屋で自己嫌悪に沈む。

友達の彼氏が浮気したって聞いて憤っていたのに、同じことしてるとだよね。そりゃあ社会の仕組みから人種、法律に至るまで全く違う星にいるんだから、そういう考え方に変わってもおかしくないんだろうけど、一月とちょっと前にその仕組みを知ったばかりの間ががこの制度に染まるには早すぎる。

……もしかして、根本に浮気願望とかあったんだろうか…？

「わたし、最低」とか、思ってるわけ？」

声にしようとしたままの言葉が、急に背後から聞こえて驚かない人はいない。当然わたしもソファから転げ落ちるんじゃないかってほどびっくりして、勢いよく振り返った。

虎縞模様の髪と、ゆらゆら楽しげに揺れている尻尾。一月とちょっとぶりじゃあ、いつも悪巧みしてそんな顔は変わるわけもない。

「ジャイロさん……」

既に思考の海は定員オーバーだって言うのに、なんで今日に限ってこつても登場人物が多いのか。

頭を抱えているわたしとは反対に、至極楽しそうな大猫は足音もさせず、向かいのソファに腰を下ろす。

「なかなか楽しい展開じゃないか。最高だね」

「どつかで覗き見してたんですか……？」

詳細を知っているような口ぶりだから問いかけたのに、にやりと笑った彼は答ええない。

全く、どんな方法を使っていうんだろう。知っていたら絶対妨害してやるのに。

わたしの向ける胡乱な視線など気にしもせず、どこから取り出したティーセットで勝手にお茶を淹れたジャイロさんは、それをずずつと啜りながら「で？」と聞いてきた。

「……意味、わかんないんですけど」

いきなり出てきていきなり質問されたって意味不明だ。不満に声を尖らせると、不意に彼は黄金の猫目を細めて、幸せな女つとわたしを嘲った。

「君さ、あの時一緒に喚ばれた女の子達が、どんな目に遭ってるか知ってる？いきなり見たこともない場所に引つ張り込まれたと思ったら、商品でも選ぶみたいに男達に連れ去られ、選択権もないままたくさんの男に好きなように嬲られて、子供を産ませられるんだ。なにしろ繁殖のためだけに召還されているんだから、扱いはさんざ

んさ。なのに人間は特権階級の人間に保護され、贅沢な生活を保障され、自分の好きな男を選んで番うことができる。だが君はどうだ？元いた世界のルールとやらを持ち出して、この世界の男達を拒絶する。たかが夫を2人増やせと言われただけで、まるで悲劇のヒロイン気取りじゃないか」

低く静かに紡がれるジャイロさんの声は、それ自体に攻撃魔力が込められているかのように、一言一言が胸を抉る。

考えたこともなかった。あの時あの場所にいた女の子達の未来なんて。キレイだと褒めそやされ、次々男の人達と消えていった子達。そういえば彼女達がどんな表情をしていたのか、戸惑っていたのか嫌悪していたのか、それすらも思い出せない。

だって自分の不幸に、惨めさにどっぷり浸っていたから。美しくないと罵倒され、取り残されたわたしこそが、憐れな存在だと思っていたから。

けれど、ジャイロさんは幸せだという。選択権も拒否権もあり、自由に生きているわたしこそが幸せだと。

強く噛んだ唇から、鉄さびの味が広がった。

浅はかで考えなしの自分が悔しくて、自己保身しかしてこなかった少し前の己を殴り倒したくて。

彼の言う通りだ。何を悲劇のヒロインぶっていたんだろう。恋も愛も踏みにじられて生きるしかない彼女達に比べたら、わたしの悩みなんて毛ほどの価値もない。

嫌いな相手でないのなら、拒否するべきじゃない。一刻も早く女の子達が召還されなくても良くなるよう、悪魔や天使の食糧事情の改善に役立つべきだ。

「でっ」

再び同じ質問をしてきたジャイロさんの目は、笑っていなかった。

いつものふざけた様子も形を潜め、わたしの答えを待っている。

「……………元の世界でのことは…できる限り忘れるように努力します。今すぐ全部は無理でも、もうそれを持ち出してメトロスさんやサンフォルさんを拒絶したりしない。わたしにはたくさん子供を産む義務がある…そうなんでしょう?」

計ったようなタイミングで現れた男は、きつと何もかもを計算していたはずだ。

エイリスがわたしの未来を愁いてくれたように、彼は世界に、犠牲になる女性達に、心を寄せている。たくさんの人を助けるために、1人の犠牲を出すことを厭わずわたしを監視していたのだろう。

だからこそ、愚かな行動に出た人間を諫めるため、ここにいます。確信して尻いだ金の瞳を見据えると、ジャイロさんはちいさく頷いた。

「少なくとも4人、天使と悪魔の子を産んで欲しい。それだけいれば50年後、男女の比率は僅かながら改善される。何しろ特権階級だけあって、連中の数は著しく少ないからね。その間に獣人族、蛇族が増えていけばさらに結構というわけで、できれば僕を夫に、まあどうしてもイヤなら他の男を見繕うから、ともかく天使と悪魔意外にも、人間の血を混ぜて欲しいんだ」

爪の先ほども色気のない内容だが、この手のことを静かに真顔で言われるとちよつとだけ対応に困った。

とはいえ、綿密に練られている計画を無碍にできるほど、わたしの神経は太くない。一緒に喚ばれた子達の話しを聞いた後じゃあ尚更、否とは言えず頷くことしかできなかった。

「わかりました。頑張ります。確か昔の日本人は10人以上子供を産んだ強者もいたはずなんで、できたらその記録に挑戦できるよう、気合いを入れます」

ここにきて妙な使命感に駆られるのはどうかとも思うが、うじう

じ悩んで結果が出ない迷路にいるよりはずっといい。これも異世界召還物には外せないフラグだと納得すれば、いっそすつきりするっ
てものだ。

握り拳を突き上げたわたしに少々…いや、かなり呆れた表情を浮かべたジャイロさんは、小さく独り言を言ったのだけれど、悪口は聞き逃さない地獄耳がその音を拾ったのはあたりまえだ。

「…立ち直り早いなあ…ついでに切り替えも早い。さすがあの条件で喚ばれた女の子だけあるよね」

「なんですか”あの条件”で」

まだわたしの知らない条件とかあったわけ？！

さあ吐け、全部吐けと、形勢逆転した形で迫られているジャイロさんは、笑って煙に巻こうとしたんだけどそんなの許すはずがない言葉の刃でざつくざつくと傷つけられた恨み、お門違いだけここで晴らさずどこで晴らすってなものよ。

ぴくりとも表情を動かさず真顔ですずいと詰め寄ると、降参と呟いたジャイロさんがあきらめ顔で答えた。

「…神経が太い””っていうのも、召還条件なんだよ。だつて直ぐに泣き崩れるような子じゃ、生きていけないからさ。何事もポジティブに捉えられる女の子、素敵だよね」

「誤魔化されるか！」

最後の1文は余計だった。

もう今更なんだから、生きていけない、で止めといたらこんなに怒りは湧いてこなかったのに。

タイミング良く突っ込んだわたしは、取って付けたようにフオロ―をいれたジャイロさんをつっかかり殴ってしまったのだった。

大事なことを教えてくれたのに、この右手がうっかりすみません。

38 悲劇のヒロインで居続けるのはとっても難しいのでした（後書き）

切り替えの早さが取り柄です。

39 大団円ならぬ大混乱(前書き)

ミヤ、怒られる。

39 大団円ならぬ大混乱

「というわけで、我儘言うのはやめました!」

勢いがついたので、そのまま下の客間にいたアゼルさんとベリスさんに結婚もするし子供も産む宣言しに行っただんですが…なぜか2人とも非常に恐ろしい顔をしているんです、これが。

やっぱりまずかったんですね、しばらく3人でって言ったのをひっくり返したの。

戦々恐々、彼等の言葉を待っていると盛大なため息とともにアゼルさんが首を振る。

「来ていたのは、誰です?」

「は?」

「ですから、ミヤの部屋に誰かいたでしょう?さっきまで」

「何で知ってるんですか?!」

もしかしてアゼルさんもジャイロさんと同じようにわたしのこと監視してた?!って、うっかり怯えてしまっただけから気づく。

…そうだった、悪魔や天使の方が魔術師より魔力があるんですね。それにメトロスさんやサンフォルさんが天使の中で抜きんでて優秀だっていうなら、いつもライバル視されてるアゼルさんやベリスさんだって同等の可能性が大。

バレバレですか、バレバレですよ、侵入者がいたことなんて。

それなら隠さず素直に白状するのがいいだろうと、ジャイロさんの名前を挙げると途端に2人とも顔を顰めた。

「魔女ではなかったか。ならばすぐにも踏み込むべきだった」

「ええ、あの男はどこか胡散臭い。腹に一物抱えた人間特有の笑い方をしますからね」

声を潜めた双子の会話は、どこことなく剣呑だ。お隣の双子を貶す

ときだつてここまで殺気だつてないのに、ジャイロさんに対しては敵意むき出しではたで聞いていても十分怖い。

「あの、ジャイロさんに会ったらダメ、でした？」

「「だめでした」」

恐る恐る聞くと、ざっくり真顔で返される。

ジャイロさん、あなた1度しか2人に会ってないのに、どうしてこんなに評判が悪いんですか？

抑えきれない疑問は、彼らの口からあふれ出る理由によつてあつたという間に解決された。

「エイリスの息子という人物にあまりいい印象を抱けなかったものですから、あの後いろいろ調べたんです。けれど彼にはあまりにも謎が多い。魔術師としての才は疑いようもないのですが、調査のために放つた密偵は何度もまかれ、数日姿を見かけないこともざらでした」

苦虫をかみつぶしたようなアゼルさんの顔つて、珍しいんですよ？この旦那様はいつでも余裕があつて、にこやかですから。

「ならば実力行使に出てみよう、腕に覚えのある騎士を数人、話を聞きたいという理由で迎えにやっただんですがね、あのやしのよくな男に深手を負わされてしばらく使い物にならなくなつてしまつたんです。捕えることも話をすることもできない、なんとも不気味な魔術師です」

ベリスさんが忌々しそうに舌打ちするなんて、ありえなすぎてびっくりです。そりゃあたまに口調が崩れていることはありましたけど、基本的に紳士だったのにならうでしょう。

…どうもこうも、それだけジャイロさんが不審人物だつて事ですよ。ね。

よかつたのか、わたし？あの人の言うこと素直に聞いて。でもで

も一緒に喚ばれた女の子達が可哀相だつて思ったのは事実だし…でも。

そんな不安が掠めていたところで、アゼルさんに何があったか聞かれたものだから、正直に全部話した。

なんだか今日はこんな作業を2度繰り返しているデジャブに襲われたけど、間違っていないはず。日に2度の告白大会ですよ、ははは。

で、2人の反応なんですが。

「どうしてそう、いちいち流されるんですか、貴女は」

「少しは自分の意思というものがありませんか」

怒られました。静かにお説教が始まりました。懇々切々と、いかにわたしが他人の意見に左右されやすく初志貫徹できないのかを、付き合いの短い悪魔さんに教えていただいた次第です。

17年目にして本当の自分を知って、新鮮ですよね。

「誤魔化してもダメです」

遠い目をして新発見に思いを馳せて更に怒られる。

あ、ちよつとアゼルさんお母さんモードですよねえ。あはは………

「へらへらしないで、少しは自分の意思だけで物事を決めたらどうなんですか」

うっ… 厳しいです、ベリスさん。なにやらお父さんに反省を促されている娘の気分ですよ。

などと逃げ回っていても首根っこを押さえられているので、どうにもなりません。ともかく2人に自分はどうしたいのか、きちんと言うまで解放してもらえそうにない模様です。

「えーですから、女の子達より幸せなわたしは、ちよつとくらの

自己犠牲を厭うてはいけないと思う次第で」

「確かに選択権がないのは気の毒ですが、彼女達は基本的に獣人族や蛇族です。伴侶が替わったり複数いることを当然とする種族なんですよ」

あ、初耳ですそれ。

そんなオチがあつたのかと、教えてくれたベリスさんをマジマジ見てしまいましたよ。カルチャーショック。

「あーでも、人間の血が入った子供がたくさんいた方が良いでしょうね。だから旦那様もたくさんいた方がいいし、早くから産み始めた方が良くないかと」

「別に夫など1人や2人でも構わないでしょう。子供をたくさん産んでいただけるといふのは正直ありがたいですが、ミヤは自分がいくつだか覚えていますか？まだ17やそこらじゃないですか。休みなく妊娠してきたいのならあえて止めはしませんが、多少は体を休めないと身が持ちませんよ」

考えてませんでした…そうですね、いつでも双子や三つ子を妊娠するならともかく、通常は1度のお産で1人の子供。出産は体の負担が大きいっていわれているのに、そうぼこぼこ産めないですよえ。

現実的に止めてもらうと、やっぱり無理は良くないか思っちゃうわたし。

本当に、自分の意思がない。なんて流されやすい意志薄弱人間なんだろう。

あ、本格的に落ち込んできた。自分で自分が嫌いになっちゃいました。

三度みたひの説得にまたもや考えを変えた自分にさすがに呆れたところで、気の毒に思ったのかアゼルさんとベリスさんが厳しかった表情を和らげてくれる。

「…まあ、貴女の欠点も含めて好きになつたんですから」
「ええ、どんどん流されていつそ海まで漂着して下さい」
「お断りです。なんで海で遭難?! 無人島暮らしかできません」
「なにもそこまでしるとは…」
「言つてませんよ、私達は…」
疲れを滲ませる2人にいや言つたと、揉める兆候が出始めたところで開戦…とはいかないんだなあ。
中庭に続くドアがね、勢いよく開くんです。絶妙のタイミングで。

「ミヤ! 僕はやっぱり白紙撤回とか認めないから!」
「別の伴侶を見つけるのもごめんだ」
「目を覚まして下さいませ、メトロス様!」
「そうですね、あんな下等生物のどこがよろしいのですか、サンフオル様!」

本当に諦めませんでしたね、天使のお2人は。ついでお嬢様方も夜が始つても変わりなくお元気そうで何より。
燃える4人の天使を前に、いよいよ收拾がつかなくなってきたぞうと胡乱な目をしたのもつかの間、今度は背後から急に人の気配が現れる。

「ミヤ、大丈夫?! ごめんなさいね、バカ息子が酷いこと言つて」
「痛い、痛いつてば母さん、尻尾引つ張らないでっ」
「うるさい! あなた弱つてる女の子を利用するなんて、男としてどころか人間として最低じゃない」
「その辺は自覚があるんで安心して…つて、痛い痛い、本気で痛いから! そんな引つ張つたら抜けるでしょうが!」
「猫の尻尾がそんなに簡単に取れますか。つていうかあんたみたいに邪悪な男がこんな可愛らしいものつけるんじゃないわよ」
「酷いなあ。つけて産んだの母さんじゃないか」
「しょうがないでしょ。角の方が似合うのに尻尾選んだのはあんた

「なんだから」

「いやいやいや、胎児は自分の容姿とか選べないから……」
「なんか、漫才やってるし、あそこ」。

「ぎゃいぎゃい煩い客間で珍客を眺めているわたしは、これ全部に自分が関わっているのかと思ったら頭が痛くなってきた。」

「どつやって収めたら良いんですか？この騒ぎ。」

39 大団円ならぬ大混乱（後書き）

ミヤ、困惑する。

40 吃驚仰天、真実は小説より奇なり。

ともかく、五月蠅い一同を黙らせて客間に座ってもらったわけですが、なんて言いましょうか…一言で表現するなら、

「険悪」

ああそうです、そんなですジャイロさん。

でもですね、ふんぞり返ってやっぱり自分で出したお茶飲んでる貴方も、空気を悪くしてる一員なんですよ。ほうら、エイリスに叩かれた。

長椅子の片方にアゼルさんとベリスさんに挟まれたわたし。

正面にはジャイロさんとエイリスと、何故かお嬢様方が並んで座り、左右に向き合うよう配置された1人がけソファアの右はメトロスさん、左はサンフォルさんが現在のテーブルを囲む面々です。

皆さん決して笑ってません。不機嫌全開で無言のまま、もう5分は経過したでしょうかね。そこにさっきのジャイロさんの発言が口火となり、止まっていた時間が進み始める模様です。

最初に動いたのはエイリスでした。

「ミヤ、このバカに言われたことは気にしちゃだめよ。喚び出された女の子たちの中で、貴女だけが恵まれているとかはね、ないの。そこの天使の娘を見てもわかるように、特権階級の連中は種族が違う者たちをまるで物のように扱う。それは獣人も蛇人も人間も同じで、彼等とかかわらずにいられないミヤの方がよっぽど嫌な目や大変な状況に陥ることが多い。だって他の子たちは、最初こそ訳も分からず取り乱しても、後は大切に守られて天使や悪魔に会うことなく一生を送れるんですからね」

にっこり笑ってバツサリ他人を斬るのは、血筋だよな。ジャイロさんとよく似てる。

もちろん話のネタにされたお嬢様方は頬を紅潮させて何事かを言おうとしたところで、喉を抑えてパクパク金魚みたいになっちゃったけど。

「…なんかした？」

「うるさいから黙らせた」

何でもない事のように言い放ったのは、ジャイロさんだ。相変わらずお茶を飲んで我関せずを貫いているように見えるけど、魔力が上のはずの天使を黙らせるってすごいんじゃない…。

「上層部にいるような連中ならともかく、金と権力と地位にしか興味がない無能女がどうして僕に勝てる道理があるんだよ」

まるでわたしの心を読んだかのようなジャイロさんのお答え、不気味です。ついに出ない声でなお一層騒ぐお嬢さんたちも不気味です。

「偉そうに言うんじゃないわよ。あんただって乙女の行動を覗き見するような最低男じゃない」

けれどそんな彼もエイリスの突込みには黙秘権行使で、だんまりを決め込んでるんだから力関係って面白い。

「あ、その術維持しておいてもらえる？ 僕らは王がああの地位にいる限り彼女たちに手が出せないから、迷惑してたんだよね」

「ああ、ほとほと参っていたところだ。助かる」

そしてジャイロさんにお礼を言うお隣の双子たち。

結婚する気はないって意思表示以外、強硬手段に出ないと思ったらそれなりの事情があったらしい。

見上げる目線でアゼルさんに問うと、彼は教えたく無くなかったんですがと前置きしてから説明してくれた。

「本来の地位云々はともかく、天使族にとっては現王が最高権力者ですからね、悪魔の我々より彼に対する忠誠と服従を誓わされてい

ます。そうなると奥方やお子様方の扱いもなかなか面倒なものがあ
りまして、多少失礼な言動は許されても実力行使となると難しいも
のがあるんですよ。ですから無碍に屋敷から追い出すこともできず、
周囲から追い払うこともできない。未だに彼女たちに彼等が付きま
とわれているのはそんな理由です。こちらとすれば一族のいざこざ
に巻き込まれていくれば、ミヤの周辺が静かでもいいと思っただ
んですが、あの魔術師余計なことをして……」

小さく聞こえた舌打ちは、スルーの方向でいきましよう。

ともかく、メトロスさんとサンフォルさんが面倒な立場にいるつ
てことはわかりました。お嬢様方がここにいる理由も同時にわかっ
たし、この短時間で何とも実りの多いこと……って言いたいんですけ
どねえ。

疑問だつてあるんですよ。そりやもう、山ほど。

「エイリス、ジャイロさんがわたしに何を言ったか、どうやって知
つたのかな？もしかしなくても親子揃つて覗き、してたでしょ？」

「え〜あらやだ、おほほほほ」

「笑つても誤魔化されないから」

しらばっくれる気さえないのか、白々しくおほほほほとか口に
手を当てちゃうエイリスを睨んで、叫びたいところをぐつと飲み込
んだ。

人のプライバシーをなんだとおもつてるんだか、この親子は！

かなり腹は立ったけど、あえてそれを出さなかったのは、ジャイ
ロさんともかくエイリスは親心からやったことだろうなと推測で
きたからだ。

なにしろ、自分の息子を引っ張ってきた時の様子は本気で怒つて
いたし、今だつてわたしは遠慮なくアゼルさん達に甘やかされてい
て良いんだつて、フォローまでしてくれている。

珍しくて利用価値の高い人間を喚びだしちゃった責任を、エイリ

スはエイリスなりに感じてくれているのだ。間接的になつたとしても、護ろうとしてくれている。とっても嬉しいことだ。

だからわたしは怒った風を装いながら、笑っていた。気づいた彼女も苦笑いを浮かべていて、のぞきに関しては解決した感がある。

息子は別ですけど。

「今後もエイリスがわたしを見ているのは構わないけれど、ジャイロさんの方はやめさせてくれないかな？」

「えーえー勿論よ。今度そんなことしたら、尻尾ちょん切ってやるから安心して頂戴」

「ちよっ！そんなことしたら、まっすぐ歩けなくなるだろう！というより、なんで母さんは僕の尻尾にばかりこだわるんだよ」

「あんたについてるのが気に入らないからよ。私の方が似合うじゃない、尻尾」

そのあと延々と尻尾談義で騒いでいる2人は放っておくとして、次は身振り手振りで騒いでいるお嬢様達と天使の双子の番だ。

結婚するにしろ待つてもらうにしろ、彼等が彼女達とのことをはつきり決着つけてくれないと困ると思っていたんだけど、アゼルさんの話によるとその辺は近々、つまり王様が退位したら解決すると思つて良いんだろうか。もう回りくどいのは面倒なんで、ストレートに聞いてみると2人は迷いなく頷く。

「王が替われれば一族の序列も替わる。元々は僕たちの父が王座に就くはずだったのに、苦勞を背負い込むのはイヤだとか勝手なこと言つて国外逃亡したせいで起こつた事態だ。実力的にはブランド公爵家に何かを命じることは不可能になる」

「そうだな。重職にあるご老体も私達の決定に口は出さないだろう。なにしろ1番望ましい結果だ」

へーと納得しながら、疑問も1つ。

「あの、ブランド公爵家ってどちら様ですか？」

話の流れ的にもしやと思ったりするけれど、確信できないままでいると碌な目にあわないから一応確認を取ってみると、

「我が家だ（よ）」

と、きれいにハモって頂きました。

そうか、やっぱり家名ってあるんですか、ありますよねそりゃあ。因みに旦那様方にもファミリーネームをお聞きすると、ベリスさんが対抗意識ばりばりの様子で教えて下さいました。

「クローザ公爵家です。蛇足ですが家に両親がいないのもあちらと同じ理由で国外逃亡したからですよ」

「ですか…。となるとあれですか、次期王候補はアゼルさんやベリスさんなんですか？」

王様の奥さんとか、お断りですけど！

ちよつぱり青くなりながら聞くと、またまた美しくハモって下さいました。

「まさか。面倒ごとはお断りです」

…いいんですか、そんな理由で。いいですよね、実力ありますものね。ははは。

こんな大事なようできてあまり身のない会話の中、取り残されたお嬢様達は騒ぐことをやめ静かに腰を下ろしてしまっていた。

ふと覗いた顔は青ざめ、紅色の唇をかみ切るんじゃないかと心配になるほど噛みしめる姿はとつても憐れで、渋るジャイロさんと天使双子を説き伏せて声が出ない術を解いてもらう。

途端にわめき出すんじゃないかと半分覚悟していたのに、彼女達から零れたのは小さな小さな呟きだった。

「ですから、急いでいましたのに。お父様にお力がある内に、メトロス様と結婚したかった」

「わたくしだって…サンフォル様に相手にされていないのはわかっ
ていましけれど、王の娘であれば僅かながらの希望でもありました
ものを」

2人にあつたのは…権力欲でもプライドでもない、切ない切ない
恋心、だったんだね。

41 やつと一息つけそうです

「本当は…何もかもわかっていたんです」

すっかり大人しくなつてしまったオファイエル様は、疲れたようにソファ―に身を沈めると打つて変わった殊勝な様子で自分の置かれた現状を認めた。当然、セフィーラ様も同意して首肯する。

「お母様がお認めにならなくても、重臣たちは皆、城から出る用意をするようあからさまに言つてまいりましたし、これまで嫌いほどに纏わりついていた者たちも姿を消しました。これで自分たちはまだ安泰だと思えるほど、わたしのおめでたくはありませんのよ」

それでもわたしに向けられる視線から険が消えることがないのは、ある意味立派だと思う。だってそれは圧倒的不利なこの状況でも、勝負を投げてないって事だから。一縷の望みにも縋つて、欲しい物を勝ち取るうとする貪欲さは、中途半端なわたしには羨ましい一途さの表れでもある。

「けれどもやはり、人間如きにメトロス様を奪われるのは我慢なりませんわ」

…って、褒めようとしたらこれだもんなあ。なんでこう、人種差別発言が消えないのか、身分制度が崩壊して久しい日本の小市民としては、理解に苦しむ限りです。

きつい視線に晒されて、こっそり溜息を零せば聞き止めたエイリスが諦めると言わんばかりに苦笑いを零す。

「ミヤは自分が食べている肉が元は何の姿をしているか、考えながら食べる？その肉が自分と同じ言葉を話すからと同じ人権を認める？天使や悪魔が他種族を見下す理由はそこなの。これは理屈でどうにかなるものじゃないでしょ？」

…確かに。わたしはお肉も食べる雑食代表の人間だけど、牛や豚や

鳥を可哀そうだと思いなから食事したことは：あんまりない気がします。ただこの星に飛ばされて羊っぽい人とか牛っぽい人とか見るにつけ、人語を話して意思疎通ができる相手は食べられないなあとか思いますが。それを理由に差別しようとかは思いませんけど。でも、ずっと『エサ』は自分と同列に置けないと教えられてきた人たちの感覚は、牛や豚を食べて可哀そうだと思わないわたしたちのそれに似ているのかもしれない。

だから、人間ごとき発言はズーッと消せないんだね。いやむしろ『エサ』を妻にできるアゼルさんとベリスさんが特殊だったり？

疑問ともに見上げた先で、2人はにっこり笑ってそんなわたしの不安を払しょくする。

「私たちにとってミヤは、大切な女性ですよ。確かに『エサ』として扱ってしまうこともあります、全てに愛があります」

「もちろん他種族の方も『エサ』だという意識で接したことはありません。両親がそういう考えを嫌いましたし、搾取する側ではありませんがそこに階級意識を持ち込んだことはありませんから」

アゼルさんとベリスさんを育てたご両親、ありがとう！思わず拳を握ってしまいましたよ。

ただエイリスがああいう以上、この考え方はマイノリティだと理解はしている。でもだからこそ、2人が好きだと言ってくれる言葉を頭から信じることもできるのだ。

彼らはちゃんと、わたし自身を見てくれている。人間という付加価値を取り払うことはできないけれど、人権を認めただけで好きでいてくれるって。

嬉しくてニマニマしていると、左右から面白くなさそうに同じ宣言が聞こえた。

「うちの両親も同じ考えだったから。なにもアゼルニクス達だけが、偏見を持ってないわけじゃない」

「当然私たちも彼等と同意見だ。とういうより、天使族悪魔族の中にはこのように考えている者は意外に多いんだ」

それはなかなか希望に満ちた答えに思えます。いいですね、差別のない社会。人間みな平等！

……ま、理想論ですけど。そうできたら世界から戦争はなくなるわけですからね。

なんてグローバルなことを考えつつ、一応周囲にいる人たちの目は温かいことに力を得て、わたしは正面でなお敵意むき出しのお嬢様方に真正面からぶつかってみることにした。

多分、この星で生きていく限り必ず出会っただろう偏見の、まさに急先鋒たる彼女たちとは自分でぶつからなきゃいけない。アゼルさんやベリスさん、メトロスさんやサンフォルさんに守ってもらったとは簡単だけれど、それじゃあ一生誰かの陰に隠れて生きていかなきゃいけないってしまっから。

「天使の方たちの結婚制度は、わたしの世界にある結婚制度の1つによく似ています。そこでは宗教的理由から重婚はおろか離婚も許されないんです」

じつと見据える先の表情は変わらない。相変わらずこちらを1段下に見て、だからなんだと言わんばかりの様子だ。

「時代的に考えて200年前に召喚された女性は、この教義、もしくはそれに近い教義を教える宗教に身を置いていたと思うので、ここの考え方を受け入れるのはとても苦労したことは想像に難くないです。先ほどもいいましたけれど、わたしも宗教ではなくて法律として重婚が禁止されている国から来たので何人も夫を持つのが普通だと言われてもなかなか受け入れ難かった。ですから結婚観が違うと言って人間をバカにするのはやめてくださいませんか。それと他の種族のあり方や考え方を批判するのもダメです。全部を自分の知っている枠に嵌め込もうとするのは、とても浅はかなことなんで

すよ？」

勢いに任せて思っていることを言いきったからうまく伝わったのか不安だった。だって彼女達の様子は変わらない。むしろ怒りを増して恐ろしいくらいだったから。

でも他の人たちは違った。皆神妙な顔をしてわたしが言ったことを考えてくれているみたいで、中でも一番表情を曇らせたのはジャイロさんだった。

彼だけが人間は夫をたくさんもたなければならぬと強要してきたのだから。

勿論それにはきちんと理由があつて、彼なりの信念から出た言葉だったのだろうけれど、あれだって彼等の一方的な都合だ。わたしがそれについてどんな風に考えるのか感じるのか、全く考慮していない言い分だ。

バカだからうつかり言いくるめられてこの世界を救う手助けがしたいなんて考えたりもしたけれど、アゼルさんもベリスさんもここまで自分を殺す必要はないといってくれた。エイリスもジャイロさんをしっかり飛ばしてくれた。

けれどジャイロさんがあんなことを言いだしたのも、オフィエール様やセフィーラ様が言いたい放題なのも、はっきり意思表示しないわたしに多少なりと非がある。

誰かが庇ってくれるのを待つばかりじゃなく、きちんと自己主張だけはしないとイケないのだ。

「ならばそうすればいいのよ。悪魔の夫だけで満足でしょう？」

「はい、満足です」

セフィーラ様の強い口調に迷いなく頷ける程度に、わたしの倫理観は正常に機能している。だがそれとは別の奇妙な義務感というのも同居しているから厄介なのだ。

メトロスさんやサンフォルさん、ジャイロさんまでもがこの発言

に異を唱えたが、そこは笑顔で押しとどめ、続きを口にした。「でも、それじゃあ天使族が納得しないと思います。なにしろ人間の血を混ぜれば、減らない食料となる突然変異種を手に入れることができるわけですから。違いますか、メトロスさん？」

大人しく黙っていた彼に顔を向けると、不満そうに彼は頷き、途端に2人の女性は騒ぎ出す。

「だからメトロス様を夫にするてもいいうの？」

「サンフォル様以外の天使が夫でも、一族は何も言わないわ！」

「僕たちが構うんだよ」

「そうだ。ミヤを他の天使に任せるなど、ごめんだ」

「でも！」

「わたしも、全然知らない天使さんを夫にしると言われるより、よく知っているメトロスさんとサンフォルさんが相手の方がいいです。

…2人が数年待ってもいいと言ってくれるなら」

お嬢様たちの言葉を遮って意思表示すると、メトロスさんが眉を跳ね上げる。

「…それ、どういうこと？なんで年単位で待たなくちゃならないわけ？」

あきらかに上がった不機嫌ボルテージに少し腰が引けるけれど、まさにここが言いたいところなので逃げているわけにいかない。

ぐつと膝に置いた拳に力を込めると、そこに左右から大きな手が重なった。

「がんばって、ミヤ」

「大丈夫ですからね」

見上げた先の微笑みにこもった優しさに愛を感じて、気合を入れなおしたわたしはきちんとメトロスさんに視線を合わせると頷いた。「はい。少なくとも私がアゼルさん達の子供を産むまで、待ってもらえませんか？その間にもっとよく、お2人のことも知りたいんで

す
「

長い長い沈黙、
そしてわたしの願いは叶えられた。

41 ずっと一息つけそうです (後書き)

これにて第一部終了です。

1 殺し屋さんとお茶会のお誘い

大騒ぎが一段落して、わたしの生活は少しだけ変わった。

約束通り当分旦那様は悪魔の双子だけで落ち着いたんだけど、メトロスさんとサンフォルさんとよく知り合いたいって大前提があったものだから、生活拠点が分散されることになったのだ。

基本的に夜帰るのはアゼルさん達のお屋敷なんだけれど、日中はお隣にすることが増えた…というより月の半分近くはお隣で過ごしている。

朝ごはんをアゼルさん達と一緒にメトロスさん達のお屋敷で食べて、日中はリワンさんに世話を焼かれ、夕ご飯までいただいでから連れて帰られるかお迎えを待つか、まるで保育園児のように誰かに預かってもらう、そうして残りの半月はこれまで通りカイクさんに世話を焼かれて過ごす。

最初の内はこの状態に不満はなかった。

なにしろ上げ膳据え膳の上に誰もがわたしを甘やかして、優しく丁寧に扱ってくれる。まるでお姫様にでもなったような気分で、ご機嫌に過ごしていた。

だけど半月もすれば贅沢に、飽きる。それはもう贅沢すぎる不満だが、贅沢に飽きるのだ。

欲しいのは自由。中でも勤労の自由と行動の自由はいかにしても勝ち取りたいものだった。

外出はどっちかの双子が一緒じゃなきゃ許してもらえないし、たまに来るのがエイリスとジャイロさんだけじゃあストレスだって溜まるでしょ？

更にテレビもネットもマンガもないんだから暇つぶしと言ったら読書しかないわけで、あんまりにもインドア過ぎるからせめて体を動かして運動不足の解消を試みようとお掃除のお手伝いを申し出

たら、全身全霊を込めて丁重にお断りされてしまった。

これって暇すぎるでしょう？やることなさ過ぎでしょう？軟禁だーって叫びたくなるでしょう？

でも誰もわたしの主張なんて聞いてくれないんです。アゼルさん曰く『大事な妻で希少な人間で、あまりにも世間を知らない貴女を自由にさせることは、夫としてできかねます』なんですよ。

それって横暴だよ。優しいけど、ちっとも優しくないよね。

けれど腕力でも魔力でも彼等過保護ブラザーズに勝てる筈もなく、今日もわたしは悪魔のお屋敷で大人しく引き籠もってるわけです。

なのでお客様は大歓迎、なんだけど。

「あの、どちら様ですか？」

退屈にあかせて魔術書に載っていた怪しい薬品を調査していた手を止めて、正面にいきなり現れた人物に首を傾げる。

全身黒づくめで顔の下半分を布で隠し、青みがかかった金髪とくすんだ灰色の瞳、褐色の肌の男の人が正規の訪問者じゃないことはわかるけれど、急にこの部屋に現れたことがわからない。

なにしろここにはアゼルさんとベリスさんが特別製の結界を張ってくれている。外部から許可なく侵入することは極めて難しのだ。

…ついでに、いかにも斬れそうな小型のナイフを両手に持っている理由は、わかるけれどなんとなくわかるかけに、わかりたくない。なのでとぼけて聞いてみたっていうのに、正面の人物は空気を読んでくれなかった。

「お前を殺しに来た」

予想済みの答えだけに、衝撃は少ないですが反応に困ります。

「ご多分に漏れず高い身長とわざわざ作っているとも思えない低い

声が、とつても威圧的で非常に真実味を加えてくれるからなお困る。「えっと、お断りしますっていうのがいいのか、なぜって聞くのがいいのか質問に苦慮するところなんです、どうしましょう?」

「断られても困るが、なぜかと聞かれれば依頼されたからとしか答えようがないな」

敵は律儀な方の方です。これから殺そうっていう相手の質問になど答える義務はないでしょうに、困惑した口調ながらも返事をしてくれましたから。

けれどこれではつきりしました。この方、お金で雇われた殺し屋さんのようです。

ならば対抗策があると、1メートルほど先に佇む彼に提案を持ちかけてみた。

「ではその依頼、わたしに倍額で買い取らせていただけませんか? 個人的に八つ裂きにしたいほど憎いと言われちゃったらどうしようかと思っただけですけど、お金で雇われたならそんなのもありじゃありません?」

ここで頷いてくれないかなあと、微かな期待を持って見つめるけれど強い視線は揺るぐことなく、静かに首が振られた。

「ありえないな。我々に殺人を依頼する連中は大抵が金持ちだ。そしてターゲットにされる連中も金持ち。彼等の命乞いをいちいち聞いていてはこの商売は成り立たなくなってしまう。それでも信用商売なんだ」

「うっ…ぐうの音も出ないほどの正論ですね、それ」

ちょっと考えれば行き着いたはずの答えに、思わず眉根が寄る。確かにいちいち殺し屋が買収されていたんじゃないか、いつまで経ってもお仕事が完遂できないだろう。なにしろあつちで依頼され、こつちで買収され、更に倍額で依頼され、またまた買収され、じゃいたちごっこだ。終わりどころがわからない無限ループに陥ること請

け合いだ。

「まるで卵が先か鶏が先かの終わりなき議論… そうだ、因みにお兄さんは鶏と卵どっちが先にあっただと思えます？」

「… 質問の趣旨がまるで掴めないが、親がいなければ子は産まれないのでないか？」

「でも、子が大きくならなきゃ親はできませんよ？」

「確かに。しかし親がおらねば子は産まれまい」

うーんと、何故か2人で考え込みつつまたまた思ってしまった。

なんて律儀な人なんだ。こんな戯言に付き合っ一緒に頭を悩ませてくれるなんて、きつと殺し屋さんって肩書きを外したらいい人であるに違いない。

1人完結で納得したら妙に親近感が湧いてきて、思わず椅子を勧めてしまった。ついでにお茶を飲むかとも聞いてみたんですが、

「君は正気か？これから殺そうという者と殺されようという者が向かい合って茶など飲むわけがなからう」

さすがに却下されました。すっごく呆れた表情付きで。

それはそうだ。そんな馴れ合いを希望する奇天烈な被害者はそうはいないだろう。

だけど殺し屋さんに命を狙われるなんて非日常、あまりに現実感がなさ過ぎて緊張感がついてこないのだ。この人も意外にフレンドリーだし。

思わずお客様をもてなすスタンスになってしまったのは、許して欲しい。

「ですよねえ。うーんでも、大人しく殺されるほど悪いことをした覚えがないので… というか、そもそもわたしこの世界で知っている人が1人2人… ーんと、10人位なんですよね。恨みを買うとすればこの人達の中の誰かって事になるんですが… すいません、なんとなく犯人がわかりました」

頭を整理しながら話していて、瞬間的に犯人に心当たりができてしまう辺り、本当になんて残念な人達なんだろう。わたしの言葉に探るよう目を眇めた殺し屋さんに苦笑して見せながら、多分犯人であろう方々の名前を唇に載せた。

「オフィエール様とセフィーラ様からの依頼ですよね？恨まれてるって言ったらこの2人しか思い浮かばないんです。後は人間を嫌っている悪魔とか天使だと思っんですけど、そうなるとうわたしの乏しい知識じゃ調査不能かな」

どうでしょうと問いかけると、一瞬沈黙してから彼は、

「…答えられない」

とほぼ肯定のお返事。

ですか、お2人とも殺したいほどわたしがお嫌いですか。…うん、嫌いだろうなあ。恨まれて当然か。

「了解です。でも、やっぱり黙って殺されるわけにはいかない気がするんですよね」

「…そうだな。君は何故だかこれまでの連中と違って、殺されうる理由がない気がする」

抑揚のない声でこう返されて、びっくりしたのはわたしの方だ。

思わずさして大きくもない目を限界まで見開いてしまったくらいに殺しに来たくせにこんなこと言っていていいんだろうか？というかもっとビジネスライクにお仕事をこなさないと、それこそさつき彼自身が言ったように依頼が来なくなる気がするんですけど…。

思わずいらぬ心配をしてしまったもので、さっき断られているというのに再びお茶と席を勧めて…今度は逡巡の後、差し向かいでお茶会を始めることになってしまいました。

えーっと、大丈夫なんでしょうか、わたし？

1 殺し屋さんとお茶会のお誘い（後書き）

やっと最後の1人が出せました。
名前出てませんが…。

2 禁句と無知とはミヤをも殺す

うつらかな日差しの中、ちっともうつらかじやない人物と静かにお茶を飲むって、なかなかスリリングである。

「あの〜、お口に合いますか、それ」

「ああ、毒は入っていないようだな」

意外にも美し所作でエイリス特製茶を啜りながらの一言に、ちよつとだけ関西ツツコミ魂が首をもたげた。

入ってるかそんなもんっ！殺し屋じゃあるまいに。

あ、殺し屋でしたね、この方は。

口元の布をずりつと下に下げて隠していた顔を露わになさった殺し屋さんは、エキゾチックなイケメンだった。

お名前をレリレプトさんと仰るそうな彼は、無表情な上に感情が欠落しているんじゃないかなろうかと心配になる言動が多い。

さっきの毒云々もそうだけれど、互いに自己紹介しましょうと提案してあっさり名前を教えてくださいちゃうから、素性がばれて平気かと尋ねれば『知った相手を皆殺せば良い』との簡潔すぎるお答え。

殺しちゃダメです。都合の悪いものを端から消していったら、世の中びっくりするくらい人口が減っちゃいますよ！

こんな当たり前の窘めさえ『風通しがよくなりそうだ』で済ましちゃうって、色々大事なもの無くしちゃってる感じですよね〜。

そんなわけですから適温のお茶をコクリと喉に流し込みながら、さてどう会話をかみ合わせようかとわたしの脳はフル回転中です。ともかく無難な話題で繋がないと、こっちが先にシナプス焼き切れそうです。

「あ〜え〜レリレプトさんは、なんて種族なんですか？」

じっくり検討した結果、1番妥当な質問をしたつもりだったのだ

けれど、冷たい上に殺気まで帯びだした無表情に悟りたくないことを悟る。

地雷、踏みました！

今なら視線で殺されうる気がするわたしは、まずいまずいを胸の内ですり返しつつどこが不味かったのか考えて考えて…思い至った。

「すみません、ごめんなさい！悪気はなかったんです、ただ無知なだけだったんです！！！」

必死に頭をさげ倒しながら、以前聞いたメトロスさんの言葉が脳内で反響していた。

『凶悪な暗殺者』になっている天使と悪魔の間に産まれた子供。

種族を問われてこれほどの怒りを発するのなら、そして己を暗殺者だと称するのなら、彼は間違いなく両親が違う一族のはずだ。

闇の中に隠れ住み、誰からも受け容れられずに殺すことを生業とするしかなかったのなら、無表情も無感情も大いに頷ける。なにしろ彼等に優しく接する人は、この世界に皆無だったんだろうから。

今日ほど自分の記憶力の悪さと、無神経さを呪ったことはない。

ひたすら頭を下げながら、これで殺されるなら仕方ないかなと思っていた時だ。

「…天使の館に住み、自分を無知だというのか。その辺の子供でも知っている我々の特徴を見て尚、種族を問うことを無知だと謝罪する、お前は何者だ」

えっと顔を上げると、無表情に輝く灰色の瞳が純粹な疑問をわたしにぶつけている。

誰も教えてくれなかったけれど、彼等には何か身体的特徴があるんだろうか？

はてと首を傾げて、思い当たったのは肌の色だけだった。

基本的に白人と黄色人種で占められているジャルジー国（他の国

にはどんな肌の色の人がいるか知らない)で、褐色の肌というのは初めて見た。

酷く単純な色の足し算をすれば、白と黒を混ぜて褐色ってことがないわけじゃないと思う。だけど、アゼルさん達やメトロスさん達はあきらかに白人だ。2つを混ぜたからって、褐色の肌になるワケがない。

何が違うんだと思い悩んでいると、じれたようにレリレプトさんは答えを投げつけてきた。

「目だ。この灰色は他のどの種族にも出ない。天使と悪魔の血が混じった者だけが持つ、特別な色なのだ」

それは初めて知ったと、マジマジと灰色の瞳を眺めていて気付いた。

これ、ただ灰色のワケじゃない。うつすら光を反射して輝く…銀みたいなシルバーグレイだ。

「へえ…すごですね、銀色の目とかちょっと羨ましい…」

独り言のように呟いて、再び地雷を踏んだことに気付いた。

バカーわたしのバカーっ!!その目玉のせいで苦しんできた人になんてこというかな、自分!無神経だ、マジに神経が切れているとしか思えない!!

「再び三度すみません!!お嫌ですよね、その色。褒められたらイヤミですよ、本当にわたしってバカですみません、すみませんっ」

もういろいろ謝ったくらいじゃどうしようもなければ、ともかくごめんなさいは基本だと教育されて生きてきたわたしは頭を下げ倒した。お茶の載っているテーブルに額をすりつけて謝罪した。

どうして口を突いた言葉は返らないんだろうと、泣きたくなるくらいの後悔を抱えて。

「我々を羨むとは、どれほどおめでたいのか。お前、召還者なのだ

な」

侮蔑と諦めと怒りと、様々な感情をない交ぜにした声にちいさく頷くと、オフィエール様達が彼に教えていなかったらしい自分の素性を正直に告げた。

『人間』です、と。

で、再び凍る空気にもう怯える気力すら残っていない。

殺気はないけれど、光る銀の瞳は明らかにわたしにロックオンされている気がします。これってあれですか？無尽蔵のエサ、みーつけた！みたいなノリ？

じりつと距離を詰めてきたレリレプトさんから同じだけ身を引いたのは、防衛本能の成せる技だ。

そりゃあわたしだって疲れることもお腹空くこともなく感情を提供できるなら、様々な人に分け与えて食糧危機からこの国の皆さんを救ってみたいとは思いますが？思いますが、現在結構限界なんです。

悪魔と天使4人は賄うのにぎりぎりの数字です。この上といわれれば、1人2人…うーん、やっぱり1人が限界。どんなに頑張ってもそれ以上は無理です。

ということですから、申し訳ないと思いつつもぶるぶる首を振っておいた。

「現在、悪魔と天使を4人ほど養っていますので、あ、金銭的な面じゃなく精神的な面で。揶揄じゃなく精神で。そんなわけで、スラムのレリレプトさんのお友達とかその彼女とか更にその友達とか、食べさせてあげる余裕ないです。限界、無理」

「だが、人間は狂わず生涯『エサ』を提供できるのだろうか？」

「できますが許容量くらい考えて下さい」

テーブルを回り込んだレリレプトさんが大股で互いの距離を縮めてくるのに、わたしは無駄と知りつつ空気の玉を放って扉へダッシ

ユした。

悪魔や天使には到底敵わない微々たる魔力ではあるが、足止めくらいにはなるのだ。…ほんの数秒だけ。

でも、これだけあれば十分すぎるほど時間は稼げていて、ドアノブに手をかけたわたしは…凍り付いた。

なんで？なんか開きませんが、ここ。

「無駄だ。標的と考えもなく無謀に茶を啜ると思うか？結界くらい張っているに決まっているだろう？」

背後から近づく声にじっとりと手のひらを汗で濡らしつつ、振り返って最後の手段に出ることにした。

どうか気付いてくれていきますようにと、迫り来る無表情から目を離さず声の限りに叫ぶ。

「エイリス！！覗いてるんでしょう？！ついでにジャイロさん！貴方も絶対覗いてるはず！助けて」

わたしの監視と保護を約束してくれたエイリスと、ダメと言われたら絶対にやる気まぐれ我が儘マイペースのジャイロさんが、この部屋の異変に気付いてどうぞ結界を破ってくださいますように！

ばくばく五月蠅い心臓を宥めながら迫り来る恐怖に震えていると、声から数秒と空けずにするりと2つの影がわたしとレリレプトさんの間に降ってくる。

「酷いなあ。少しは品行方正なジャイロさんって、評価を書き換えておいてくれないかな」

「本当のこと言われて怒らないの。ごめんなさいね、ミヤ。少々結界を解くのに時間がかかったちゃって」

ちよつと意地の悪いチェシャー猫と、信頼に足る師匠が来てくれた。

たちまちわたしの心臓は、落ち着きを取り戻したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0452v/>

キレイの定義

2011年10月25日00時14分発行